今般出軍中日誌

（表紙）

明治十年丑旧八月

今般出軍中日誌　遠竹行方

丙子旧十二月廿五日　晴天　丑二月七日

今旦早天米之津町之様可出段（出水麓）麓ヨリ申来リ直ニ巡査屯所エ出頭ス、然ルニ鹿兒島騒擾ニ付所々番兵等出張有リ、既ニ各人ニ銃器携へ之方も有リ、

旧十二月廿六日　晴天　二月八日

今日も矢張リ米之津野間（野間関付近）原辺番兵等ス、

旧十二月廿七日　晴天　二月九日

今日も右同、扨爺是ハ兼一（野間口兼一、行方と従兄弟）君之一条ニ付右廿五日ヨリ出魔有リ、実ニ県内大騒動ナリ、

旧十二月廿八日　晴天　二月十日

今日も吾々ハ兵粮取寄セ津町詰ナリ、

旧十二月廿九日　晴天　二月十一日

今日共ハ大雨も降リ麓辺にも行き候、

旧十二月卅日　晴天　二月十二日

今暁未明ヨリ出兵被命出家祝酒等ス、昨昼出軍門出ヲ祝ヒ、其ヨリ高江氏抔同道、嘉紫（加）久利社・天神社エ参詣、御守等申請ケ帰家仕舞等いたし昨夜八ツ過キ発足、麓小学校エ早鐘ニて相揃六ツ過キ進軍相成候、但四百人程、今日大雪ニて割子段ニて喫飯、爺様（行方祖父）魔ヨリ帰途紫尾山ニて逢ヒ袖別ス、実ニ大難儀ナリ、夜ル宮之城町エ宿陣ス、亦其夜八ツ過キ発軍、入來町ニて夜明リス、入來衆の出兵、相図の大炮盛ニ相聞得、時々勢ヒ盛ナリ、

丑旧正月元旦　雪天　二月十三日

今日も大雪降リ、鹿兒島二軒茶屋ニて勢揃ヒ行軍ニて夜ル六ツ過キ問屋エ着陣、深夜手之口（綱）女学校エ繰込ミ火等も無シ、難儀此限無、

旧正月二日　大雪天　二月十四日

今日練兵場エ出テ出水人数も各隊エ編入、吾々ハ第四（編野利秋隊長）ノ八番小隊エ入隊ス、五列八重尾家・松元家・餅原家・木ノ上家ナリ、外出水同隊壱岐家・土師家・北原家・種子田家・永山家・早水家ナリ、小隊長嶺崎半左衛門殿、半

隊長大山誠之介殿外不詳、吾押伍坂元壯七、吾五列丈、

旧正月三日　雪天　二月十五日

今日練兵場の積雪壱尺五寸程も有り、今日ヨリ第一、二大隊、出水通リ、大口通リ東西ニ出軍有リ、吾大隊抔ハ招魂社参詣等行軍ニて有タリ、帰路ニ入湯牛屋エ寄リ吾五列中大愉快ヲ催シタリ、実ニ大雪ヲ消サン為メ沈酔ス、夜入リ帰陣スルナリ、

旧正月四日　積雪　二月十六日

今旦未明、練兵場エ出テ勢揃ヒ第三大隊（永山弥一郎隊長）ハ出水通リエ発軍、吾々第四大隊大口通リエ発軍、重富ニて昼飯、加治木エ着陣、当分酒禁シナリ、実ニ吾ガ義軍の勢ニ鬼神も恐るゝ形勢なり、

丑旧正月五日　晴天　二月十七日

今旦加治木出発、溝邊辺ニて昼飯、横川エ着陣、其夜鶏飯等スルナリ、

旧正月六日　晴天　二月十八日

今旦横川発軍、馬越（菱刈町）ニて昼飯、大口エ着陣士族家エ止宿、御馳走有リ、途中雪も降リ、横々難儀ナリ、

旧正月七日　雪天　二月十九日

今日大口発軍、山野ヲ通リ、肥後水俣エ出デ、宿陣ス、道法八里、上場の積雪五六尺も有り実に大難儀ナリ、（田水・大口市境高原）

旧正月八日　晴天　二月廿日

今旦水俣発歩、桟敷（佐）昼飯、田の浦エ着陣ス、最早熊本城下ハ兵褒起リタル由聞ク、道法八里程ナリ、

旧正月九日　晴天　二月廿一日

今旦未明田の浦発軍、八代町エ出テ昼飯、最早熊本城下の火烟見ユ、小川エ着陣、夜ル所々エ番兵エ行キ巡邏騒動ナリ、夜ル一睡八ツ過キヨリ繰出シ宇土辺ニて夜明ケ既ニ炮声盛ンニ相聞得、左袖印等渡、道法十一里程ナリ、

旧正月十日　晴天　二月廿二日

今旦熊本の城戦争の炮声盛ンニ聞ヨリ駈足ニて進歩、川尻迄一里程人力車ニ乗る、川尻ニて昼飯、手前ニて大将（西郷）ヲ見ル、其ヨリ直ニ旧城ニ駈付キ候処、城の四方万方ヲ取囲ミ、炮戦烈敷盛ナリ、其時昼四ツ過キモ候半、夕方ヨリ吾小隊ニハ城の近村エ引揚着陣ナリ、松元家鶏ヲ分捕リ焚キテ喫ス、此夜第四ノ九番小隊衆植木ニて戦争、遂ニ追去リ勝利之由聞ゆ、時ニ負傷山口覺助殿外ニ打死と負傷も多ク有リ、山田嘉、淵上助打死の由後日聞、

旧正月十一日　晴天　二月廿三日

今旦未明繰出、植木辺ニて敵の士官兵卒の死骸ヲ見ル、

植木ノ左右道ヨリ進軍、吾隊ハ右三里程行キ候処、左道(宝東町)木の葉ノ当リ炮声烈敷候ニ付二里程廻リ駈付候処、最早相聞得、味方弾薬尽キ曳カントスル処ニ、吾隊共ニ損失ヲ入レ直ニ敵兵ヲ打敗リ散々ニ逃去リ追討チ、銃器弾薬過分分捕酒抔も有ツテ久々振リニ喫ス、実ニ大勝利ニて暫時番兵植木町の様引揚相成候、吾小隊ニハ負傷等も無し、

旧正月十二日　雨天　二月廿四日

今日植木滞陣、木の葉分捕の針銃(打鉄カ)等預リ候、

旧正月十三日　晴　二月廿五日

今日植木繰出シ、新町辺ニて昼飯、七ツ時分山鹿ェ着陣、夜ル暁キ番兵ェ行キ巡邏等スルナリ、

旧正月十四日　晴天　二月廿六日

今旦敵ヨリ進撃いたし味方直ニ惣勢繰出シ、三方ニ開キ三四時間の間及戦争ニ候処、敵引揚ニ相成味方進ミ込ミ、敵兵ヲ打敗リ追討、二里程行キ亦本の山鹿ェ引揚番兵等ス、敵の死骸引揚ザル者凡ソ百六名有之タリト言、実ニ道路ニ伏タル死骸ハ犬鳥の食トナリ見ルニ眼ヲ当テラレズ、

旧正月十五日　晴天　二月二(ママ)七日

今日モ矢張リ当山鹿ェ交代ニて番兵等ス、牛肉・酒諸品も沢山有リ、亦湯泉場ニて日本国内一二ヲ争結構ナル湯ニて日ニ二三度ズツ入浴ス、

旧正月十六日　晴天　二月廿八日

今日も右同宿陣、亭主小倉屋次郎市と言、

旧正月十七日　晴天　三月一日

今日も右同シ、八重尾氏・木上氏・餅原氏・松元氏・吾五人一宿ニ居ル、

旧正月十八日　晴天　三月二日

今日も右同、毎日酒肴抔取入レ喫ス、

旧正月十九日　晴天　三月三日

今日惣隊南之關(南関町)の様進軍之賦有リ、山鹿繰出シ半里程往キ候処、鍋田原(山鹿市)ト云処ニて敵ヨリ大炮数発放チ直ニ及戦争ニ、其時午後八ツ過キ開戦味方ヨリ少シハ敵ヲ追敗リ候得共、其夜中大戦、夜明ケ候得共勝敗不分、吾小隊ハ予備ニて昼の間ハ戦ニハ不出候得共、吾々も其暁戦場ニ出テ炮戦ス、右山鹿の戦ヒ、当戦ヒニも吾小隊各隊ニ戦死負傷等余多有リ、

旧正月廿日　晴天　三月四日

今旦本営の命令違ヒ鍋田原引取リ山鹿ェ帰陣候処、直ニ

敵後ヨリ進来リ味方も即時ニ散隊ニ開キ、又敵ヲ追去リ吾分隊抔ヨリ城原(山鹿市)辺ヲ巡邏亦所々番兵等ス、

旧正月廿一日　晴天　三月五日

今日共ヨリ山鹿城原ェ番兵ェ行キ、昨今左半隊衆当所ニて少戦有之候得共、吾右半隊丈ハ援兵ナリ、

旧正月廿二日　晴天　三月六日

今日番兵交代、非番の節ハ入浴、酒喫耳、当時分より早水叔父も吾宿陣ニ御加入相成候、

旧正月廿三日　晴天　三月七日

今日川俣哲蔵殿下男参リ候ニ付、宿許ニ書状ヲ贈ル、亦当今小隊ヲ改メ中隊ト云、吾々ハ右小隊三番分隊、押伍鬼塚早左衛門、有馬藤吉、

旧正月廿四日　晴天　三月八日

今日も隔々の番兵ェ行キ交代ス、当分田原・吉次・木留・植木の辺、炮声夥敷相聞得候也、此処後より書添ニて能ク不詳、

旧正月廿五日　雨天　三月九日

今日も右同、当山鹿ニハ無事、入浴、酒呑ミ而已、

旧正月廿六日　曇天　三月十日

今旦六ツ過キ、例之通リ城原ェ吾右小隊番兵ェ行キ無事、夕六ツ前交代宿陣ェ帰ル、一昨廿四日、田原ト云所ニて戦争有リ炮声当山鹿ェ夥敷相聞得候、

旧正月廿七日　晴天　三月十一日

今旦入浴、正午ヨリ例之通城原ェ吾右小隊番兵ェ行キ徹夜、然ルニ本の戍場ト代リタリ

旧正月廿八日　晴天　三月十二日

今旦未明吾守場ニ敵不意ニ攻込ミ互ニ及戦争ニ候処、味方少シ敗レ少シ曳キ戦ヒ亦敵ヲ追敗リ、亦戦ヒ酣ニシテ味方弾薬絶ェ吾中隊ハ山鹿迄引揚、守リヲ付ケイリ候処、他隊ヨリ防キ留メ遂ニ敵ヲ追去リ吾隊も又本の請持場ェ番兵ェ行キ、其夜松山の中ニ伏ス、少雨ニて難儀ナリ(戦ヒ旦六時ヨリ夕四ツ過マデ)

旧正月廿九日　曇天　三月十三日

今日正午過キ番兵ヨリ帰陣、牛屋ェ行キ勝利之祝酒、終テ入湯等ス、無事、

旧正月卅日　晴天　三月十四日

今旦六時ヨリ番兵ェ行キ交代、無事、

旧二月朔日　晴天　三月十五日

今暁未明敵ヨリ炮発シ聞来リ候ニ付、直ニ味方三方ヨリ防戦ニ及ビ候処午後四時比、敵甚敷進ミ来リ候ニ付、味

方不得止事ヲ切込いたし追討候処、敵方の死骸引揚ゲザル者不少恰如山、味方の死傷少シハ有リ、吾中隊打死壱名手負二名有之、夕五時前大勝利ヲ得テ、吾右小隊丈ハ、本の山鹿ェ帰陣相成、吾も入湯等いたし夜ル酒抔御給与有リ、牛抔取入勝利之祝酒等スル也、去ル正月廿八日ニハ、味方死傷余多有リ敵ハ不詳少ハ有リタリ、

旧二月二日　晴天　三月十六日

今旦六時ヨリ又吾右小隊丈ハ請持ノ番兵ェ往キ交代、近村抔ェ巡邏等いたし昼夜無事、

旧二月三日　晴天　三月十七日

今旦七時番兵交代帰営、入浴牛抔食ス、夕方又牛屋ェ往キ明日の嘉(加)紫久利社御祭の祝ヒ等スルナリ、松元氏・木上氏同道ナリ、

旧二月四日　晴天　三月十八日

今旦ヨリ例之通リ城原ェ番兵ェ往キ敵相見得候様子ニテ夜半ヨリ夜明迄今ヤト相待居候、

旧二月五日　曇天　三月十九日

今旦番兵ヨリ帰宿、牛屋ェ往キ酒抔呑む、夕方入浴、其より又早水家・八重尾家・松元家・木上家・餅原家牛屋ェ往キ今日ヨリ其々分隊替リニ付別の祝也、今夜転宿押伍小妻休藏隊中所々ェ酒呑ニ廻ル、

旧二月六日　雨天　三月廿日

今日亦番兵ェ往キ無事、田原辺ニ炮声夥敷相聞得候、吾左小隊ニも応援として植木并熊本城辺ェ往方有リタリ、

旧二月七日　半天　三月廿一日

今旦六ツ過キ敵ヨリ大炮ヲ打掛、直ニ進ミ来リ互ニ及戦争ニ、二時間計も過キ勝敗不分、故有ツテ田嶋村ト云所ェ引揚一睡ス、但昼七ツ前より雨降リ実ニ途中大難儀ナリ、道法五厘(里)程ナリ、吾隊負傷壱人ナリ、

旧二月八日　晴天　三月廿二日

今旦未明田嶋村繰出シ鳥巣(西合志町)ェ往キ守リ等付キ吾隊ニハ高(合志町)江村ト云所ェ進軍、番兵等いたし無事、夜故有ツテ二里程ノ処黒石村(西合志町)ト云所ェ進軍相成、亦故有ツテ其夜鶏鳴より又本の高江村ェ引返シ相成休息ス、雖然何も無事、植木の辺ハ矢張リ昼夜炮声絶間無ク実ニ盛ナリ、

旧二月九日　雨天　三月廿三日

今日終日休息ス、今夜両度河岸ェ番兵ニ出タ、但一時間ヅツ、

旧二月十日　雨天　三月廿四日

今日午前十一時ヨリ高江村繰出、午後一時隈府(熊本市)ェ着陣、

四方辻々ェ番兵ェ出タ、但昼一度夜二度ス、宿主岡山優蔵ト云、士族之由候、

旧二月十一日　晴天　三月廿五日

今暁未明ヨリ植木辺ニ戦争の炮声夥敷相聞得候、当地菊池郡隈府ト云、昼番兵ェ出ル、

旧二月十二日　半天　三月廿六日

今日未明ヨリ矢張リ植木・鳥巣辺ニ炮声盛ニ相聞得候、午前五時ヨリ七時まで番兵ヲ勤メ交代無事、野村藤太外ニ多客有ツテ、晩酒宴ヲ催シタリ、昨日ハ右野村家所ニて木上氏ト大キニ馳走ヲ受ケタリ、菊池神社御守等貰ヒ謝礼として金十銭ヲ献ス、

旧二月十三日　曇天　三月廿七日

今日番兵等ス、夕方敵の士官二騎来リ、五ノ二小隊番兵ヨリ炮発シテ追払ヒ、負傷馬壱疋・短筒壱ツ分捕リ相成直ニ吾隊等も隊ヲ立付、斥候抔ェ出タリ、本城士(参州町)富島家植木の戦場ヨリ帰隊左右抔聞ク、然ルニ切込抔為有之由、

旧二月十四日　曇天　三月廿八日

今旦未明七ツ過キヨリ番兵ェ往キ二時間ヅツ午前七時交代ス、植木の辺矢張リ炮声相聞得候、夕方早水家・八重尾家・澁谷家抔ト酒・数之子持参ニて菊池神社ェ参詣、其ヨリ亦熊本の美少年の所ニ遊ニ往キ愉快ヲ催シテ夜入リ帰陣ス、

旧二月十五日　晴天　三月廿九日

今日も矢張リ一昼夜ニ四度ヅツ番兵ヲいたし無事、夕方酒ヲ喫ス、当時候当地之桜既ニ咲出んトス、

旧二月十六日　雨天　三月卅日

今旦例之通リ未明ヨリ番兵ェ往居候処、午前七時比敵寄来リ互ニ及戦争ニ候処、正午時分敵逃去リ味方進ミ追討等いたし勝利、敵生捕壱名有リ、味方も死傷余多有リタル由、吾中隊ニハ壱名も無事、

旧二月十七日　雨天　三月卅一日

今旦未明番兵ェ往キ、昼も同シ、夕方本城士富嶋抔ト藤田橋之辺ニ遊ェ往キ外無事、

旧二月十八日　晴天　四月一日

今日昼夜番兵無事候ナリ、

旧二月十九日　晴天　四月二日

今旦未明敵寄来ル最(模)様ニて、迫間村嶮山ェ登リ吾迄拾名程伏居候得共不来、只空敷帰陣ス、番兵昼夜外無事、

旧二月廿日　晴天　四月三日

今日も昼夜番兵無事ナリ、

旧二月廿一日　晴天　　四月四日

今日又敵寄来ル模様ニて市中人々動揺ス、

旧二月二十二日　晴天　　四月五日

今日も例之通昼夜番兵、午後吾分隊八名程同道料理屋ェ往キ熊本協同隊衆ト出合、桜木之大枝ヲ持参、無限愉快ス、今日少し事有ッテ動揺ス、

旧二月廿三日　晴天　　四月六日

今日も前日同シ、午後菊池神社ェ参詣、当今右神社内五百本の桜花盛最中ニて見事ニ有タリ、田嶋村之辺ニ大火有リ、昨廿二日夜宿許書状到来ス、無事、

旧二月廿四日　晴天　　四月七日

今旦雨降リ五ツ過キ敵ヨリ進撃いたし互ニ及炮戦ニ終日勝敗不分、夜入リ敵退去惣隊番兵所ェ詰居候ナリ、敵炮ニて人家ヲヤク、

旧二月廿五日　雨天　　四月八日

今旦未明ヨリ一里程之処、各隊ヨリ出張の番兵ェ終日詰ニ往キ、但澁谷・林・吾三名ナリ、夜入交代ス、当村ェ敵曳キの者有リ、分捕等有リ、今日も敵少し寄セ来ル由候得共、直ニ逃去リ味方勝利之由聞、夜入帰陣ス、

旧二月廿六日　雨天　　四月九日

今旦五ツ前敵大小の炮ヲ以三方ヨリ攻メ来リ及戦争ニ候処、敵三面ヲ取囲ミ候故、昼七ツ過キヨリ吾左半隊丈ハ応援として二里程裏手ニ廻リ候得共、夜入リ不戦四方万方ェ火爇懸リ盛んナリ、今暁七ツ過キヨリ惣隊高江村之(合志町)様引揚有成(相カ)候、

旧二月廿七日　大雨天　　四月十日

今旦四ツ時分高江村ェ着陣いたし候処、敵台場ヲ築キ堅メ居候ニ付四ノ九番中隊衆進撃ニ相成候得共勝敗不分、吾隊ニハ敵の為メ要害ナル所ニて進事不能、惣隊引揚ニ相成候、実ニ今日ハ稀成ル大雨ニて難儀無限、衣類都て雨ニ染め昼八ツ過キ高場(竹迫、合志町)ト云町ェ着陣ニ相成衣抔アブリ休息ス、酒抔取入喫スルナリ、

旧二月廿八日　曇天　　四月十一日

今旦敵寄セ来ル様子ニて各隊出張相成候得共不詳、引揚ニ相成一昨日比より八重尾氏病ニて川尻の様往ニ相成仮帰国の由、同日又転宿、夜ル番兵ェ往キ居候処鳥巣の如く進軍相成との報知有之引取往キ方ニ相成、夜ル七ツ前鳥巣ェ着ス、最早敵大小炮を以攻撃互ニ争戦初居候ナリ、

旧二月廿九日　晴天　　四月十二日

今日戦争終日、味方より銃器抔余多分捕為有之を視る、

吾隊ニハ応援にて戦場エハ不出、同夜八ツ時ヨリ吾左半隊ニハ大池(西合志町)の如く守備として往キ五ノ二ト交代ス、但此守協同隊一小隊・吾半隊丈ニ候、中々外地第一の広地ニて気細キ次第ナリ、

旧二月三十日　晴天　四月十三日

今日昼夜番兵協同隊ト交代ス、

旧三月一日　晴天　四月十四日

今日矢張リ大池エ番兵ス、但昼夜吾隊ノミニて交代ナシ、協同隊ニハ故有ツテ熊本之様引揚為ス由聞ク、今日共より吾右半隊も来リ、

旧三月二日　晴天　四月十五日

今旦より鳥巣并大池の守備隊都て引揚相成、朝四ツ比より繰出植木町ヲ行軍一休、玉子抔喫シ、其より昼八ツ過キ岩坂(大津町)エ着陣休息、其夜又九ツ前ヨリ岩坂繰出大津町エ鶏鳴ニ着宿陣休息ス、

旧三月三日　晴天　四月十六日

今旦五ツ時分ヨリ敵進撃いたし、味方敗軍ニて吾隊ニハ応援として駈付キ烈敷防戦いたし候処、敵絶(耐)兼暫時の間ハ逃去リ一里計リ追討いたし引揚居候処、又敵懸リ来リ候ニ付直ニ駈付散隊ニ開キ進撃いたし候処、余リ深入リニて敵後より打掛候ニ付、驚キテ面をふらず烈敷炮発いたし候処、敵纔ニ五六間の所まで進ミ、即時ニ逃去リ亦追討等いたし候、其時吾々ハ二ノ八番小隊エ交ヒ戦ヒ人数纔ニ二十人計リ、七ツ過キ大勝利を得て味方引揚ニ相成宿陣ニて酒抔喫シ祝ヒ等ス、本営ヨリも酒を被賜大愉快ス、他隊ヨリ分捕等も余多為有之由聞ク、植竹家・吉留家・松島五郎殿抔も同陣、

旧三月四日　雨天　四月十七日

昨夜ヨリ今日十二時過キ番兵交代帰陣ス、

旧三月五日　晴天　四月十八日

今日非番ニて休息ス、

旧三月六日　晴天　四月十九日

今日正午ヨリ番兵エ往キ徹夜ナリ、

旧三月七日　晴天　四月廿日

今旦敵三方ヨリ進撃いたし候ニ付、互ニ及戦争ニ終日終夜勝敗不分、雖然他隊ハ少シハ勝利ニて分捕等為有之由、扨八代口・川尻・植木の味方敗軍ニて不得止ヲ其夜九ツ過キ発軍、途中三里程の所ニテ夜明ケ矢部の様引揚ニ相成候ナリ、道法十里程、

旧三月八日　晴天　四月廿一日

今日八ツ後、矢部ェ着陣、昨日土師家負傷ニて今日対面ス、馬見原(蘇陽町)病院の様往キ方ニ成ル、此矢部ハ、所々の味方兵隊都て引揚之由ニて中々多人数ニて大混雑ナリ、出水人数も大概当地ニて初て対面之人多人、

旧三月九日　晴天　四月廿二日

今日非番、隊立付検査等有リ、

旧三月十日　晴天　四月廿三日

一昨日比ヨリ左小隊衆も熊本竹宮辺ヨリ初着、当分合隊相成リ今日ヨリ一昼夜交代の番兵ェ往キ台場等築キ方有リ、但道法一里半計リナリ、

旧三月十一日　雨天　四月廿四日

今日正午交代帰宿、正酎(焼)等喫ス、昨日ハ出水人数打寄リ北原家宿所ニて酒会為有之由聞く、

旧三月十二日　雨天　四月廿五日

今日人吉之方ェ引揚相成賦ニて惣隊繰出発軍相成中々混雑ナリ、五里程之所、馬見原ト云ニ着陣一泊ナリ、

旧三月十三日　大雨天　四月廿六日

今日五ツ時発軍、道法五六里程、胡麻山(椎葉村)ト云嶮岨ナル深山ヲ越ェテ着宿ス、道路深入リ大雨故、実ニ難儀無限、

旧三月十四日　大雨天　四月廿七日

今日胡麻山発足五里計リ往キ仮宿、大雨降リて山坂大難儀、且山中ニて宿も無く銘々小屋小屋に火を焚キ、ヌレ衣抔アブリ候、飯ハ昨日三名ェ弐升ヅツ被渡候ニ付、其を食ス、同列早水氏・種子田氏・木上氏・北原氏・吾ナリ、山中の家ニハ大木抔多植ル家も有リ、男女能不分、野蛮ト云是レナリ、

旧三月十五日　晴天　四月廿八日

今旦六ツ時発足、山嶮越ェ歩ス、然ルニ五拾間位の橋を大河の上を桂(蔓)ニて釣上ゲ、オソロシキ所有リ、道法九里程往キ岩野村(球磨郡水上村)ト云所ニ宿陣ス、此手前江代(水上村、今湖底に沈む)ト云所より右岩野村草履等無之、皆自分ニ作ルナリ、

旧三月十六日　晴天　四月廿九日

今日岩野村滞陣、本の馬見原之様引返ニ相成賦リナリ、草履抔作リ方ス、

旧三月十七日　晴天　四月三十日

今日本の馬見原の様進軍の賦ニて発歩、三里程往キ候処、中隊長嶺崎半左衛門殿間違ニて又本の岩野村ニ引戻ニ相成宿陣、夜正酎抔喫シ雑謡、山中の愉快ヲ催タリ、

旧三月十八日　雨天　五月一日

今日滞陣、午後江代病院ェ木上家眼病ニて列往キ診察ヲ

請く、当地ニて伊藤祐殿(四郎左衛門祐慶)ェ逢ナリ、帰宿シテ亦転宿ス、
但分隊中ナリ、夜ル正酌十銭ヅツ取入喫シ大愉快ス、右
病院一里半計リの所ナリ、
旧三月十九日　晴天　五月二日
今日滞陣、牛抔相渡リ喫ス、高山の神社ニ登リ焼酎ヲ献
ジ呑ンデ愉快ス、夜も又呑ミ楽シナリ、
旧三月廿日　晴天　五月三日
今日吾分隊中河魚取リニ往キ二三升程取得、料理シテ喫
ス、美味ナリ、午後湯山村(水上村)の様繰出相成、夕方着陣、又
正酌抔喫シテ愉快ス、其村の祭リ有リ濁酒抔呉レタリ、
夕ヨリ雨降ル、
旧三月廿一日　雨天　五月四日
今旦湯山村発軍大河内(椎葉村)ェ着陣、然ルニ嶮山且ツ坂ニて難
儀、道法四里程ナリ、
旧三月廿二日　雨天　五月五日
今日も昨日も大雨故洪水、滞陣相成無事、
旧三月廿三日　曇天　五月六日
今日大河内発足、渡川(南郷村)休息、神門(南郷村)ェ着、宿陣ス、道法ハ
八里程ナリ、
旧三月廿四日　晴天　五月七日
今旦未明神門発軍、坪屋(坪谷、東郷町)休息、山陰(東郷町)ト云所ニ着宿陣、道
法八里程ナリ、
旧三月廿五日　雨天　五月八日
今日山陰発足、富高(日向市)新町ェ休息、細島(日向市)着宿陣ス、道法四
里程ナリ、宿主高田屋林蔵ト云フ、夜ル番兵ェ往クナリ、
旧三月廿六日　雨天　五月九日
今日滞在、夜又番兵ェ往キ無事ナリ、
旧三月廿七日　雨天　五月十日
今日も滞在番兵等いたし無事、当地入海ニシテ景吉キ所、
夕方小妻ト富嶋家・吾、料理屋ニ往キ無塩肴等久し振リ
喫シ快キなり、
旧三月廿八日　晴天　五月十一日
今日も番兵、霖雨ニて道路不宜難儀ナリ、夜ル大酌ヲ喫
シテ皆愉快ス、但吾押伍一与の宿陣ナリ、
旧三月廿九日　晴天　五月十二日
今日細島発軍、日向の国延岡(延岡市)旧城下の程往キ昼八ツ後着
陣ス、右手前土々呂ト云所ニて肴抔取入喫飯ス、道法
五里程右城下町宿主木屋壮吉ト云者ナリ、但中町ト云所
ニ候也、
旧四月朔日　雨天　五月十三日

今旦右延岡発軍、三里程の所熊田(北川町)ト云所ニて昼飯、嶮岨ナル山坂ヲ越エテ豊後国重岡村(宇目町)ト云ニ着宿陣、道法十一里程難路且ツ大雨ニて大難儀、其上絶食等ニて何共難云也、

旧四月二日　雨天　五月十四日

今日重岡発軍、宇田枝(清川村)ト云所ニ着一泊、路程七里、吾分隊ニハ小学校エ宿陣ス、

旧四月三日　雨天　五月十五日

今日宇田枝発歩、竹田(竹田市)ト云旧城下エ着陣、古町居住高木卯平次所エ止宿、夕方所々ニて酒抔喫シ、又料理屋ニも往キ愉快ヲ催シタリ、夜ル鳥越ト云所ニ番兵エ往キ道間違混雑いたし候得共無事候ナリ、

旧四月四日　晴天　五月十六日

今日午後十二時ヨリ夕七時迄右鳥越エ番兵ス、扨右宇田枝ヨリ当竹田迄路程四里程ナリ、

旧四月五日　曇天　五月十七日

今日非番ニて午後上妻休蔵（種子島）・山口正平（田布施）・澁谷源左衛門（本城）・佐野竹之助（右同）抔ト料理屋ニ往キ二妓ト一舞揚テ十分愉快ヲ催シテ帰陣、夕方池田惟貞所ニ遊ニ往キ厄害(介)ニ成ル、徹夜鳥越エ番兵エ往キ無事、

旧四月六日　晴天　五月十八日

今旦七時交代帰陣ス、林家ト遊ニ出テ酒魚喫ス、実ニ当地繁花(華)成ル所ナリ、

旧四月七日　晴天　五月十九日

今日午前七時ヨリ九時迄番兵エ往キ帰陣シテ所々遊歩シテ孔雀の鳥抔見ル、夜ル敵見得タル様子ニて三官衆宿迄隊中出張、而シテ吾半隊ニハ予備として番兵の守場ニ往キ夜ヲ明スナリ、

旧四月八日　晴天　五月二十日

去ル旧四日ヨリ各中隊ヨリ十名計リヅツ大斥候として八拾人位豊後鶴崎(大分市)の辺迄往方有リ、敵数名を切伏セタル由聞、吾ニハ不往、富嶋氏抔往くなり、爰ニ記置く、今旦六ツ過キヨリ繰出吾中隊ニハ裏手ニ廻リ、敵巣エ進撃損失の賦候得共、中々敵の為メ要害ナル高地ニて廻リ進事不能、遂ニ味方引揚ニ相成候、但他隊ニ負傷二名、戦死壱名の由聞、是レ三番中隊ナリ、此隊ハ正面ナリ、此戦ヒニ川内(田水士)惣之丞殿負傷シテ当夜終ニ死ス、墓所旧城跡の由後日山田家ヨリ聞く、

旧四月九日　曇天　五月廿一日

今旦風呂屋ヱ往キ午後北原家同道、肴屋抔ヱ往キ料理シテ食ス、予ヨリ払方ス、其ヨリ山田箭殿所ヱ態々往キ、川内家戦死故墓石等の一条証合、予ヨリ酒抔取入レ植竹家三名ニて喫ス、夜ル請持之番兵ニ往キ徹夜ナリ、

旧四月十日　晴天　五月廿二日

昨夜ヨリ今旦鳥越ヱ番兵ニて候処、日出敵ヨリ進撃いたし遂ニ及戦争ニ候得共勝敗不分、夜ル野陣、巌石高山の場ニて難儀ナリ、此竹田ハ惣体巌石嶮地ナル城市ニて街道四ケ所計リ穴貫五拾間計りの所も有り、昔、鎮西八郎（天正十九年）爲朝居城の由、然ルニ何ツ時分か薩勢も此城ヲ攻メ落チザリシ由、此土人老父ヨリ聞ナリ、

旧四月十一日　晴天　五月廿三日

今旦五ツ前ヨリ（竹田士族隊）報國隊守場へ、吾右三分隊応援として往キ、敵味方の間五拾間位の所終日烈戦勝敗不分、夜入リ外分隊ト交代ス、富嶋家・澁谷家・林家・木上家抔ト市中ヱ往キ、酒肴等喫スルナリ、吾分隊小城叶二・東條清二・小妻休藏其外同隊中ニ数十人負傷、戦死も有り矢張野宿ニて交代無之候、当竹田旧御旗本士族壮健ナル者ハ隊ヲ作リ報國隊ト云ヒ四五小隊造リ立、且ツ四五十歳位の少老者炮隊ヲ造リ四方の高嶺より大炮を討チ最早戦ヒ夥敷次第、敵も味方も双方共台場を築キ居リ候ナリ、

旧四月十二日　晴天　五月廿四日

今日も矢張リ烈戦敵進ミ来リ候ニ付防戦いたし候得共報國隊の請持場敗軍ニて、遂ニ不得止事ヲ吾中隊も退キ亦味方進撃相成、守場等相定リ其夜又進撃切込ニ往キ方有之候得共、敵不相見得、雖然吾本台場丈ハ乗取候得共、十三番中隊今日の戦ニ戦死手負多人数等ニて被進兼、亦引取ニ相成、嶮岨ナル地ヱ守リ野宿ナリ、

旧四月十三日　晴天　五月廿五日

今日も矢張り守場詰め昼夜嶮岨ナル地ヱ野陣、

旧四月十四日　晴天　五月廿六日

今日ヨリ吾各分隊請持場定リ、吾共左右三分隊嶮地詰ナリ、今日他の守場ヱ敵掛リ味方勝利ニて分捕等多く為有之由、一昨十二日報國隊敗軍の砌ハ、櫻島士族古江藤兵衛等往く先キ討死とも不詳候也、

旧四月十五日　晴天　五月廿七日

今日昼中嶮地詰め、夕ヨリ本道ヱ交代ニ往キ無事、今日も又他隊ヨリ勝利ヲ得テ分捕抔余多為有之由、鳥越の辺ニ敵火を掛ケ焚払候、

旧四月十六日　晴天　五月廿八日

今日昼矢張リ本道台場詰ニて候処、敵ヨリ大炮百発余りも討掛、実ニ夥敷キ次第、当所酒屋ニて二三石桶余多有リ宿主免シニテ大酒ヲ呑ミ沈酔ス、夕ヨリ交代二の台場詰め、夜ル又々敵ヨリ火爇ヲ懸ケタリ、

旧四月十七日　晴天　五月廿九日

今旦未明一番・十五番中隊の請持古城の台場ェ敵進撃、裏手ェ廻リタル由ニて不得止事ヲ敗軍防キ留メント欲スレ共遂ニ不叶、味方城の下橋ヨリ上の坂ヲ逃往ヲ、敵城の上ヨリ追討チいたし最早ノカレント必死ニ相成居候得共運命強く故、路程八里程之所小野市（宇目町）ト云所ニ引揚相成宿陣ス、此手前宇田枝ニて粟入りの飯ヲ喫スルナリ、

旧四月十八日　晴天　五月卅日

今日午後ヨリ小野市発軍、佐伯の旧城下ェ進撃の賦、但奇兵十番ト吾ガ十一番中隊丈ナリ、七ツ時分横川（直川町）ト云駅所ニ着陣ス、但路程四里程ナリ、夜ル番兵等いたし候也、

旧四月十九日　晴天　五月卅一日

今旦六ツ過ギ横川発軍、八ツ前佐伯城市ェ着陣、所々ェ遊歩等ス、市中都て逃去リ宿陣等中々混雑ナル次第、雖然ト無事ニて夜ル冷酒等取入喫スルナリ、其夜番兵ェ往キ候ナリ、

旧四月廿日　晴天　六月一日

今旦六ツ過キヨリ、官の軍鑑（艦）ヨリ市中ェ大熕ヲ打掛騒キ候、昼番兵ェ往キ無事、当地海岸ニて結構ナル市中ト相見得候、

旧四月廿一日　晴天　六月二日

昨日ハ木上家・佐野家・澁谷家抔ト肴屋ェ魚食らいニ往キ大酒ス、昨夜一時比ヨリ佐伯繰出神の原（直川町）ト云所迄行軍、夜明ケ朝飯を喫シ候、但路程四里余リナリ、夫ヨリ間違ニて一里半計リ引返シ下直見（直川町）村ト云所ェ着陣相成洗濯等ス、亭主壮八ト云ナリ、外無事、

旧四月廿二日　晴天　六月三日

今日鯛抔取入喫シ、午後七ツ過キヨリ番兵ェ往キ夫ヨリ隊繰出一里程往キ、江良（弥生町）村ト云所ェ宿陣相成休息ス、亭主橋迎圓蔵ト云者ナリ、夜ル酒抔呑む、当分吾腹不快ナリ、昨今ヨリ左小隊衆臼杵方ニ進軍相成候、扨右臼杵儀ハ他の味方隊ヨリ嶺の市（三重の市、三重町）ヨリ乗落シ此所も輒く乗落シ大勝利ニて弾薬銃器等余多分捕為有之由、報知有之由トカ果て左様ナリ、

旧四月廿三日　晴天　六月四日

昨夜ヨリ今旦迄番兵ス、夫ヨリ終日休息、何方ェも不出

無事、夜ル多客有ッテ喫酒ス、

旧四月廿四日　雨天　六月五日

今日非番ニて休息、夜ル喫酒ス、無事也、宿近隣の者共実ニ叮寧ニいたし候ナリ、

旧四月廿五日　雨天　六月六日

今日午前ヨリ十二時迄、夜ル六時ヨリ十二時迄番兵候得共不快ニて依頼ス、無事、夕方宿主縁家の者ヨリ蕎麦切抔貰、酒抔喫スルナリ、

隣の平民の母、己が子鎮台兵の事ヲ思テ吾ガ衣の洗濯ヲいたし呉レ候ニ付感涙ヲ流シ候ナリ、

旧四月廿六日　晴天　六月七日

今日吾分隊ニハ非番故鯛等買入食ス、

旧四月廿七日　曇天　六月八日

今旦未明ヨリ江良村発軍、正午津久見村（津久見市）ニて喫飯、午後二時比臼杵ェ着陣、最早戦争相初リ居リ炮声盛んに相聞候得共、吾右小隊ニハ休息ナリ、当城市果て落城人家壱人も不居逃去リ、当所士族も官軍ェ加入いたしタル由聞く、中々不自由ナリ、

旧四月廿八日　雨天　六月九日

今日正午ヨリ守の裏手ェ番兵ェ往キ居候処三方烈戦有ッテ味方少シ敗軍、吾共ニハ徹夜岡の峠ェ番兵ス、但一分隊拾弐三人、終夜炮声不絶、敵の軍艦二艘参リ大熕を打事夥敷く、

旧四月廿九日　晴天　六月十日

今旦五ツ前敵味方の裏手ニ廻リ候ニ付防戦いたし候得共遂ニ不叶、不得止事ヲ敗軍惣隊引揚相成候、折柄二里程往キ津久見ト云所ニて敵軍艦ヨリ数炮を打掛、吾不思道路ニて炮弾ニ当リ半面ト左足ニ少疵を受ケタリ、其時炮ニて即死三人、深手壱人、浅手吾迄弐人有リ実ニ驚く次第、因吾々ハ床木駅（弥生町）ヨリ加籠ニ乗リ江良村病院迄往キ療治受ク、三人外宿をいたす、本隊の宿陣等不相分候、夜ル雨降ス、右臼杵の戦ニハ敵海陸ヨリ大炮小銃を討掛実ニ絶ザル次第なリ、

旧五月一日　雨天　六月十一日

今日江良村出立、加籠ニテ横川ェ往キ昼飯、三里程夫ヨリ又加籠ニテ重岡（宇目町）迄往キ一泊、道法是も三里程、夫方四名ェ一里八銭ヅツ酒代として、本賃銀ハ其郷ヨリ大払の由、後日帰隊之節金弐円給養方ヨリ加籠代として渡る、

旧五月二日　晴天　六月十二日

今旦六ツ過キ重岡発歩、熊田（北川町）迄歩行、道法六里程、夫ヨ

リ川船ニて延岡奇兵病院エ着、入室療治を受タリ、此所三福寺ト云ヒ一番病院ナリ、同郷井手上早右衛門殿ニも少創ニて同室エ居ル、当時ハ鹿兒島・大口・高千穂辺ニ当リ戦争盛ナリ、

旧五月三日　晴天　六月十三日

今日居院療治、夕方百間橋の辺ニ遊ニ往キ井手上家・瀧聞長平（本城）杯ト料理屋ニ往キ肴正（焼）酎抔喫シ愉快催タリ、夜ル少雨有リ、

旧五月四日　晴天　六月十四日

今日居院、旦より夕迄井手上家・坂元家（鹿兒島）抔ト遊ニ出デ右料理屋ニて少年を呼ビ愉快ス、一昨二日比吾隊衆嶺野市（三軍の市）エ正面ニて進撃之由、手負野村堅輔殿ヨリ聞く、

旧五月五日　晴天　六月十五日

今日午後井手上家ト奇兵十二番石塚祐一殿所エ遊ニ往キ饗応を受ケタリ、同郷衆宗像・廣田・伊牟田抔も右祐一殿宿陣エ見得タリ、

旧五月六日　晴天　六月十六日

今日も居宿、夕方百間橋迄往キ、高亭ニて酒肴喫ス、

旧五月七日　曇天　六月十七日

今日も居院、午後本町エ人形戯場見ニ往キ候、当今佐伯境江良村近辺ニて戦争有リ、負傷人多人数参院スルナリ、当城下戦死墓ニハ籏二旒殉難戦云々之墓ト有立候、

旧五月八日　晴天　六月十八日

今日居院無事、同居源野（川邊）・工藤（竹田）・瀧聞（馬越）・坂本（鹿兒島）抔ナリ外不記、扨又重田孫九郎（蒲生）・漆野（野尻）・兒嶋（今泉）・四枝（小山）抔も同居院人数ナリ、

旧五月九日　晴天　六月十九日

今日も居院、切畑（弥生町）并小野市（宇目町）辺ニ於テ今時大戦争の由、因味方敗北ニて亦敵ヲ追返シ打取分捕等過分為有之由、報知ヲ聞く、

旧五月十日　晴天　六月廿日

今日も居院、只今呑薬を貰ひ用、繻本営ヨリ牛抔被下候ナリ、

旧五月十一日　雨天　六月廿一日

今日入浴、夫ヨリ八幡宮エ参詣御守等申請、献賽銭、医師退院ヲ免シ明日ヨリ帰隊の賦ニて笠抔取入、五月中ニて産土神御田植ニて井手上家・四枝家抔ト遙ニ献酒愉快ヲ催スナリ、

旧五月十二日　晴天　六月廿二日

今日退院、市中ニて料理屋ェ往キ、酒肴等取入快気祝等ス、但同列井手上家、右、重田・濱田(カマフ)・立本(ハナヲカ)・漆野(ノジリ)・兒島(田布せ)抔ナリ、夜ル二里程往キ仮宿ス、酒抔呑むナリ、

旧五月十三日　晴天　六月廿三日

今日正午過キ発歩、二里程往キ竹瀬(北川町)ト云所結構ナル田舎之人家ェ止宿ス、当時味方熊田近辺迄退軍ニて、亦軍岡の方ェ進撃相成、少ハ味方勝利等相見得候得共、未勝敗不分由、

旧五月十四日　雨天　六月廿四日

今日大雨ニて滞在休息、夜ル大風雨ニて候処、本隊抔ハ梓峠(宇目町)方ェ進軍等ニて実ニ大難儀為被致由、昨今ハ大ニ合戦為有之由聞得候、

旧五月十五日　晴天　六月廿五日

今日右竹瀬発歩、熊田ェ往キ候処、最早戦死戦傷の人多数相見得候、夫ヨリ井手上家・兒島家同道本隊八戸村(北川町)陣所ェ往キ届出候、途中ニて鶏抔料理喫ス、負傷之砌加籠(籠)代入費として二円押伍小妻家ヨリ貰呉候也、酒抔渡リ呑む、扨吾分隊中兵互ニヨロコビ呉候、吾も満悦ス、

旧五月十六日　雨天　六月廿六日

今日滞陣無事、転宿ス、中島高治ト云ナリ、

旧五月十七日　雨天　六月廿七日

今旦六時ヨリ五合計りの大峻岨ェ番兵ェ往キ交代ス、当分戦止ミ居ルナリ、

旧五月十八日　晴天　六月廿八日

今夜六時ヨリ本道ェ番兵ニ往キ、十二時交代無事、

旧五月十九日　晴天　六月廿九日

今日非番故夕方吾分隊中、川魚釣リニ出て拾献余リ得ル、

旧五月廿日　晴天　六月卅日

今日も非番、番兵之儀一分隊ヅツ、扨当地ニて池田惟貞ェ逢ナリ、

旧五月廿一日　晴天　七月一日

今旦六時交代ニて右峻岨ナル峠ェ番兵ェ往キ居候処、本日ヨリ吾中隊ト五番中隊梓峠ェ又進撃之賦ニて可引揚様報知有リ、因十二時過キ帰宿、午後三時ヨリ繰出相成三里程往キ高キ深山ェ潜陣、夜ル泊ス、

旧五月廿二日　晴天　七月二日

今暁未明進撃不意ニ襲賦ニて各隊繰出相成候得共、夜打明ケ軍配計策の儘不行空敷退軍、其日其夜本の高キ深山ェ潜陣退屈ナリ、

旧五月廿三日　晴天　七月三日

今暁昨夜十二時過キヨリ吾中隊先鋒ニて五番中隊ト梓峠の敵巣台場ェ未明襲撃進軍相成、時ニ右両隊ヨリ四十名斥候役ニて先鋒故、此衆鯨波ヲ揚ルヨリ直ニ跡の両隊鯨波の声ニて太刀ヲ抜キ曳々ト進ミ込ミ、互ニ暫時之間接戦炮戦ニ及候処、敵絶(耐)兼遂ニ逃去リヌ、当地九州第一の要害ナル地嶮ニて大勝利ヲ得、分捕の酒抔呑ミ祝ス、敵味方死傷も少ハ有之候、然ルニ吾隊ヨリ弾薬三千発余リ其他有之、且各隊ヨリも段々分捕過分為有之由、扨当日味方援兵直ニ五六中隊続キ四方面ヲ取囲ミ、吸ケ谷(水ケ谷、宇目町)敵の糧食課迄乗落シ、漸々一里半程の岡の峠ェ追往キ百間程ヲ隔テ互ニ進事不叶防戦ニて終日終夜、尤当地ェ番兵野営ナリ、炮声一瞬も絶間無く此戦ニ吾分隊亦五列の内、林庄右衛門重創ヲ受ケ候ニ付、存命如何ト思居リ候、但吾隊ェ負傷弐名ナリ、敵死骸斃れタル者数多視ル、

旧五月廿四日　晴天　七月四日

今日二里計の裏手ニ進撃相成攻込候得共、本営の命有ツテ本の陣所ェ引揚相成皆遺憾ス、夜ル昨夜の守場ェ野営ス、双方炮声夥敷次第ナリ、

旧五月廿五日　晴天　七月五日

今日矢張リ守場詰候得共、吾隊奇兵十一番隊ト高千穂口ェ応援として差向相成、五里程之所竹瀬(北川町)村ト云所ェ宿陣ス、是本営の命ニて吾中隊丈ナリ、

旧五月廿六日　曇天　七月六日

今旦六ツ過キ繰出三里之所延岡旧城市ェ着宿陣、片時製造所ェ往キ候処、男女大取込ニて弾薬作方有之、当所ェ夜ル一泊ス、扨夕方小妻家ト料理屋ニ往、着物亦酒も渡タリ、

旧五月廿七日　雨天　七月七日

今日四ツ過キ延岡発軍六里程之所八(八峡カ、北方町)街ト云所ェ着陣、夜ル正(焼)酎抔拾銭丈取入呑む、是吾ヨリ払ナリ、

旧五月廿八日　雨天　七月八日

今旦六ツ過キ発軍、道法一里程の所椎(北方町)畑ト云村ニ着宿陣ス、正義隊城山伊兵衛・宇佐虎之助・山之内家抔ェ対面、是先程より肥後馬見原辺ヨリ退軍之由ナリ、

旧五月廿九日　雨天　七月九日

今日ヨリ左小隊衆ハ当村之内金山ェ番兵ェ往方有之候、

旧五月三十日　雨天　七月十日

今日正午ヨリ右銅山ェ番兵交代ェ往キ候処、大河を隔て敵味方進事相叶ハン所ナリ、

旧六月一日　半天　七月十一日
今日終日番兵、黄光ヨリ交代帰陣ス、
旧六月二日　曇天　七月十二日
今日非番、夕方ヨリ例の番兵ヱ往キ交代ス、
旧六月三日　晴天　七月十三日
今日終日番兵ス、夕六時交代帰営ス、敷根士族境田源蔵負傷、扨当地銅山元禄の時分開業之由聞ナリ、
旧六月四日　雨天　七月十四日
今日夕六時番兵ヱ往交代無事、昨夜中隊長嶺崎半左衛門殿ヨリ酒抔被下候、但右監軍ヱ被成タル由、然ルニ本小隊長大山誠之介殿代官ヱ被相成候、
旧六月五日　雨天　七月十五日
今日終日番兵、夕六時交代帰営ス、夜ル酒抔喫スルナリ、
旧六月六日　雨天　七月十六日
今日夕六時前ヨリ矢張リ銅山ヱ番兵ヱ往キ交代ス、
旧六月七日　雨天　七月十七日
今日終日番兵、左右小隊間違之儀有之、夜ル十時比交代帰陣ス、雨降リて実ニ往来難儀ナリ、
旧六月八日　半雨天　七月十八日
今日非番、夕六時番兵交代ヱ往ク、当地大川を隔タル故敵味方進事不叶、守リ居リ候、既ニ十七八日過キタリ、聞く、先程ハ肥後猪之嶽(永俣市)辺ヨリ味方進撃いたし勝利ヲ得テ水俣上迄追討いたしたる由候事、亦味方敗ト聞、
旧六月九日　晴天　七月十九日
今日終日番兵、夕六時交代帰営ス、当分隊割心得有之候、吾五列逆瀬川藤太夫（敷根）・若松新太郎（中郷）・佐野竹之助、押伍小妻休蔵、伍長吾ナリ、木上栄蔵も列の内、押伍富島傳右衛門同分隊の内ナリ、
旧六月十日　晴天　七月廿日
今日非番、夕六時ヨリ番兵ヱ往キ交代、双方互ニ炮発スルナリ、
旧六月十一日　晴天　七月廿一日
今日終日番兵、夕六時交代帰営ス、夜ル酒牛抔相渡リ翌朝迄喫スルナリ、
旧六月十二日　晴天　七月廿二日
今日非番、夕六時番兵ヱ往く、杉木の本ヱ矢張りいたすナリ、
旧六月十三日　晴天　七月廿三日
今日終日番兵、夕六時交代帰宿ス、亭主栗田武二ト云、是矢張リ先程ヨリの宿ナリ、

旧六月十四日　半雨天　七月廿四日

今日非番休息、夕六時番兵ヱ往キ無事、雖然昼夜敵味方互ニ少しの炮戦ハ有リ、扨今宵敵の探玉ニて三原半之丞負傷ナリ、

旧六月十五日　雨天　七月廿五日

今日終日番兵詰、夕六時交代帰陣ス、大雨ニて大ニ衣類湿シ大難儀ナリ、

旧六月十六日　雨天　七月廿六日

今日非番、夕六時例之通番兵ヱ往キ無事、小妻抔五六日後ヨリ猪之字治ト云処ヱ援兵ニ被往、今夕帰陣相成候、

旧六月十七日　晴天　七月廿七日

今日終日番兵、夕六時交代帰陣、当今土用入リナリ、

旧六月十八日　半天　七月廿八日

今暁七ツ過キ仕舞、今村(北方町)之如く進軍相成候、但右小隊丈ナリ、路程拾里程大保下村(北方町)ニて一休、至極難路ニて実ニ難儀中々嶮岨ニテ近年人の往来無之所ト相見得タリ、夕黄昏右今村ヱ着宿陣ス、

旧六月十九日　曇天　七月廿九日

今日今村ヱ滞陣、休息シテ暮ス、

旧六月廿日　晴天　七月卅日

今日昼九ツ過キヨリ発軍、敵巣ヱ進撃相成筆紙難尽極難路ニて嶮岨ナル所耳、然ルニ夜入リ暗キニ一里程ハ歩ミ候得共道不詳、各隊歩ミナガラ途中深山ヱ一休一睡、亦其夜九ツ前月出ヨリ発歩、実ニ坂平山ニて三四間も落タル事も有之難儀カギリナク候、

旧六月廿一日　晴天　七月卅一日

今旦五ツ時分吾軍兵敵の裏手ニ廻リ、亦所々守兵之味方も進撃相成、艮時ニ敵の台場二三ケ所ヲ乗落シ、吾隊ニハ嶮岨ナル山坂ヲ五里程廻り追討等いたす也、亦小戦も有之、然ルニ其夜番兵等いたし野営ス、兵糧等不統混雑候得共、昨日鰹節壱ツ・パン拾壱ヅツ相渡リ候ニ付其ヲ食シ居リ候、

旧六月廿二日　晴天　八月一日

今日八ツ後敵裏手ヱ廻リ止ヲ不得各隊引揚相成、西之内ト云所ヱ番兵等いたし、夜ルも交代ニて番兵一眠ス、当所本敵地ナリ、他の隊給養方ヱ酒・正酎(焼)抔有リ貰呑む、

旧六月廿三日　晴天　八月二日

今旦亦敵ヨリ吾裏手ヱ廻リ敗軍ニて止ヲ不得東の内ヲ過キ、又今村之様往キ番兵等ス、夜モ同シ、

旧六月廿四日　晴天　八月三日

今日矢張リ番兵詰、敵ハ不相見得候、正午過ギヨリ又椎畑之様吾隊共ハ引返シ相成、又本の嶮岨ナル深山ヲ越エ四里程之所石上村ト云所エ着陣相成候、

旧六月廿五日　雨晴混　八月四日

今日五ツ過キ発軍、曾木(北方町)手前ニて木上家吾ト人家エ寄リ、鰻ヲ求メ料理シテ喫飯ス、夫ヨリ曾木エ往キ惣隊緩休、七ツ過キ発歩、八街(八峡カ)辺ニて素麺抔食シ夜入りて本の椎畑エ着陣、酒抔相渡リ戴キ呑む、

旧六月廿六日　雨晴　八月五日

今日終日休息、銃器抔洗拭いたし候、牛抔渡タリ、

旧六月廿七日　晴天　八月六日

今日夕六時前ヨリ番兵交代エ往キ無事、

旧六月廿八日　雨天　八月七日

今日終日番兵、夕六時交代帰営ス、昨夜ヨリ今日迄少雨降ルナリ、

旧六月廿九日　雨天　八月八日

当今右今村之進撃ヨリ風邪大流行ニて、吾も煩ヒ今日夕ヨリの番兵依頼ス、終日大雨ナリ、

旧七月朔日　晴天　八月九日

今日ヨリ左小隊衆ハ延岡の方エ援兵として往方有ル、然ルニ鹿兒島大口方の味方兵当分富高(日向市)新町辺迄攻込メラレタル由ニてケ様ナラン、既ニ兵粮も続キ兼麦飯等給養ニ相成ル砌リナリ、扨右ニ付吾右小隊ニハ番兵請持ナリ、

今日延岡隊病院エ薬貰ニ往キ用ユ、高鍋隊ヨリ正酎貰請三四人ニて呑む、先程味方進撃の砌ハ此銅山口にも勝利の由候得共故有ッテ亦本の台場迄引揚タル由聞く、是ハ正義隊五六番之由候也、

旧七月二日　雨天　八月十日

今日味方大敗軍ニて吾病故曾木村之様往キ療養ス、夜ル一泊、然ルニ此夜ガツサイ(全部)焼失ス、其内ニ舶来手拭一ツ・足袋壱束・矢立壱本其外色々の物を焼失ス、

旧七月三日　晴天　八月十一日

今日矢張リ病ニて休息ス、夜ル泊ス、医師ヨリ薬等貰候ナリ、

旧七月四日　晴天　八月十二日

今日未不快候得共、皆病ニて、本隊少人数故、押て数十人同道、曾木より一里程之処吾隊の請持台場エ往キ、昼夜心不詳候也、真向エ敵相見得炮発ス、味方よりハ不打候、

旧七月五日　晴天　八月十三日

今旦未明敵襲来リ候ニ付互ニ及炮戦ニ、万一敵進込事有ラバ勇ヲ振ルテ切込之賦決心いたし居候処、正儀隊後軍ニて止ヲ不得四五丁退キ防戦スル処、吾左肩先ニ銃創を受ケ玉不出、直ニ道法五里程有ル延岡の病院ェ往キ玉を取リ貰入院ス、其時若松仲之丞殿護送いたし被呉候、然ル処、其当日敵近寄ル様子ニて、即熊田(北川町)之方ェ往く途中ニて池上元五殿ェ対面、同道シテ川島(延岡市)の如く往キ様々宿借出一泊ス、

旧七月六日　晴天　八月十四日

今旦亦大河二渡ヲ船ニていたし枝村之様往キ休息、池上氏より療治ヲいたし貰候、其夜中亦患者ハ河ヲ渡リ直(移動)リ方ニ相成、中途人家下の隅ェ一眠ス、実ニ哀ナリ、

旧七月七日　晴天　八月十五日

今日又敵味方の中間の処ニ往キ農家ェ宿リ、其辺患者多人数群集ス、庄村(出水市)山下氏ニて被居初て対面、池上氏も同一宿居ルナリ、其時麦飯ニて米飯稀ナリ、是も様々求む、実ニ困窮此事ニ候ナリ、

旧七月八日　晴天　八月十六日

今日も矢張リ此所ニ滞在、療治等ハ池上家ヨリいたし貰、先ツ都合能キ事ニ候、

旧七月九日　晴天　八月十七日

今日も滞在既ニ味方地二里四方位ニ相成、故ニ四方万方ヲ敵ヨリ取囲ミ毛頭困苦ナル次第ナリ、此戦尤烈シ、大小の炮声双方夥敷相聞得候ナリ、今日共兒島市左衛門ェも対面スルナリ、

旧七月十日　晴天　八月十八日

今旦官軍差入候ニ付病院の患者二千人程も有之候半、都て降伏、其時吾々も帰順ス、即日正午過キヨリ官兵延岡の方ェ薄送いたし中途ニて飯抔渡リ候、右延岡城市ニて池上元五殿ト不思打離れ、亦城山伊兵衛殿ト対面、因同道肴屋ニ寄リ魚ヲ食ス、夜白歩行富高(日向市)新町ニて夜明ケ、其より美々津(日向市)の様送付警視分署方ェ次渡ス、其夜寺の様ナル家ニ一泊ス、城山家ェ頼療治等ス、延岡ヨリ美々津迄路程八里程、

旧七月十一日　晴天　八月十九日

今旦富高新町ェ往キ一休、夫ヨリ美々津ェ八ツ後着一泊ス、今日中の儀右之内ェ込居候、

旧七月十二日　晴天　八月廿日

今日警視署ェ創療治いたし度段申出候処、患者都て旧学校ェ巡査より送リ方ニ相成、其所ェ往キ又一泊ス、

旧七月十三日　晴天　八月廿一日

今日夕方より吾まで拾名丈巡査ヨリ高鍋の様送リニ相成、黄昏路程三里程之処、都農ト云町駅所エ届、加籠中エ居リ道中ニて一睡ス、亦其夜発路ス、

旧七月十四日　晴天　八月廿二日

今旦五ツ時分高鍋エ送届キ警視署エ願書ヲ出シ許可ニ因テ病院エ入室ス、医師長森家・当地士永友家其他略ス、

単衣壱枚・毛頭（ケット）壱枚御借付相成、飯抔ハ三度共汁付ニて先ツ御叮嚀ナル事候也、

旧七月十五日　晴天　八月廿三日

今日故郷エ書状を贈る、然ルニ廿日方ニハ届キタル由後日承リ候、

旧七月十六日　晴天　八月廿四日

今日居室同郷ヨリ高木善右衛門殿・柊崎郷右衛門殿・加藤市郎右衛門殿当院エ同居ス、今日ヨリ二階の方エ転室スルナリ、

旧七月十七日　晴天　八月廿五日

今日右同居室、薩兵延岡裏手ヲ打敗リ、小林・横川辺ニて数戦いたし弾薬・金抔過分分捕ニ及、又本の鹿兒島城市エ打出官兵エ抗敵スル由聞、然ルニ鹿兒島ヨリ延岡五十里余リニて候処、夫ヲ乗返シ候儀実ニ強兵ト云ナラン、世人驚く次第ナリ、

旧七月十八日　晴天　八月廿六日

今日居院、大概同居室伊作折田祐左衛門、右同山田覺之進、右同川越英二、右同平民木村善次郎、知覽難波勇造、谷山松木源兵衛、宮之城園田彦次郎、財部櫻木萬次郎、熊本大島眞次郎其他略ス、

旧七月十九日　晴天　八月廿七日

今日居室無事、矢張リ鹿兒島戦有之由、

旧七月廿日　雨晴不詳　八月廿八日

今日前日同断、鹿兒島の城ハ既ニ三重四重官軍取囲ミタル由遺憾ナラン、

旧七月廿一日　雨晴不詳　八月廿九日

今日前日同断、当病室本学校ニて候処、官軍分捕の諸品色々の物有之候、

旧七月廿二日　雨晴不詳　八月卅日

今日前日同断、当分伝染の腹病大流行ニて吾も五六日ケ間相煩候也、

旧七月廿三日　不詳　八月卅一日

今日前日同断、当病院ニても重創の人々既ニ二十名余リ

死シタリト云、実ニ哀ナル次第ナリ、
旧七月廿四日　不詳　九月一日
今日前日通り、色々の軍説有之ト雖も是皆虚説ナリ、
旧七月廿五日　不詳　九月二日
今日前日通り毎日一度ヅツの医師療治、長医一度ヅツ診察ス、
旧七月廿六日　晴天　九月三日
今日前日通リ役人裁判方として病室ェ差入リ有之、吾も糺明有之也、
旧七月廿七日　晴天　九月四日
前日同断、過日大風有之大木・家抔斃タル有之由、病室在ニて吾共ニハ世間の事頓と不知、帰家途中知ルナリ、
旧七月廿八日　晴天　九月五日
今日夕方、裁判所ヨリ処分之書付相渡リ安堵いたし候得共、未戦平定不致気の毒ナリ、
旧七月廿九日　晴天　九月六日
先日ヨリ今日も病室の患者追々帰郷の人数有リ、
旧八月一日　晴天　九月七日
今日居室、歩行の為メ旧城跡の神社ェ参詣等ス、今日加藤市郎右衛門殿ェ金弐拾銭取替タリ、
旧八月二日　晴天　九月八日
今日居室、其他不詳候ナリ、
旧八月三日　晴天　九月九日
今日病院滞在、無事
旧八月四日　晴天　九月十日
今日右同、更ニ流説ニ云、霧島山七里四方薩兵ヨリ取囲ミタルト虚説アリ、
旧八月五日　晴天　九月十一日
今日右同、過日高木家・柊崎家帰郷相成候、
旧八月六日　晴天　九月十二日
一昨四日ヨリ退院ヲ願出、昨五日退院之賦候処、雨降ニて医師差留不許候ナリ、因テ退院許可ニ相成発路ス、同列外山矢七郎(樋脇)・本城士川田藤左衛門ナリ、其他葉(羽)月士淵田隆良ニて候得共、是ハ高鍋城下士族所ェ遊残リ候、其日八ツ時分ヨリ発程四里の処佐土原本城下士族宅ェ一泊ス、
旧八月七日　晴天　九月十三日
今日佐土原発程高岡町一休、夫ヨリ右高岡の内源のみと云所ェ止宿、但士族宅、路程六里程、此地祭やうニて襷踊抔有リ視ルナリ、

旧八月八日　晴天　九月十四日

今旦高岡発程、野尻麓横山幸吉所ェ立寄リ馳走ニ成リ、当浦上山助之丞殿所ェ泊宿ス、路程六里程ナリ、

旧八月九日　晴天　九月十五日

今日野尻発程、小林町ヲ通リ八里程往キ加久藤(えびの市)浦士族江平實貫殿所ェ泊宿ス、

旧八月十日　晴天　九月十六日

今日加久藤発程、吉田通(えびの市)行盤水寺越いたし馬越(菱刈町)ェ出、夫ヨリ葉月(大口市)之内水の川内平民武助所ェ着一泊ス、今日渡ニて軍中所持の烟管ヲ紛失ス、馬越ニて右列外山矢七郎ェ別袖いたし候、扨去ル六日退院の砌、又加藤市郎右衛門殿ェ金三十銭借置候也、今日路程八里程ナリ、

旧八月十一日　晴天　九月十七日

今日右水の川内発程、土瀬戸越いたし出水大川内ェ出、下平野ニて一休、時ニ阿久根士族宮里吉太郎殿ト出逢正(統)酎抔呑む、夫ヨリ平川塚(出水市神田)ニて重藏親子の坂迎ニ逢ひ、夕七ツ過キ自宅(出水市安原)ェ帰着ス、夜ル近隣衆打寄リ坂迎馳走等有タリ、

丁丑弾雨日記

河東祐五郎手記

我郷亦私学校の設けあり、区長小倉壯九郎・副区長堀與八郎之が長となり万事を指揮す、至是壯士相胥いて入校す、蓋し勢止を得さるなり、常時出ては石寺の野を開き甘藷を種え、筋骨を練り、入りては野間清十郎・西村甚五衛門二氏を聘して講師となし孫子及左傳を講せしむ、終に之を隊伍に編制し危急患難手足の如く相扶助せしむ、二伍を併せて什となし、更に合して部番となし以て統督に便にす、機勢漸く熟す、即ち銃を磨き刀を研く、弾丸を鋳、硝薬を包む、機全く熟す、校壁に貼紙して曰く、「大砲三発相図の節は各非常の用意にて参校すへし」と、於是乎皆衣を調へ脚半を縫ひ及硝薬並に軍中須要の品物を納るゝ処の袋を造る、脚半は紺色、袋は黄色にして長四尺、以て我党員の目印となす、用意全く整ふ、

二月七日、午前六時寧静丸入港、本校三発の号砲を発す、各人倉皇脚半を附け草鞋を穿ち黄袋を右肩より掛けて左腋に結び、刀を帯び銃を担ひ厳然たる軍容馳せて校

庭に集る、予携ふる処の銃は「ミニヘル」の先き籠めにして雷管打ちなり、袋には鰹節壱本と紙・糸・針・歯磨道具と少許の気附薬等を容る、服は即ち新しきメリヤスの襯衣二枚を重ね、仝し袴下壱枚に筒袖の綿入壱枚、裾を端折りて帯にはさみ、仝しく羽織の丈け長きを着す、帽は平素の羅紗毛のにして而して別に雨具を持せす、諸員の服装大概仝様なり、但用意宜き者は羅紗の雨外套を着るものありたり、別に異国用と称して苧の草鞋壱足と是に藁の草鞋二三足を腰に附く、白木綿の帯に手拭を挿み又弾薬を纏ふ、而して艦は直に南島に向けて航す、乃ち兵を分ちて市中の民家に休泊せしめて家に帰ることを許さす、以て本艦の帰るを待つ、

八日、午后七時、現和村田之脇浦(西之表市)に着船の報あり、即ち令を下し各部落の順序を以て旧慈遠寺跡遙拝所前の広庭に整列せしむ、整列終るや即ち進発の令を下し一番部隊より順次進んで列の正面神前に備へられたる神酒各一献を尽して辞訣し、旋つて神門より繰出す、総ての家人総ての親族悉く門外に躊立して之を送る、嗚呼其れ人世は生別より哀しきはなし、此中半ばは是れ故山の秀容此時に見収め相互の音容此時に絶えなむ人の在るを知るや知らすや、母子弟妹、或は夫妻歔欷飲泣、僅に送答して曰、万々自愛せよと、此夜大雨車軸を流す、郊路泥濘行歩頗る困難、三里の行程松火相続き暗を衝て夜半に達する事を得たり、乗艦は明暁に在りと云ふを以て各隊民家に宿泊す、各人の従者或は家人自ら随従此処に至る者甚だ多し、未明乗艦抜錨、

船小に人多く僅に膝を容るゝのみ、且つ風強く浪高くして動揺甚しく頗る苦し、午后七時頃鹿児島着、警察の点検を受けて下艦兵学寮に入る、

二月十四日、各郷の兵員悉く集り、出発既に近きに迫るを以て旧御殿下に集合、茲に隊伍を編制せらる、午前七時出寮其場に至る、連日の大雪片々積んで一尺余に至り、屋を圧し樹を折り、満目皚々たる白銀界、諸兵陸続として集来り満場忽ち兵を以て充つ、見渡せば渺茫際なき銀世界、只是幾千目に余るの黒装隊、所々に白烟の渋々たるは指を墜すの家威(寒)に堪へ難く、多少の暖を取らん為め、雪に埋れたる水木を焚くと知られたり、現兵凡一万五千人分て五大隊となし、大隊は十小隊、小隊は二百人、而して小隊に左右半隊あり、大隊一番は篠原國幹之を総へ、第一小隊は西郷小兵衛之に長たり、其左右は林

七郎次・鵜木五左衛門、大隊二番は村田新八之を統へ、三番は永山彌一郎、四番は桐野利秋、五番は池上四郎之を督す、而して重富・帖佐・加治木・國分は別に二大隊を編制し別府晋助(介)之を率ゆ、予は同伍の美坐時贇・山崎六郎・羽生惣二・河内菊千代（河内は後渡邊博と改名、羽生は後の子島也）と第一大隊一番小隊左半隊四番分隊に編入さる、同郷の者は只此五人のみ、而して明暁出発の令を伝へ私学校本営に於て各弾薬八十発つゝを渡さる、乃ち帰寮、当時家大人(鮎五郎父)種子御邸に在勤せらる、午后往て此旨を告け辞訣す、守り袋と小遣銭にとて金拾円を恵まる、又旧主久尚(種子島氏)公に拝辞す、

二月十五日、払暁、五人同時に結束し、学寮屯在の我郷の同士諸君に別を告けて営を出つ、別れては又逢ふ事もしら雪の積りし中を、五人同時に急き行き、第一番大隊と高札掲けし其下に隊伍の調ふをそ待ち居たりける、既に各所の兵員集り了りければ則ち整列の令を伝ふ、各兵之を聞て順次を正しくし列を整ふ、西より東に延く正に是幾重の黒塀を築きたるが如し、時に聞く嘹喨喇叭の声、隊列少しく動揺すると見へしか暫くあつて進発の運動を始め徐々として其先鋒我右側を過んとする時、又起る喇叭の声、已にして我隊長号令して曰、「気を付け」又曰「進め」乃ち徐々として運動を起し進て別隊の右側を過く、恰も是混々として左右に分れ、一正一奇旋て熊本に合せんとす、則我一番大隊は西目街道より、第二番大隊は大口街道より軍威粛然鹿兒島を発す、市民争ひ出て之を観ること宛も堵を築くが如し、向ふ肥後路は思ひきや修羅の巷の大戦場、事の正非もしら雪の絶えて晴間もあらばこそ、空に連らなる銀世界、尺余に積りし其中を、僅に道を踏み分けて、花の都に陸立と聞けば心も勇ましく、寒烈辛苦も何のその、渇ける時は雪を嚙み、勢込んでそ進みける。伊集院に中食し、午后五時頃市來湊に着此処に一宿す、夜村外に雪を踏んで哨兵す、七里の雪中且つ初めての遠路、今や漸く寒威足労雨(雨)つなかち(ら)甚堪へ難きを覚ゆ、

二月十六日、昨来の大雪益降り増り寒苦実に堪へ難く、足殆と歩に耐へされとも、身は是一隊を形くるの(つ脱カ)一兵伍、午前六時に結束し街頭に整列、点検、号令を聞て進発す、川内に至る頃雪漸く晴れ僅に日光を見る、此処に中食す、時正に二時暫時休憩又発す、阿久根の前一里日全く暮る、一隊の士或は先或は後、旧正月四日の黒暗にも積りし雪

の光にて、朦朧に道を尋ねつゝ、切れたる草鞋を踏みしめて小石混りの坂道を、一足毎に念を入れ漸く宿屋に達したり、今日の行程十二里、

此日第三番大隊は西目街道に、第四大隊は大口街道に共に鹿兒島を発す、

十七日、前同時発足、出水に一宿す、

第五大隊鹿兒島を発して西目街道より進む、

十八日、出水を発し水俣に一泊、

十九日、水俣発、繋（津奈木）太郎の険を越え佐敷に一泊、

二十日、佐敷太郎・赤松太郎の二険を越え日奈久に一泊す、繋・佐敷・赤松之を肥後の三太郎と称す、羊腸の一線絶えさること縷の如く、険難実に名状すへからす、私に聞く、古昔薩兵甚強悍、島津氏率いて以て隣邦を攻略す、加藤肥州之を恐れ、乃ち薩より肥に通するの路を此嶮に通し、一朝事有るに際せば先つ此嶮を扼し、薩兵をして肥境に入ること一歩ならさらしめんとしたるものなりと、

二十一日、午前五時日奈久を発す、天未明けす、東方に当り出火とも見へて紅雲天を焦す、皆口々に云へる様戦既に始まりたるか、是必定熊本市中の兵火に罹りたるならむと、気を励まし歩を速かにして行く、八代に至り夜始て明く、午后一時宇土に着中食、直に立て前行す、薄暮川尻に着、此夜泥足の儘草鞋も脱かす、刀は帯に銃は手に、主なき家に這入り其儘此処に仮寝しける、或は土庭の壁隅に身を縮めて休むもありたり、十時頃とも覚しき此（比カ）一条の白布を配付せらる、隊長曰、以て左腕を扼すへし、是即ち我兵の徽章なりと、

大口街道よりの第二大隊亦到着、昨夜先着の加治木兵鎮台巡羅兵と路に相遇ひ、終に開戦せしに台兵は市家に火して城に退きしと、此夜諸将相議して方略を策せしが終に断然開戦攻城に決す、

二十二日、鶏鳴未だ暁を唱ふ中川尻を発す、我第一大隊・第二大隊・第五大隊・加治木大隊合して六千余人、三道併進す、朝霞ほの〳〵と明渡る頃熊本に着するや令あり曰、「玉を籠めよ」と衆手早く装し終るや又曰、「散隊にて前め」と、即ち滴るゝ迄朝霞の湿ぶ麦畑に駈け入りて敵やあると捜しつゝ急歩を以て城壁差して進み行く、通過する処市街火猶滅せす渋烟深く燃へ籠めていとど惨況を呈しける、既に城近く攻め至るや軍中忽ち起る攻撃喇叭の声、すはやと云ふ間もあらばこそ抱へ持つたる小

銃を皆一斉に切つて放てば、城中より射出す万丸身辺に彙集すること雨よりも繁し、忽ちにして隊伍恰も麻を乱すが如く、右往左往と馳せ散りて土堤を小楯に取り以て応発す、両方より射出す砲声射遣る矢音、時々起る鬨の声、正に是れ山も崩え川も裂けなんとす、硝烟日光を蔽ふて昼暗淡、実に惨くそ見へにける、漸く五歩に十歩と進出て、爰に広袤際なき田疇の中頃迄進み得しが、回顧すれば是は又如何に、何時の暇にやら本隊を失ひ同伍をさへに離れて只一人、詮方なけれは田の畦を小盾に執り時々銃を放つて敵に応す、予か五六間後の稲塚に拠りてありし一兵は敵弾に中つて戦死を遂く、是れ戦死者を見るの始めなり、天を仰けば日午時を過き切に空腹を感す、乃ち厨を開けば玄米の飯に少許の味噌を添へたり、之を食し杯して時を移す中、余りに手痛く銃丸の来らさるに心も緩み、いつの間にやらすら〳〵と寝込みしとは夢知らす、不図目を開けば蒼然として暮色薄り、城壁より射出す銃口火を見るに至る、乃ち透きを窺ひ走出て本と来りし方に退きしに、倖なる哉我分隊の士此処に屯在し居られたり、而して美坐氏は予の所在を捜らんとて出てられたりしに稍ありて帰り来られたり、共に二本木に引揚け民家に休泊す、

◎此夜諸将川尻に相議して曰、兵を一城に屯するは策の得たる者に非す、宜く若干を止めて城を鎮せしめ、余は分れて二筑・豐・肥を略し、長崎・小倉を扼すへし、と議終に協はす、全く攻城に決す、

廿三日、未明将に出発せんとす、人あり戸隙より詈て曰、汝等何を斯く安怠なる、執て以て軍法に処せんかと分隊長笑て答へす、人亦去る、乃ち出て城を右に迂回し本妙寺前の側なる人家の庭に畳を積みて塁となし、終日此処に防戦す、郷人羽生市郎左衛門氏に遭ふ、互に曰、事其れ如何と未た其後を言はす、一砲丸爆然屋梁を砕き塵土身に蒙る、終に言ふ所あらずして塁に附く、夜入りて此処を立出て本隊を尋ねしに、八幡山まで進出し居るとの事につき、馳せて彼処に至り本隊に合す、暫くして令あり曰、敵或は暗に乗して襲来せんも知るべからず、若来らば斬り込を掛けよと、乃ち銃を荷ひ刀を引て終夜山上の木陰に伏して今や来るを待掛けたりしも終に来らず、

◎我軍大砲を擁せす、攻城甚た力なきを覚ゆ、則ち急使を馳せて之を鹿児島に取り、祇園・段山の二所に置き

城内を俯撃す、

廿四日、兵を抜いて二本木に揚く、

廿五日、十二時頃なりき、不図街上を見る、我郷人肥後雄一・長山甚兵衛・種子島時康・田上貞質・吉良恕助氏等十八名通過せらるるを認む、則ち立出て面晤す、是は戸長、或は副戸長又は事故の為め後と立ちの兵にして今到着せるなり、

◎天皇京都に駐御詔して征討の令を下し、有栖川宮を総督となし玉ひ、西郷以下の官爵を奪ひ、大に征討の兵を発し玉ふ、其兵陸路熊本に入らんとす、我軍兵を分て諸道の険を扼す、小倉の台兵先到る、村田三介二小隊を以て之を植木に敗り、其第二十四聯隊旗を得たり、桐野・篠原・村田の兵官軍と山鹿に戦ふて大に之を敗る、

此夜、惣軍凡三千人三道高瀬(玉名市)に進発す、初夜二本木を発し、廿六日、午前八時高瀬に着す、我隊は廻つて川の下流を渡り麦田に散隊し敵を上流に横撃す、銃丸既に雨の如く交る、砲声忽然として我右背に聞ゆ、我兵狼狽伍を乱して之に当る、敵の一隊背後に廻り我左翼を撃つこと甚急なり、我兵今や腹背敵を受く、僅に畦畔の地物に拠り丸を防ぐ、或は水溝に陥るもありしが右翼前面の敵稍少数なるに似たるを以て力を極めて之を攻撃せしに、遂に之を撃退することを得たり、然るも左翼背後の敵は攻撃益々急に我軍甚苦戦なりしが、兎角する中我応援兵遠く廻りて忽ち敵の背面を突きしより、敵乃ち民家に火して逸走せり、此戦我小隊長西郷小兵衛(隆盛末弟)、戦況を視んとて堤上に上りしが忽ち弾に中つて死す、暫くありて西方乃ち左翼に当り砲声忽ち激しく聞へければ、訝りながらも応援の心組を以て馳せ向ひし処、味方は早や敗北と見へて散々に潰走するの時なり、敵は勝に乗りて追撃甚急なり、我隊暫く此処に防戦すと雖も倒瀾の勢終に支へ得す、今は同く敗走となり味方を差して争ひ走る、走て川に至れば渡船只一二隻のみ、斯る有様なれば衆兵船を争ひ誤て水に落るもあり、一隻は余りに多人数乗込みし故中流に至りて沈没せり、予等は幸にして無難に渡り得たり、今は敵追ひ迫るの恐れもあらざれば徐々として引揚くる、斯る処に土民等は、数多の顆飯を持来りて軍士を労する其志の程殊勝にも又有難かりける、朝来未だ一食もせさりし事なれば皆争て之を食し以て饑を医す、

◎於是、三軍各其便に依り田原(植木町)・伊倉(玉名市)・山鹿の各所に退

く、我隊は伊倉に退き寺院に休泊す、其寝に就くや下に麦稈を敷き上に畳を伏せ其の中に潜入したれども、堅氷指を墜さんばかりの厳冬なれば苦寒肌に砭して通宵眠り得ること能はさりき、此宿に於て吉良省三・名越榮一・上成傳吉氏等一伍の人に遇ふ、

廿七日、猶退いて吉次峠(玉東町)を越へ木留村(植木町)に至り小学校に宿す、甚寒堪へ難く床を折り柱を抜き、火を熾にして暖を取る、

◎桐野等山鹿の本営に於て、南ケ關進軍を議決し、即時軍を発す、

三月一日、木留を発し西南の方一里を隔つる大多尾(河内町)村に行き登降各一里許の高峰巓に番兵を張る、高瀬に通する間道なり、熊本協同体(隊)も亦来りて我左翼に塁を築きて之を守る、

◎南ケ關に向ふの軍、田原・山鹿の急を聞き軍を還す、

二日、午后五時大多尾を発し吉次峠に応援す、着するや戦正に酣なり、直に兵を山上の樹陰に配置せり、文目も分かぬ暗夜なれば元より敵の遠近さへ分らす、只銃声を絶たすして敵の襲撃に備ふ、

三日、敵は益激しく攻撃し動もすれは我に突入せんとするの勢ありしが、午后一時頃ともなりぬれば斯くては果てじとや思いけん、雨の如く発射する我銃丸を冒し遂に山頂に攻め登り射撃豆を炒るか如し、我兵亦必死を期して防戦甚努め、密集部隊間抜して側面に廻し激しく突撃せしむ、其猛撃に支へかねてや敵は遂に銃を提けて潰走す、之を見たる我兵はどつと揚けたる鬨の声、銃を攢めて追撃す、跡追ふ味方も魂気限り北け行く敵は必死の場合銃剣も打捨て負傷者さへ得揚けすして敗走したり、溝には鮮血湛へ、畠には死屍横はる、満目の山樹弾痕蜂巣の如く、地上の遺莢積んで堆をなす、如此戦争の激甚なる死屍の遺棄せられたる触目の悲惨なる未嘗て見さる所、そゝろ感慨に堪へさりき、夜半軍を大多尾に還す、行くときは是擾々一隊の兵、帰るときは是寥々半隊の士、今そ知る我隊も亦死傷甚多かりしを、

三月十二日、午前応援行の命下る、乃ち一隊を以て吉次峠を越え高瀬の方位に当る鍋(岱明町)の口といふ処に向ふ、山上より瞰みれば敵兵山下の田畝に蟻集せり、攻撃の喇叭に連れて発砲戦を挑み次第に山をそ下りけるが、敵は差したる拒戦もなさず只応発をなしつゝ後方の山上にと引揚る、山上を望めば塁ありと覚しく、人頭の左右するを

見る、蓋し我を山下に誘ひ寄せ俯撃せんとする者の如し、我兵早く之を察し、爰に私に退軍を令し次第繰引きにして無難に軍を抜て帰る、

此時山鹿口戦甚困む、一勝一敗定数なし、幸に勝を得るや砲銃硝弾地に委積す、是を以て我軍敵に資て乏しからさることを得、

十五日、官軍大挙山鹿に迫る、砲雷剣電殺傷過当、夜に入り両軍交綏委屍累々各所岡をなす、

十七日、官軍又山鹿に迫る、盛に大砲を発射して軍勢を張る、我兵甚其破裂丸に難む、終に怨軍を以て吶喊奮進短兵之に接す、敵兵披靡、

十九日、午后四時東方一里の野出(河内町)に援軍、此夜此処に泊、

二十日、午後一時大多尾に帰る、

此時田原甚急(田原坂失陥)、散兵既に山鹿に沓至す、山鹿の軍兵を分つて之を援ふ、已にして植木亦甚急なり、又三中隊を抜て之を援ふ、於是山鹿の守兵殆んと空虚、乃ち諸将相議して曰、敵に此虚に乗せらるれば一敗地に塗れんのみ、若かず後図をなさんにはと、乃ち先つ輜重を挙く、天明田原の軍終に守を失ふ、援軍向坂(植木町)に要して短兵急に迫る、斬首二百余級、進て植木に守る、

廿一日、官軍果して山鹿の虚に乗す、我軍且戦且退き軍を全ふして田島に退く、

廿五日、我分隊赤荷田(赤仁田、天水町)に斥候す、峠を下ること一里余、平野渺茫高瀬に連なる、恰も敵の斥候亦此処に来らんとす、其兵員凡十人許、彼終に別路に迂回して幸に相遇せさりき、此辺田畑に穀を種(植)えすして柑橘を植う、遠く之を望めば鬱たる茂林際涯なし、民其益金を以て生計に資すと云ふ、

廿七日、夜九時三四の砲声忽然として耳朶を打つ、隊長驚叫して曰、「小隊気を付け」と、全兵令を聞て狼狽銃剣を索り出て陣前に隊を整ふ、見るが中に高瀬の方面より南に延て幾千百の松燈銀河の星の如く、原野山岳の別もなく凡一里位の広さに散点し、時々銃声を交へて寄せ来る、依て山下に休泊する処の右小隊にも急を報し、陣頭に整列し臨機の防禦策を施さんとす、此夜会々雨而して殆と咫尺を弁せす、漸々近寄る所の松燈は既に七八丁の所に来るや忽ち滅するが如く、暫くにして復た遠きより来ること前の如く、如此すること三四度、於是乎衆大に疑て曰、兼ねて我等の見慣れし如く向ふは山岳重畳

し、彼か如く平易に人の跋るへき地にあらす、且つ明滅進退彼の如く速かなるは豈人為の能くする処ならんや、疑しきことの限りなれと、或は営中に入るもあり、又猶陣頭に躊むもありたり、暫くありて右小隊息を切つて登り来る、此有様を見るや驚き叫て曰、必定敵の夜襲と覚えたり、半隊の士如此其れ怠慢なる可んやと、又何事をか独りつぶやきて辺りを馳せ廻り営内に在る者を叱咤し、隊長押伍や何国(処)と言ひ狂ひ、急に兵を部署して各塁に伏せしめたり、深更に至るも寄せ来らす、松火亦全く消滅す、於是一と先各塁の兵を揚く、右半隊の士皆下山す、

廿八日、昨夜の事余りに不思議なりければ、熊本隊及土民に告けて其何なるかを尋ねしに、彼等云へる様、果して如何なるかは知らざれとも、夜に依りて狐狸の類にもあらんか、腹を皷して千万の鬼火を揚くる事あり、昨夜は特に雨夜にてもありつれば或は是等の類にもあらんかと、時に吉次・木留の兵寡少なるを以て之を補充せん為め我隊を二分し、左右日を分ちて交互に守備に就く事となり、此夜四時我左半隊は木留口に向ふ、夜中或は過誤あらんことを慮り、未た塁壁に達せさる前に於て天明を待つ、

既に夜もほのぼのと明渡りければ、爰に隊を戒めて戦線に就く、起て四方を望めば、西南に吉次峠聳へ、東北は一面渺茫たる平畠にして、青々たる麦苗極目限りなし、而して一条の深道人肩を没し、延々遠く植木・田原に通す、乃ち此処を以て哨兵線となす、

道を塹濠となし堤を塁壁となし此処を永屯の所と定めしが故に、風雨暴露、起臥・飲食・糞尿皆此に於てす、堤腹を穿ち入口に藁を葺き僅に雨を避けて穴居を為す、而も大雨には糞尿尽く流れて汚穢満衣に透る、日輝く時は水気蒸発して悪臭鼻を衝く、斯る困苦を忍ひつゝ僅に保つ玉の緒を狙ふ敵兵絶え間なく、銃丸を飛はし少しにても塁上に人影の見ゆるあれば、忽ち銃を攢めて乱射をなす、天を仰けば蒼々として際なし、此役何の日にか息まむ、只待つものは朝暮の饋餉のみ、

三十日、同伍山崎六郎氏他の一兵と薪を後方に採り荷にて塁に帰らんとするの際流矢頭に中つて倒る、伍長美坐時饗氏之を川尻に送り葬らる、

四月一日、午前五時朝暾僅に輝く頃、敵塁喇叭の声起る、起て之を窺へば一人二人と塁を越え、走つて我塁前七八間の所にある土堤下に入る、我兵急に戒厳曰、今日

敵慢り難し、猥りに銃を発することなく飽く迄虚を示せ、彼若し進んで我塁に上らば則短兵急に突出せよと、而して吉次峠は砲声已に甚盛なり、時を経ること殆と一時間、砲声次第に山下に引入りて聞ゆ、山上を顧視すれば敵兵と覚しく、陸続上り来り見る〳〵一団の人塀を密列せしは已に此処は全く敵有となりたるを知る、既にして敵は分れて二となり、一は吉次の敗兵を追躡するにや、一は山路を斜に我に向て徐々として下り来る、暫くありて我左翼既に戦を始めしと見へ銃声次第に激しく聞へける、忽ちにして左翼前面一簇の民家焔々として燃上るを見る、而して吉次の砲声は次第に左翼を廻りて今は全く背後に聞こえ、我正面に伏するの敵兵は機を見て一斉に突撃せんとするの状勢あり、各隊長声を嗄して叫び廻れとも、今は全く敵中に包囲せられたる我兵、一人逃け二人走り敗北の倒瀾遂に回し得す全く大潰走とそなりにける、敵は此機に付け乗つて益激しく追迫る、遁路に沿ふたる民家の焼け落ちて渋烟深く封したる其中を身を翻して銃丸を潜りつゝ馳脱け、第二線の深道にそ入りにける、殆と絶えなんとする気息を継き、残丸を装ふて敵に向ひ、此に暫時を喰ひ止むる、兎角する中此処亦一人退き二人逃けて顧れば僅に六七人、此時は敵は早や左右を取囲み逃さしものをと狙撃する時にして、走路は左右に二所のみ、孰れも敵に占拠せらる、進退此に究つたる四五人は互に顔を見合する暇もなく、命を天にと期しつゝも一条の血路を開いて逃退す、左に折れて走るとき、右に田を隔てゝ斜に傾きたる畑地に集合せし敵兵は銃を攢めて乱撃す、飛来る弾丸身の四辺を掠め、雨と注き霰と敲き、其音既に魂を褫ふ、恰も是横に跳ね前に飛ひ全く喪意して走ること二十間許、先に走れる一人は何処にか銃丸を受けしと見へ鮮血滴々地に曳く、心は先に身は後に密雨の弾丸を潜り脱け、僅に第三線に入りし頃は気息切迫言語を発することを得さりき、恰も好し美坐氏川尻より帰隊せらるゝに遭ふ、羽生・河内両氏亦僅に脱し得たりとて廻り合ひ、互に無事なりしをそ悦ひける、

四月二日、敵は新勝の勢に乗し勢鋭く猶も攻寄する、間僅に七八間、我兵昨日の敗に臆しやしけん、稍難色ありしも勇を鼓して防戦に努め僅に戦線を保ち得たり、夜に入りて軍を抜て邊田野（植木町）に到り塁を築き之を守る、蓋し地勢の宜しきを得たればなり、然も地広く線長く兵足らざるを以て一塁僅に二人、塁の距離山を隔て家を狭み、

遠きは二十間余近きも十間を下らず、

三日、敵又進撃、激しく大砲を発射して人家を焼かんとす、予は伊集院の宮原又藏氏と二人なりしが、不幸なるは附近尽く民家にして敵の最も注目する処となり、右隣の一家は遂に火を発して炎上す、昼夜間断なく砲丸破裂土石爆散して常に安き心もなかりけり、

◎時に植木・田原は戦線の正面にして四万の軍雲集の処たれば、其戦特に激烈、半隊百人残る者僅に十七八人となるに至る、弾丸亦殆んと尽き防戦甚苦む、或は塁を掘つて遺丸を拾ひ、之を改鋳して纔に尽きさる事を得たりと云ふ、

四日、午前八時敵二丁喇叭にて進撃の調を揃え吹き、時々大閧を発す、今か襲撃すると待居たれとも攻め来らす、全く此処は虚勢にて実は左翼の別隊を攻撃せしなりと、

五日、大雨、塁内藁を葺ひて其下に居たれとも漏滴終に堪る能はす、於是乎塁後の人家に入り壁を穿て其隙より塁を監視す、

六日、敵又我左翼を攻む、我兵殆んと披靡、乃ち塁を空うして之が救援に向ふ、日を終るまで砲戦間断なし、其距離僅に四五間、一土堤を挾んで之に拠る、両手に銃を擡け敵を下撃す、敵亦然す、故に緊く身を堤に附くれば敢て傷を受くるの恐れなし、

七日、戦状前日の如し、時に喇叭を鳴し時に大閧を発し今にも突撃をなさんとするの勢を示す、蓋し敵植木・田原を攻撃するを以て此処に虚勢を張り、我をして彼処を援はしめさるの策乎、

八日、前日と異なる事なし、九日に至りては互に銃撃を止め、口弁相酬る、我は糞鎮と罵り、彼は薩摩芋と詈るに至る、

十二日、右小隊と交代し我隊は大多尾(河内町)に還る、

◎時に黑田参軍、川路・高島二少将の警視隊若干を率ひて日奈久・宇土の両浜に上陸し、八代に会す、我兵急を聞き乃ち坪井川を引て水を城外に瀦し以て城を囲むの兵を省き、新来の大兵に当る、猶邊身(見)・別府は馳せて鹿兒島に帰り、急に兵を募り千五百人を得て八代の官軍を攻撃せしむ、

大多尾に守るや、水に乏しく飲料僅に給す、加ふるに三月廿二三日の頃より土上に起臥し、硝煙に薫し、泥土洗はす日夜生木を焚きて暖を執り、面色土の如く、手足

垢を被る、営内を窺へは塵埃渋烟の中只眼光の炯々たる猿猴あるを見る、

此頃虱盛んに発生し、垢積り痒きこと限りなし、爪を立てゝ掻けば、則ち虱と垢と爪に満ち、肌は傷となりて殆と完膚なく、頭髪は蓬々として乱れ塵埃之を埋む、日和好き時は半虱子衣表に上り蠢々列を作りて這ひ回る、衣の縫目には卵子を生み付けて透間もなく、恰も砂を撒き掛けたるが如く、遂に脚半に迄も群生して全身虱の巣となる、之を掃滅するの暇たになく憂きことの限りにこそ、当時の団珍紙百人一首の歌をもじつて諷して曰、「戦を休む其日の虱狩、衣干すてふ頭掻く山」と実は即実なりと雖も困苦は未た穿ち尽さゝるの感あり、銃は錆ひて磨くに油なく、刀は鞘割れ身出て糸を以て之を縛るもの多し、軍中の苦難誰か之を知る、刀を脱し銃を措くの機会たになく、鬱悶此時より甚しきはなし、

◎川尻遂に守を失ひ敵勢破竹の如く、あはや本城と戦線を合せんとす、桐野、西郷を強ゐて木山(益城町)に移らしめ、自ら兵を以て決死之に当る、官軍民舎に火して追躡甚急なり、我兵守塁を築くに暇あらす、敵繞つて國分(熊本市)・砂取に乱入す、桐野以下如何ともする能はす、辛ふして木山に退く、

十四日、軍中相伝ふ、川尻破れ熊本城囲み解けたりと、一軍恟々今や敵兵頭上に襲ひ来らんかと思はるゝ程にて人々安き心もなかりしか、夜に入り本営より急使あり曰、各隊長速に会せよと、我隊長行に臨み事測られさればとて美坐氏を同行せらる、

我左翼にありし処の熊本協(隊長宮崎八郎)仝隊は忽ち陣木屋に火して其儘隊を収めて引去りたり、此夜雨、然るも止を得さればとて、之と熊本隊の塁砦に迄も我より守兵を出して警戒を厳にす、此夜一人の熟睡する者なく銃器を持して放たす、蓋し風説及ひ協同隊の撤退か非常の恐疑を与へたるものと思はれたり、

此時、城中糧食漸く尽き麦粟の粥を飲み僅に餓を支ふること既に一週日、更に五六日を過さば糧全く尽くへかりしと云ふ、

十五日、午前十一時頃、惣軍引揚けの令下る、待ち兼ね居たる全軍の士速歩を以て退軍を始む、僅に一里位も行きたりし時、後ろを顧れば所々に黒烟天を衝いて揚るを見るは、早や敵の追躡して沿道の民家に火するものと知られたり、進んて植木街道に至りし処諸軍恰も一所に

出会ひ、彼我殆と混乱、擾々道に余るの大兵なれば容易に前進することさへ能はず、後隊よりは敵既に背後に迫るとて頻に駈足を叫へとも前隊進ます、然も尚ほ後よりは頻に推し来り、足地に着かすして一進一退其混乱名状すへからす、我隊は後人は前人の帯を緊持し一線相連ね人を縫ふて之を通過せんとす、後隊よりは敵既に前路を扼すとか、横面を断つとか、叫ふもありて喧囂聴くへからさる中、何れより来りしか銃丸一つ声を曳て空を飛ひしかば、すわや敵よと散々に走せ散り推し乱し、上を下へと揉み合ふ中を辛ふして本隊を尋ね付け、又相連ねて一歩二歩とそ進みけるが、夜に入りて大雨頻りに降り注き道路川を為し泥濘脛を没す、暗夜の事なれば各隊の士、或は先或は後断々続々相呼ひ相答へ、互に扶け合ひてそ引揚くる、其間転倒幾十回裳衣皆泥土、雨湿身に透り冷寒困憊共に堪へ難く、十二時きに(過脱カ)戸島(熊本市)に着一宿す、夜既に遅くして食を調ること能はす、厩舎の土上に麦稈を敷き此に座臥す、或は火を熾んにして衣を乾すもありたり、

此時、官軍豊後梨坂(二の宮町)に至るの報あり、乃ち兵を派して二重峠(阿蘇町西端)・黒川(阿蘇町)の二所を扼せしむ、官軍果して来攻、我兵奮戦之を敗り追撃一里に及ぶ、中津の士増田宗太郎(未)兵凡六十人を以て二重峠の軍に来り投す、増田の兵を挙くるや梨坂の官軍竹田に退く、我軍進んて梨坂に陣す、後官軍大挙来り攻む、我軍遂に敗走す、

十六日、新迫に転営、戸島より僅に半里、直に北方保田窪(熊本市)に救応す、幸ひ事大に非らす銃を発するに及はすして還る、途中八板正一・石黒跡次・田上義顯の諸氏に遭ふ、(跡次は後清明と改名)

二十日、急に応援として保田窪に到る、時恰も十時、着せし時は早や我兵敗走、一里許も退来りて猶後退せんとするの時なりけるが、我隊の応援に力を得て菜種花咲く畑の畔に沿ふて此処に防禦の線を占む、追ひ来る敵は勝に乗り今は隊伍も散々に追撃已に近に迫る、之を見るより我兵は急に隊伍を指揮し、新手の兵を入れ交へ或は正面或は側面、今や戦線を踏み越えんとする時こそよけれと、「打て」と、掛けたる号令遅しと只一斉に切つて放つ、不意を打たれし敵兵は勝に乗して乱れし隊伍を其儘に反敗の姿と変せしを、機会に付け入る我兵は銃を装ふも手ぬるしと、夏猶寒き氷の刃言ひ合さねと一斉に抜き連れ、どつと揚けたる声諸共斬つて入りたる破竹の勢、敗色見えし敵の兵如何てか之を支ふへき、忽ち大潰走と

そ変しける、瞬く間に勝敗全く地を易えて疾雷恰も耳を掩ふに暇あらさる敵の兵狼狽言ふはかりなく、此処の山陰彼処の土堤下に、只蠢々と集り居るを鉾先揃えて縦横無尽に斬り廻る、此処に一組彼処に一手、入り乱れ入違ひ思々の戦にて、前なるは深く敵営を衝き、後なるは猶敵を追取り巻き、片端より薙き立てつ十二分の勝利を得にければ分捕の機械も数知れす、伏死累々野を蔽ふ、目も当てられぬ有様なり、戦既に止みければ、先きなるものは還り来り、後なる者は進み来り旧線に惣軍を纒むる中鮫島順一・河内何國・美坐一二三・鮫島仲次・八板正一諸氏に遭遇す、開戦以来今日始めて大勝を得て快云ふへからす、互に今日の戦功を語りて喜ひ限りなく、県地に分れし其後は音信をたに聞かさりし其人等に戦勝の場に相遭ひ終に喜極つて感生す、最早や惣勢も集まりしかば守兵と別れて我隊は悠々として引揚る、時恰も黄昏敢て小憩たもなさす、木山(益城町)に向つて進発し既に木山に着して尚ほ村外の山上に屯守す、

廿一日、午前八時頃山を下り猶引て河原に到る、此処は後ろは山甚高くして前は一帯の大河混々たり、此処に中食暫く休憩せしに睡眠堪へ難く各人其儘座睡陶々たるとき、耳を貫く砲声に置いたる銃を取るときは早や片足は起ち上り、輜重兵は機械を捨て、砲隊は砲を委し、馬夫は荷物を引卸し皆身を以て逃出す、水を潜つて彼岸に達せんとてか川に飛入るもありたり、我一隊も人家に沿ふて走る中、隊長急に麾き僅の道のあるよとて、是より後山攀上り、とある竹藪に埋伏す、敵は我敗兵を追ふて攻め来りしが、思ひもかけぬ藪中より切つて放ちし銃丸に、前に立ちたる二三人は其儘其処に射倒されければ、残兵忽ち其処に散伏す、それと見るより我兵は大閧跳出之に殺倒す、別に一隊我右より突進す、此勢に支へ難しとや思ひけん、之より小数の敵兵只一散に敗走す、能き程に之を追撃し乃ち軍をぞ旋しける、我隊死者二人、又夜を冒して退軍す、羊腸の坂道を攀上れば茫漠際なき原野に出づ、明け野暮れ野といふ、夜明けに之を出れば日暮れに彼処に達し、日暮れに彼処を発すれば天明此処に(田小野、矢部町)達するより、此名ありと云ふ、恰も天明くる頃多尾野に達す、

廿二日、村外に塁を築きて之を守る、此宿に於て名越榮一・安藤金次・上成傳吉諸氏に遭ふ、

◎隆盛人吉に在り、諸将を集めて軍議をなす、薩隅日三

州に割拠して以て再挙を謀らんと、乃ち隊名を改制し、小隊を中隊となし左右に隊故の如し、其兵員二百人、山鹿口に在りしを奇兵、田原口を振武、木留口を行進、川尻及攻城兵を正義、御舟を干城と名つく、飫肥の小倉處平手兵を以て奇兵に属す、後又新募の兵を以て隊伍を編成し破竹、雷撃等の名を附す、

廿四日、晩番兵に在り、午前二時令あり守を撤せよと、乃ち引返れば更に令あり即時軍を抜けと、而して人毎に給与方に行き糧米壱升五合を受取りて之を携帯せよと、即ち之を袋に入れて腰に附け草鞋を穿ち準備全く整ふ、三時乃ち発足す、此夜大雨咫尺を弁せず、矢部に至り夜明く、猶進んで馬見原(蘇陽町)に至り此に中食直に発して倉岡(鞍岡、五ケ瀬町)に至る、日即ち暮る、此処に一宿す、此夜土人に草鞋を作ることを習ひ得て各自に之を製作して携帯することとしたり、此間羊腸危嶇の山道、草鞋尽く破れ行歩甚艱む、道中下村市郎(市郎は後時緝と改名)・杉崎佐太郎・渡邊吉助・山下五後右衛門・河島静次・河内英藏諸氏に遭ふ、

廿六日、昨来の大雨蕭条猶止ます、午前八時倉岡を発す、一大川を渡れば崎嶇たる磴道足を嚙み、四方は嶄岩屏風を立るが如く高さ幾百尺なるを知らず、岩角皆傾き樹木倒懸仰き視ること能はさるものあり、木根又は岩角を持して纔に攀登る、鹿も猶越え難きかと思はるゝばかりの難場にして、俯して足下を瞰めば水烟茫々たる遙の底に人声を聞き、仰きて天を望めは山樹瞑々の上に断続として人語を聞く、昨夜より大雨冒せしこととて雨水全く浸透春寒骨に徹し、升余の米さへ堪難く、銃器・弾薬・帯剣亦重く、恰も肩挫け、腰も足も折れなんかと思ふばかりの其上に数千の兵隊日を連らね、僅に羊腸の一線路を進行する事なれば、泥濘深ふして脛を没す、又能く滑りて倒顛する者幾十度、初め発するとき草鞋五六足を帯びたりしも尽く切れ果て、今は徒跣の儘奇(崎)嶇たる磴逕十数里を行く、足破れて血を見るに至る、斯る難歩の路なれば隊を連らぬること能はす、或は後或は先各隊相混して三々五々おのが随意に進みける、二里或は三里にして僅に数軒の民屋あれとも、数千の大軍容るゝに足らす、又も歩を続けて且憩ひ且歩し、日将に暮れんとする頃持(椎葉村)田に着す、我等は此日の最遠着の兵と見へ此に宿せしは僅に二十人なりき、

此処は椎葉の所謂五家の山地にして、人烟甚稀少、羊腸一線の逕路僅に江代(水上村、今ダム湖底にあり)に達す、居人食に米塩なく只々蕎麦・

蜀黍・稗・粟等を以て生を繋くといふ、女は眉を剃らす歯を染めす、坐するには男女共に趺坐す、而して皆樺木にて製したる煙函を携ふ、家屋は樺其他の良材を用ひて之を作り茅を葺く、広約二十余坪、間毎に必す炉を設く、而して此地地味の自然に依り山を伐り地を焚けば、後とには必す茶樹自生す、土民其茶葉を摘みて他に売り以て米塩に易ふといふ、

廿七日、雨逕頭に立ち本隊を待合せ而して発す、一大川あり深数十仞岩角甚高く水為に激して満川尽く白浪、之に架するに吊橋を以てす、其構造たる蔓を以て木片を横に編み、更に長き木片を取りて之を縦に編み付け、撓まず折れさる重からさる様に作り、之を幾百筋の蔓を以て両岸の樹枝に掛け吊し、遠く両岸に達す、長凡十間幅二三尺、中央に尺余の小板を縦に並へ之を伝ふて渡る、一人之に上れば揺々として止ます、人をして今は断截墜落せんかとの危惧を懐かしめ容易に渡り得さらしむ、辛ふして之を渡り桑弓野（椎葉村）・小崎（同上）抔云へる処も打過きて胡摩越に差掛る、前より降続きたる大雨に泥路川の如く満身泥に塗れ難歩言ふへからす、僅に岩野（水上村）に着し宿所を求むれとも得す、暫くは雨に打たれ途上に立居たりしも、辛ふして一小民家に宿する事になりければ、乃ち火を焚きて衣を乾かす、時恰も春暖とはいへ、三四日濡れ続きのことなれば凍冷身に徹し肌皆粟を生す、

◎隆盛令して曰、奇兵隊曩日豊後に進撃すと、機失ふへからす、振武・行進は鹿兒島に備へ、干城・正義は江代方面を守れと、各軍の方略乃ち決し、数日進を分つて進撃す、乃行進十八中隊、振武二十中隊、奇兵一中隊其兵凡四千三百人、貴島清・中島健彦の二将之を統へ鹿兒島に還る、

廿九日、三田井（高千穂町）空虚、我行進一中隊暫く行て之を守るへしとの令あり、衆皆囂々不平を鳴す、然れとも軍令如何ともすること能はす、乃又折り返して小崎に至り此に一泊す、途中下村市郎・森彦熊（彦熊後友諒と改名）二氏に遭ふ、

三十日、各兵士相議して曰、如何なれば我中隊に限り三田井に引返すへきや、此処よりは一歩も返すまじと、中隊長松岡清助之を慰諭す、聴かす、猶曰、既に糧米を桑弓野に送りたり、強て此処に止まらハ徒に飢餓するを如何せんと、止を得すして桑弓野に行く、既に着す、又曰、此処左右小隊の宿舎なし、一は持田（椎葉村）に返せと、乃ち

我左小隊ハ持田に宿す、

五月四日、軍令又如何ともなし難く持田を発し一里を返して谷に下り川を渡り戸根川に着、此処に宿す、

此村、八村大明神の祠あり、奈須(那)の與市宗高を祀るといふ、知らす果して信なるや、併し此処那須越又ハ那須山と称するを以て考ふるときハ、那須明神の縁起旧記の徴すへき者ある乎、私に聞く、往昔平家没落の際、其残党此山に潜匿せしを源軍追窮止ます、奈須宗高の実弟某に命して之を討たしむ、某至れハ則其降を納れ己れの姓那須を与へて而して帰る、後ち平族其恩を記して之を神に祀る、八村明神即是れなりといふと、否乎、

六日、戸根川を発し中崎に小憩、小春峠の嶮を越え午後九時坂本(五ケ瀬町)に着、猶進んで宮の原(五ケ瀬町)に泊す、

七日、十時宮の原を発し、杉の越(高千穂町)の急嶺を越え午後四時三田井に着す、三田井は山間の小邑なり、夜村外に番兵す、

九日、明くるを待つて人吉に還れとの令あり、又各白米壱升五合を負ふて天明を待つ、

十日、結束街に出つれば、丹荷に酒を満て隊の前面に備ふ、乃ち杓を引て立飲聊か気を盛んにし雨を冒して此処を発す、午后十時戸根川に着、火を熾にして衣を燎る、

十一日、戸根川発持田を経て小崎に泊す、

十二日、小崎発江代を経て岩野に泊す、

十三日、岩野発梁瀬に小憩午後二時人吉に着く、人吉は玖摩の城下にして人煙繁華の小都邑なり、於是稍生色あり、

十四日、河内覺右衛門・山下元禮・大牟禮立右衛門諸氏に遭ふ、阿世知半助・阿世知謙一・美坐轍氏亦宿前を通行せらる、

十五日、人吉城趾を視る、石垣高く地を抜くこと六七十間、境内山あり谿あり、前に大河を繞らし、後は深壑を以て平地と境し、只西方の一面のみ街衢に通す、天下三要害の地といふ、

人吉滞在中河内節藏氏に逢ふ、郷里戸長役場よりの慰問として金若干（弐円位と記憶す）を恵与せらる、

奇兵隊の先鋒、兼行竹田に達す、猶進んで大分に迫らんとす、其備あるを聞て転して鶴崎(大分市)に向ひ不意を襲ふて之を敗り、首を斬ること十数級、竹田の士堀田政一なる者四小隊を以て我に属す、名けて報國隊といふ、大に弾丸に鋳造する所の鉛銅鉄を購求す、銅鉄亦尽きて梵鐘仏

具に及ぶ、

十六日、人吉を発し午后一時吉田(えびの市)に着、十七日滞留、

十八日、吉田発横川に中食、溝邊に一泊、

十九日、溝邊発吉田(吉田町)に中食、吉野を径(経)午后一時帯迫着、行進は其本営を帯迫に置き、兵線を磯浜に連らね、振武と本営(は)を伊敷に置き、兵線を武村より谷山に張り、奇兵は常盤・西田の間に配布す、

是より先四月廿六日、川村参軍海陸の大兵を率ひて鹿兒島に到る、近街に堡塁を築き兵を置て我襲撃に備ふ、県令岩村通俊・大書記官渡邊千秋は五月二日を以入る、

二十日、我中隊今は守所なく応援に備ふるのみ、午前十時頃豈思はんや家大人(祐五郎父)来訪せられんとは、而して今日迄の無事を祝せらる、出軍以来只一襲の綿衣、而して綿を脱き裏を離し今は単衣となせしもの絲綻ひ布破れ垢に染み泥に塗れ見るも憐れなる有様に、即ち其着せらるゝ所の衣を脱きて我に授けらる、乃ち立て之に着易ふ、猶言はるゝ様旧主家(種子島氏)は難を櫻島に避けられてあり、御邸も兵燹にかかり全く灰燼に帰し、土蔵亦焼落ちて重代の宝物・珍器悉く烏有となれりと、

廿一日、復訪はる、昨日も云ひし如く、御邸挙て櫻島におはすを以て我亦今日後刻渡海せさるへからす、今此処に相別かる復近く相見ることを得さるへし、故に今日も来れりと、予之を門外に送つて曰、今将何をか云はん、只希くは千万自愛あれと、欷歔他を言ふこと能はす、心竊に祈るらく、幸に運強くは再ひ尊容に接せん亦期すへからす、希くば自重せられよと、家大人亦曰、構えて身を危くすること勿れと、又他を言はす愁然相顧みて去らる、予目送之を久くし全く影の見へすなりし後も暫くは門内に入ることを忘れ居たり、

家大人、此日一口の短刀と長二尺許の小筐を風呂敷に包みたるものとを背に負ひ居られたりしか、是則御邸の宝物たる宋劉松年画く所の太眞出浴の図にして累代の神品珍宝中兵火を免れしは、重代宝刀の外只此一品のみとは後に聞き得たりし話なり、

廿三日、竹田の戦甚激烈恰も曩の田原・植木の戦の如し、

廿六日、雀ケ宮に移る、磯山上に塁を築き之を守る、敵は遠く磯天神社前に柵を植え塁を厚くして之を守る、敵の海軍龍驤(艦)鑑海を圧し磯沖に在りて屹然動かす、

廿九日、竹田の我軍守を失ふて走つて小野(字目町)市に保つ、

三十日、諸将相議して曰、一度此地を失はゝ延岡亦守り難からん、今の謀をなすものは、宜く三國(宇目・三重町境)・旗返(同上)等の嶮を扼するに若かすと、終に兵を進めて之を扼す、

竹田の官軍来攻、反撃之を走らすこと殆と一里、其本営を研り火を放つて退く、乃ち策を定めて臼杵の虚を突き進んで大分を攻略せんと、軍を分つて三となし、夜十二時を期して輜重を中軍に擁して発す、臼杵を距ること二里、官の守兵と戦ひ之を敗り勢に乗して臼杵に圧倒す、敵を斬ること二百、降を乞ふ者一百、

六月一日、美坐氏と岡(鹿児島市)の原に貴島通吉氏を訪ふ、氏は吾旧師なり、帰途押伍松崎貞房氏の寓に至り相携へて共に帰る、途中谷山新次郎氏に遭ふ、彼曰、人吉敗れ敵既に吉田に迫るとの急報ありたりと、

三日、松崎・美坐の両氏と共に諸塁を巡視す、巡て葛山の塁に至る、顧みて市街を望めば満街瓦片落々たるか中に土蔵の僅に壁のみ残れるが処々に屹立するを見る、是則鹿児島市街の兵燹に罹りし惨状なり、尚能く目を極めて望見すれば、旧君御邸の趾と思しき所、僅に亦土蔵の半は焼落ちて壁のみ立てるものあるを見るのみ、嗚呼(嗚)鹿児島市街は焦土となれり、三人相顧みて曰、惨たる哉、天を仰いで大息久之、

此夜、暗に乗して磯機械所を襲ひ、官遣す所の大砲数門を執つて而して帰る、

四日、午前六時頃毛倉(花倉)の塁なるへし、砲声忽然として起り、次第激烈となり又漸次近寄りて聞ゆ、皆如何と東方を望見し居たるに、早や敗兵の馳せ退くを認む、斯くと見るより我兵は急に兵を部署して斜めに東方に面して陣を布く、又若干を抜いて敗兵を援け、刀を揮ふて逃る敗兵を威過す、僅に戦線を作りて此処に暫く防戦す、応援益々加はり我兵甚勇む、於是敗兵は前の恥辱を雪かむと旗を振り刀を揮つて而して挺身奮撃、別隊横より突入、敵忽ち敗走、我兵追撃疾風の如し、敵逃るゝ所を知らす、此処彼処に追詰められ紫電一撃の下脆くも其処に死すもあり、或は遁け場を失ひ溪谷に陥りて自ら死すもあり、只能く走るもののみ僅に身を以て免る、

後谷山新次郎氏と共に毛倉の塁を巡視す、谷山氏守兵に向ひ怠慢此危事を来せしを戒む、守兵抗論、谷山目を張り刀柄を握つて曰、然らば何そ先刻の敗を取りしそと、守兵遂に黙して言ふ所あらさりき、

七日、我と谷を隔てゝ西に行進九番の守塁あり、午前

九時頃敵此を攻撃す、守兵遂に支へ得す塁を棄てゝ而して走る、我兵後塁に拠り、側面より之を狙撃す、敵逡巡、九番の兵豨突、敵遂に披靡、二死揚くるに暇なく先を争ふて逸散す、此戦龍驤艦砲を連発して其軍勢を助くること甚努む、一弾我前塁に入る、塁壁蕩夷、土石後塁を圧す、此時我兵悉く後塁にあり幸に一人の死傷者なし、先是龍驤艦最近きを我塁となす、故に砲を発する毎に一として我塁に的てさるはなく、山樹幹挫け枝折れ、土飛ひ岩砕け、兀として赭山となる、

臼杵城に拠るの兵、官軍日に沓至、勢孤なるを以て竊かに軍を収めて小野市(宇目町)に退く、

先是、小野市の軍転して重岡(宇目町)に合す、二十一日、軍糧給すべからさるを以て熊田(北川町)に退く、

廿二日、朝六時頃西北遙かに砲声の激しきを聞く、顧望すれば涙橋(鹿児島市)附近已に始まりしと見へ、硝煙漠々として松林を籠む、眺むる中硝煙次第に林を離れて陸に入る、蓋し我兵支へ得すして敵に押し上けらるゝものと覚へたり、已にして城山及其左右砲声皆起る、勢甚激烈なり、既にして急報あり曰、重富(姶良町)守を失ふて敵已に吉野に迫る、急に援けすんば事全く敗れんと、即我半隊を抜ひて吉野に向ふ、発するに臨み弾丸僅に三発つゝを配与せらる、且曰、弾丸を射尽さば唯刀を用ひよと、即嚢底に残る処の丸に取り添へて道を急ひて馳向ふ、到れば早や所々の民舎には焔烟漲り、味方は敗散の体と見へ各所より道路を沿うて走せ集り来る、敵の一隊之を尾撃すること甚急、乃ち兵を部署して街道を伝うて爰に戦線を布く、遠く原頭を望めば一団の屯兵山の如く、猶陸続として嶺を越え擾々として来る、蓋し重富より益多くの兵を送ると覚へたり、其勢此一戦を以て麑城を掃蕩し去らむとする者の如し、尾撃の兵已に前に迫り来りければ、我兵は今日そ最後の戦なるを死して丈夫の名を立てよと、皆一様に面も振らす戦ふたり、再ひ原頭を望見れば、兵団忽ち左右と正面に三線の兵緒を操り出し(繰)徐々として進行の運動をぞ始めける、而して兵線の愈延るに従つて兵団次第に小となる、見る中兵線全く三分し愈進行の速度を早めける、今や盛んに攻め撃つ竜虎の勢、未た勝負も見へさりしが、軍中忽ち起る進軍喇叭の声、是に気を得し我兵は、「エイ」と揚けたる声諸共刀を揮ふて殺到す、剣の光目に映し夏猶寒くそ見へけるが、敵を追ふこと七八町、此時は是れ敵の後続部隊の未た戦場に達せさるときなりし、此

機に乗して猶も追詰めんと迫まりしも、追々に後続の兵の着せしと覚しく、各所の砲声次第に激しく、山谷為めに崩るゝと思ふばかりにて、硝煙満野を蔽ふ、暫くする中右翼を顧れば砲烟次第に味方の方に突き入り来るは、已に味方の敗形を察するに足る、左翼も亦砲声の次第に背後に廻るを聞く、今は中軍も囲中に在るの心地して一歩〳〵と遁退す、気勢に附け入る敵兵の攻撃甚急なりければ、退歩の速度次第に早く遂に敗走とそ変しける、走ること七八丁、畑の畔塁を小盾に再ひ此処に戦線を占む、隊長慷慨叱咤泣て曰、嗚呼(嗚)我諸兵士思はすや、今日の戦実に此挙勝敗の決する所なることを、半歳の辛苦徒らに水泡に帰し、千歳の汚名潔すへからさらむ、其れ之を努めよやと、此時早や敵は前面に突迫る、僅に残る一二丸装ふ暇も荒磯に打つて寄せたる大波瀾、あはや圧倒せられんす(と脱カ)勢に、又も一二丁を走せ退く、顧みて左右を見れは、此時は味方の残兵早や逃げ散りて、曩に叱咤せし隊長たに在らす、残れるものは僅に七八名、此時敵は早や我左右を取囲み余さしとこそ攻め立つれ、今は全く囲中に陥りて更に遁るへくもあらねとも、斯くて死を待たむよりはと一度に囲を衝いて疾奔す、前に迫まりし敵兵が銃を攢めて発射する雨より繁き弾丸に、先に走れる一人は真倒に射倒さる、あはやと驚き身を翻し、今踏み出す一刹那右脚に当る一弾丸予亦真倒にそ倒れける、起上らんとも掻けとも全身痿ゑて起つことも能はず、両手片脚にて腹這いつゝ躄りゆき、僅かの木陰に身を隠くし、猶も手行して十二三間は行き得しかども、今は身体全く痿ゑ、目昏く心遠く、其儘其処に俯伏して天晴れ死期を待居ける、此時只一念思親の誠情起る、厳父や櫻島に在り慈母や家郷に在り幼弟孝を勉めよと、背後に近く「斬るな〳〵」と連呼する人声を聞く、頭を擡けて一瞥すれは先なるは抜刀を振翳して馳せ、後なるもの叫んて馳す、予に馳せ附くや、予の刀を奪い携帯品を執る、曰、「汝降る乎」、敵兵益多く馳せ集りしと覚しく、只口々に何事か相語り甚喧囂たり、又曰、「汝降る乎」と、予始めて面を上けて曰、唯々助け得可くんば希くは助けられよと、其人曰、甚善し、而して徐かに語を続いて曰、汝は何許の人、氏名は、年齢はと、皆之に答ふ、其人予の甚た昏憊せるを見て、即ち其懐中を捜りて宝丹を取り之を与へらる、且曰、痛甚しきか、傷は大腿なり、蓋し又軽傷か、気を強持せよと、乃ち予の腰部を索くると覚へしが、目

を開けば予の帯を解き半は之を切り取りて以て傷所を包裹せらるゝなり、且曰、傷や実に浅し、其れ気を強くせよ、直に軍艦に収容し長崎本病院に送りて厚く治療を加へしめんと、慰諭せらる、時恰も盛夏、而して又昼二時頃にして炎熱焼くか如く甚堪へ難き折りなりければ、乃ち両三人して予を抱へて松の小蔭に移し、下に麦稈を敷き其上に臥せしめらる、此時仰いて其人を見れば、隊長と覚しく鬚髯長く延ひて状貌雄偉、長剣を帯ひ赤き小旗を持ち、群集の兵員を指揮し居られたり、而して其兵は悉く警視兵にして皆太刀を帯ひてありけり、暫くして曰、憾くは今人夫なし軍艦に送ること能はす、後必送らしむ、我等今は追撃の途に在り永く此に止るへからす、又一兵を止めて汝を護らしめんも法に於て能はさる所我等今皆去る、只心を強くして人夫の来るを待てと、且つ生餅二個を出して与へて曰、之を噛むて以て気を持せよと、予が携へ居たる食箪に之を盛り枕頭に備へ置きて去らる、少時にして枕頭又人語あり、人夫や来ると目を挙けて之を見れば、鎮台兵三人汗に喘きつゝ此に立てり曰、私学校徒なるか、官兵に抵抗する科は祖面今は起つことも能はさらん、永く苦痛を忍はんよりは我等首を刎ねて以て其苦痛を免れしめんかと、其毒言聞くに堪へさるものあり、予乃ち曰、先に官兵の為に厚く介抱を得て人夫の来るを待つのみ、然るを殺すを得へくんば即ち殺せと、暫時にして彼等亦去る、

今は砲声も止み、遠く喇叭の声を聞くのみ、只昏々として夢裡に在るが如し、忽ち気昂り魂返り目を開くことあるも又気漸く遠く、只断続たる喇叭の声を夢裡に聞きて味方の敗北を思ふのみ、時はいつしか暮近く、又も人声の近つくを聞く、而して何物をか尋ぬる様子に覚へしが、遂に予が倒れ居るを見出して進み寄り事を問ふ、予即ち答ふるに実を以てす、且つ問ふて曰、氏等は何処の人にて何の為に此処には来にけると、彼人曰、余輩は当所の居民なり、先の戦争に飼馬を逸せるに依り之を捜すものなりと、予乃ち請て曰、人夫未た来らす日将に暮んとす、斯くして当てなきものを待たんは愚かの至りなり、寧ろ早く味方に帰せんと思ふ、希くは味方の病院に送り玉へかし、斯る重傷のことなれば固より死は覚悟しつれとも出来得へくんば医療に預り見む、倖に余喘を保ち得ば豈此恩を忘却せんやと、二人諾して曰、此下にも亦一人の負傷者の倒れ居るあり、我等救助すへきを誓ふ、子

も亦共に揚けむ、必す憂ること勿れ、但今は敵兵猶附近に屯集するあれば危かりなん、夜に入らば暗に紛れて好きに謀ろうへしと、云て立去る、

夜入りてまた久しからさるに、彼人二人一簞の粟飯と一瓶の水とに少許の香の物とをさへ添へて携来りて之を与へらる、其悃情実に謝するに辞なし、別に戸板を持来り予を之に乗せ舁いて附近の民家に容る、又一人を舁き来りて予と同所に置き枕頭に「かんてら」を掲く、予等渇甚しければ庭前に在る所の水甕を持来りて二人の間に置かしむ、此家は農舎と覚しく畳なく、戸障子なく、床に藁を布きて之に臥す、彼人等曰、戦未た止まされば病院の在る処を詳にせす、明日之を聞き合せ来りて之に送るへし、気を強くして一夜を明かされよと、親切に労はりてこそ帰りけれ、

今迄は左迄激しく痛を覚へさりしが、次第に夜の更るに従つて苦痛益加はり、少しも身を動かすこと能はす、唯両人喚苦相答へ、我一酌水を飲めば、彼亦一酌し、殆と柄杓の音の断ゆる間なく、以て夜を徹す、明る頃は一甕の水悉く飲尽くして余滴なきに至る、

◎此日、熊田に在るの諸将相議して惣軍を合して重岡を攻撃す、戦最激烈、我兵遂に之を逐ふ、我兵死傷者百五十人に及ふ、総軍野村亦傷を受く、此戦増田中隊長（中津隊）の兵最も奮戦、

廿三日、夜明けて外面より入来る人あり、声を掛けて昨日の人なるかと問へば甚不興の体にて、我は当家の主人なりといふ、二人相請て曰、見らるゝ通九死一生の重傷の者、希くば我病院に送り玉へよと、彼聞かさる為ね（ま）して只庭前を徘徊するのみ、且つ懇請するも更に省るの色なし、嗟同し人間の斯く迄困苦を訴れとも、敢て心に経せさるか如きは如何なる人かと、胸も烈るばかりに覚へける、暫くする中又門外より入来る人あり、乃ち見れば一人の兵勇銃を提け刀を帯したり、能く見れば右腕に白条を認む、庭前の主人に言て曰、飲水はなきやと、予内より呼て曰、士は私学校兵と見へたり、何番の隊士なるやと、其人曰、行進第一の右小隊なり、君も亦味方の人にあらすやと、予行進第一の声を聞き欣喜満身、今や死なんず苦情も打忘れ、急に身を起して曰、予亦行進の第一左小隊の者なりと、其人忽ち門外に走る、早くも一隊の士叢々として入来り慰諭交々せらる、且つ曰、知らるゝ如く昨日は敵に勝を得られたれば、今日は其辱を雪

かんと、彼の怠るに乗して攻撃し、戦線全く元に復し、今や我右小隊は猶残兵捜索の途中なりと、斯くする中谷山の人海老原喜右衛門氏人夫を連れ来り轎を作らしめ、其伍松原十郎氏を附して予等二人を花野に在る我病院に護送せらる、乃ち医の治療に預り、民舎に入る、斯くて始めて再生の心地ぞせられける、

昨日の戦に、中隊長松岡清助丸に倒れ、分隊長谷山新次郎傷を被る、

廿四日、苦痛前夜と同し、呻吟通宵、

廿五日、鹿兒島の全軍守を失ひ、惣軍引揚けとなりて担夫来る、即ち轎に入り揺々吉田に至る、敵已に蒲生に迫る、早く帖佐に行けと、帖佐に至れば又曰、加治木に行けと云ふ、然も輿夫なし、國分に行くもの帰来らば之を送らせんと待てとも〳〵一人も来らす、次々に運び来れる患者は轎にのりたる儘庭前に据へ並へられ、各声を限りに支配人に迫まれとも更に其甲斐なく、足歩することを得るものは自ら門前に待ち、今帰来る処の人夫を取りて己を担はしむ、残れるは重傷者四五人となる、予は漸く五時頃に至りて人夫を得て加治木に至る、此処も同しく大混雑にて其儘町家の軒下に据えられしのみ、最上鹿之助氏肩に負傷し亦担はれて来れるに会す、共に人夫を得す、日既に暮れんとする頃に及んて細雨霏々として降り来る、依て遂に此に宿することとして最上氏と共に送られて旅舎に入る、此夜より痛み大に減し気稍快なり、

廿六日、未明二人相前後担はれて街頭に出つれば敵の軍艦早や前湾に来り町家を目掛けて発砲す、街衢騒然たり、此日大雨、濱(隼人町)の市に至る、雨益甚し、乃ち轎上に藁筵を被ふて行く、國分を経清水(国分市)に至り、第三十三号の病院に入る、途中最上氏と相失す、夕方鹿兒島の人岩切某・中村某外一人入院同宿す、

三十日、病院引揚け、予は他の三人に先立ちて発す、敷根(国分市)に至り戸長役場に在るとき日高藤八氏に遭ふ、氏は納官(中種子町)の人なり、共に其奇遇を喜ひ且つ相慰む、武岡の戦に敵と接戦不幸右掌を斬割られたるものとて、右腕に附木を当て繃帯を施し首に吊る、予は足を貫通せられて起つことを得す、予は乃ち手となりて彼が衣帯を扶け、彼は余の足となりて起居を便にす、恰も二人を合して一人の用を弁するもの、是れより両人相離れす、

福山に中食、丁を替へて財部に至る、時既に薄暮猶輿丁を替へて都城に向ふ、午後九時達することを得て持永

直右衛門方に宿す、鹿兒島の人有馬郷八氏亦同宿たり、

七月二日、輿丁来る曰、敵志布志に上陸す、速に此処を去るへしとのことなりといふ、匆々轎に入り三俣(三股町)を経山之口に至り士族某氏に宿す、主婦泣て語つて曰、良人亦子等と同しく出戦す、未た生死を知らす、老父母あり、日夜心を労すと、

余の傷所幸に化膿せす、疼痛早く去り、経過頗る良好、気分大に宜し、

五日、又病院引揚け、午前九時山之口発學の木(田野町)に一泊す、

六日、學の木発中村(宮崎市)に一泊、

七日、中村発穆佐の宮水流に移る、内野長太郎方に宿す、疼痛全く去り心気頗る爽快、高歌朗吟、両人相和して互に悶を遣る、快人の聞こえ遂に附近に洽し、

十一日、肥後一平氏手に負傷し役を免せられて帰宅するとて通り過きられたり、

毎日療養、洗滌日に二回、鶏卵一日に三個、乃ち一食に一個とす、看護人一人を附せらる、肥後の女にして年二十五六、医師は鹿兒島の足立梅溪、大腿骨折の為め、本日附木を添へ繃帯を施して全脚を緊縛す、

十九日、下村喜之助氏通過せらるゝを見て呼んて入る、同人曰、先に軍用ありて帰郷し居たりしを、昨日飫肥油(日南市)津に着船、今本隊に還る所と、

二十日、負傷以後同伍の安否をも聞かされば朝夕心を傷め居たりしに、今日永吉の人某軽傷此に来る、話次予が種子島なることを語りしに其人云へる様、同しく種子島の人にて美坐某と云ひ丈甚高き人、行進第一中隊に居られしが、國分新川の戦に胸部に負傷せられしが随分の重傷とやら、今山之口にあり治療中なりと、嗚呼(嗚)予が兄や父やと頼み思ひし其人は、斯く重傷を受けられしかな、予も此有様にて如何ともする能はさるなり、君は予か負傷を聞いて痛く傷心し居られたりと、余の傷は今快を覚ゆ、余は君の負傷を聞きて更に痛心に堪へさるなり、君は今如何の状そや、問はんも語らんも山川相隔つ、徒に天を仰いて嘆息するの外そなき、

◎熊田(北川町)の軍又敵を走らす、銃三十・弾丸数千個を得、

廿三日、鹿兒島口の軍連戦連敗、追々此処杯(秋)にも隊を引揚け来る模様なりとの風説を聞く、

廿八日、我兵遂に敗れ敵追躡已に近きに迫るとて病院又引揚けとなり、患者を江平に移す、

廿九日、日高を以て人夫支配所に就き輿夫を請へとも一人の在るものなし、然るに敵は既に後ろに迫るとて敗兵続々として来る、十時頃にもなりぬれば、兵隊遂に街衢に充満したり、衆皆予を見て早く避くへし危険なるよと云ふ、別に避るの途あらば余は好んて此処には居らさるものを、暫くする中亭主も居らすなり、日高は未た帰らす、余りに事の頼み少きにそ、只椽(縁)先に出て追々逃け来る人を見居たりしに河内菊千代氏を群兵の中に認む、予覚へす声を掛くれば振り顧みて驚き、別に人を呼ふ、則肥後俊平氏なり（俊平後時宏と改名）、倶に共に馳せ来り後や先やの問答も暫の後に云へる様、輿夫は如何にと、今日高を以て請求中なるを答ふれば、肥後氏曰、余等亦行きて催促せん危しと、相携へて去らる、既にして帰り報して曰、日高も彼処に在り、共に迫れとも今は一人も居ず、人夫来りなば一番に揚くへしとのことなり、左思ひ待たるゝの外なし、余等は隊属なれば心残れと子を置きて先に行かさるへからすとて、別を告けて通過せらる、少時にして日高は輿夫二人を携て帰来る、匆々轎に入り、舁れて渡津に至れば病院の薬舟今岸を離れんとする時なり、呼んて医に請ふて之に乗り川を下る、下ること一里許倉岡(宮崎市)に着く、直に支配所に至り人夫を請ふ、無し曰、明日早朝必す送るへし、今日は此処に一宿せられよと、乃ち宿に就く、

三十日、日高を遣して人夫を促さしむ、未た来らす、遠く砲声を聞く、道路喧走呼んて曰、早や宮水流に火を懸けたりと、担端望見すれば黒煙正に天を衝く、爆音砲声と相混して間断なし、午後二時頃に至り漸く人夫二人を伴ふて来る、直に轎に乗り渡口に至りしに患者は舟三艘に充満し将に纜を解かむとするのときなりければ、速に舟に入り流を下ること三里にして舟を着け、此処に上陸し、江平を差して担はれ行く、達せしときは已に薄暮なりしか敵宮崎に攻め来れりとて道路喧噪、往来混乱、斯る有様なれば人夫動もすれば患者を棄てゝ逃走せんとするの色見へければ、軽傷徒歩の者刀を抜いて轎の前后を囲み遁けなば斬つて捨てんず勢にて急かせ行く、廣瀬(佐土原町)よりは早や宮崎の急を救はんとて、人夫数十名を遣すの途に会す、乃ち人夫を交代せしめて道を急く、午后八時頃廣瀬に至る、途に医師足立氏に遭ふ曰、病院は高鍋に在り、明日彼に行く可しと、大炊田(佐土原町)に至り民家に一泊す、

◎我本営宮崎支庁を改めて軍務所となし、米穀の輸出を

禁し、又楮幣を新造し之を管内に頒ち自ら軍用を資く、其高凡十万円、又大に鋳丸の鉛・銅・錫等を募求し、民間製酎(酒)の錫器、神社の銅瓦皆之を収む、

三十一日、丁を以て佐土原に至りしに、高城口敗れたりとて、兵士患者路に塞り、支配等は何れへか已に逃避して在らず、依て大炊田よりの人夫を頼み、高鍋迄行きし処足立氏同組の一医に会す曰、此処より一里海浜に当る所に蚊口港(高鍋町)あり、此処に行くへしと、乃ち蚊口迄送られゆく、

八月一日、蚊口に在り、上成傳吉氏亦負傷此に来る、面談数時、猶曰、半銭の資なく困実に極ると、即ち金壱円を分つ、

二日、松崎貞房氏亦足に負傷し、全隊の士南方の桑原嘉太郎氏は首に負傷して共に通り掛からる、皆徒歩、

三日、伝令あり、敵既に廣瀬に迫る、重傷患者は明日送らん軽傷者は自ら去るへしと、乃ち日高は上成氏と共に相別れて徒歩して去る、嗟予が足と頼みつる日高は此に始めて別れたり、予は独残されて輿夫の来るを待つ、夜三更砲声忽然として近辺に聞ゆ、急に看護人を喚起し医務所に遣り人夫を促せとも埒明かす、亭主を呼へば是も早や何れか逃けたりと覚へて答ふる者更になし、夜中如何ともすること能はす、遂に夜はほの〳〵と明渡る、

四日、敗兵早や街路を通過する者続々として絶えす、砲声は次第〳〵に近く聞こゆ、今は鮮血淋漓たる負傷者を肩に掛けて過るもあり、少時にして走兵も亦次第に少くなりて砲声は屋後に迫り、銃丸二三声を曳て空を飛ふを聞く、今は只向隣に三四名の医員ありて狼狽するのみ、予思ふ最早此に及んては一身を遁るゝに所なし、是迄我を輔け来りし日高にさへ別れたるは是天の我を棄てたるなり、我運命全く尽きたるか、今は何をか思ふへき、只気遣はしきは敵の来りて我に如何の死を与うるや、苦痛に死せんか侮辱に死せんか、兎角其時の死様こそと、戸口に躙り出て待居たりしに、向隣の一医員刀を抜持ち、逃けなば斬らんず勢にて一馬夫を押廻はして来り、医の薬具を駄せしめんとす、此時医員は悉皆駄し尽して今は馬夫も不用となれる有様にて、転して予に来り云へる様、如何なりともして之に乗るへし、共に此を遁れんと、予狂喜之に乗んとすれとも足立たす、即ち椽柱に倚り馬夫に扶けられ、附木も附けたる儘漸くにして乗り得たり、鞍を攫んて医と共に飛丸の前を疾駆し街道に沿うてそ避

けたりける、敵は早や水田の畦畔を伝ふて散隊し、銃を発すること雨の如くなれとも、天未た予を捨てさる乎、倖ひにも無事に逃け延びける、都野(都農町)に至り見れば此処も同しく唯立ちはに立つて騒擾し、兵隊・患者道路に塡塞し、上を下への大混乱、一人の周旋支配もあらされば猶馬に乗りなから道を儘にと辿りゆく、混雑の中とて人にせかれて路傍を通行するとき杯(杯)、足の附木を地物に衝き当てゝ其痛きこと堪へかたし、美々津(日向市)に至れば此処も前と同しく雑沓して夫割支配所は藻脱けのから、事問ふ人さへ居らされば、嘗ては何処とも白浪の渦まく川の津に至り、馬を下りて渡船に入る、馬と共に乗船することを得されば馬夫には後便に渡り来る様命し置きて川をそ渡りける、動くことさへ出来されば、磧原に下されて其儘に馬夫の渡来るを待つ、船は幾往復もなして已に夕陽に迫れとも渡来らさるは如何にやと、看護人を叱り懲らして迎ひに遣る、殊勝にも逃避せすして船を待居たりしを見出し、さてこそ共に渡り来つれ、又直に馬に打乗りて晩食する所もなく、三人其儘に夜を冒し人に混して辿り行く、風月は元無情なるも輝々として明光を放ち、困難頻死の人をも照して、落行くには却つて無上の便利を与へける、打ち眺むれば、月はいつしか西に傾きて二時頃とも覚しき頃、或部落へと到着す、馬夫に命して宿を求めしめ一民家にそ泊りける、馬夫は此処より別れて元と来し路を引返し家路に就く、

五日、夜明にければ、亭主を頼むて人夫を雇はしめんと呼へとも早や何れへか逃去りて影たに見へさりけり、然るを爰に倖ひ熊木隊の病院方の宿り合せてありければ、其人等に一人夫を借りて道傍の掛け茶屋に負はれ行き、若しか通過する人夫もあらば之を傭ふて共に担はしめんと見て居たりしに、幸ひ一人の通行するありければ、之を頼み先の人夫と二人にて轎を作らしめて居たりしに、日高は後の宿に泊り居しと見へ通り掛りたり、少時談話の中已に轎も出来たれば、子細に及はす徒行なればとて別れゆく、予は即ち轎に打乗り新町(日南市)へと急かしてゆく、已に到り郡代所に行き見れば、此処の人も同しく逃けたりと見へ人一人たもなし、又二夫を懇諭し且賃金を増額して此労苦に酬ゆへきを約して漸く延岡迄行かんことを諾せしめ、又轎に揺られて延岡に至る、午後四時頃到着したりしに相も変らぬ混雑にて、已に日の暮れんとするに及へとも宿所定らす、斯くする中鮫島順一氏に遭ふ、

美坐氏や遂に逝かれしと、嗚呼(嗚)予は遂に君に酬ひ得さりしなり、兎角すれとも遂に此処には宿所なしとのことにて僅に近在の岡留村(延岡市)に送くられゆき、郡代所に請うて、都之原門中山秀夫氏宅に宿することを得たり、新町より来る途中看護人とも遂に混雑の中に見失ひ、今は茫々只独弔ふ者は我身の影の外そなき、

秀夫氏の父なる人は雲水の徒にして、山門に住寺しありけるが、時に訪ひ来られ、諧謔を談し滑稽を話し、常に我病苦の憂懐を慰めらる、或時は日向の国の地形を指を以て席上に図し、是より此迄は今味方の線内なり、彼処の戦線は如此杯(杯)、逐一に戦況を説き聞かせらる、今正に死生の境に出入する此身には、実に頼母しき人にこそ、

八日、雷撃隊の中小分隊長の三名及其看護人共に六人来りて同宿となる、

◎諸道の我軍悉く敗散、此地亦将に弾雨の巷とならんとするの模様なりと、

十二日、耳を欹てゝ遙に砲声を聞く、中山氏に就て尋ぬれば曰、敗衂の不運は何時も味方を去らすして毎日の戦ひ徒に兵を殞し地を蹙めらるゝのみ、遅くも三日を出すして敗兵此処にも麕至せんと、

十三日、砲声昨日よりも近く、漸次進み入りて今は全く近辺に聞こゆ、中山氏は未明の頃より外出し居られしが、頓て馳せ帰り云はるゝ様、聞くが如く、官軍今にも攻め来らん、早く此処を立ち退き難を避けられよ、人夫を携へ来らん乎、市中在泊の患者は既に是より一里を距る川島(延岡市)に立退き居るの最中なり、遅くせば一人の人夫も得ること能はさるへしと、雷撃隊長深江幸蔵曰、敵此処に迫らばとて何そ自ら騒き立の理あらんや、其れ病院掛なるものあり、若し子の云はるゝ如くんば、彼方より人夫を送るならん其時退くも蓋晩からず、よしや又此処を立退くも僅に一里ならば敵今日此に攻来らば明日又彼処に迫来らん、此処に居は今日死し、彼に行かば明日死せん、死は一にして到底免ることを得さるへし、我等寧ろ此処に死せん、徒に死に向て身を労し未練を残すことを欲せず、薩摩男子にこそと、予亦熟々考ふるに、此に及んては行先きも僅に一里と聞く、最早一身を遁るゝ所を知らす、衆皆死を待つ予一人免るへきの理もあらす、今そ是れ死を待つの時なるかと、深江等の説に賛し居たり、秀夫氏予か傍に来り耳に口して曰、子憂ることなかれ秀夫ありと、已にして道路騒かしく砲声益近きに迫る、深江

如何思ひけん曰、我郡代所に行き模様を見んとて出行きしか少時にして人夫を以て馳せ帰り、嗟将に遅くれなんとつぶやきなから急に外二人を促し立て、無情にも予一人を残し置きて出行きたり、予や只一人残されて秀夫氏も共に茫然たりしが、斯くてあるへきにあらされば、秀夫氏は人夫を連れ来らんと云ひつゝ門外に馳せ去らる、少時にして帰り来り云つて曰、幸に人夫頭に遭ふて命し置きたりとて自からは起つて脚半を宛て草鞋を穿ちなから云つて曰、兼ねて云ひし如く、我父は山寺に在り、今にも敵来ると聞かは子を負ふて彼処に行き、父の徒弟に偽り髪を剃り病気と云つて床に臥せしめ、以て危きを救はんと、且語り且結束し、余にも亦成るへく身を軽くして変に処すへく促し立つ、秀夫氏は刀を帯ひて膝を接し情報を待居たり、晩七時の頃に及んて漸く人夫二名駈け来にければ、それとて轎に打ち乗りてそ出行きける、家を出んとするとき秀夫氏は固く人夫に嘱して曰、若し先方にて夫割宿割等も在らす且つ確かなる宿舎もなき様ならば、再ひ担いて帰るへし、必ず路傍に捨置くへからす、謝礼は請に任せて与ふへし、夢忘るへからすと、又余を顧みて曰、今人夫に云ひし通先方の不都合も測られされば、其時は再来るへしと、余欷歔云ふ能はす心に其厚情を謝しつゝ考ふるに、先方も必定艱頓苦困の惨所のみ、寧ろ此人の許に於てせば仮令死すとも恨みなしと思ふ心は切なれとも、一寸にても遁るゝ道あらば遁れんとの情念に制せられ、担がるゝ儘に出行きけり、粟の港とか云へる処に着く、とある辻堂に数多の人の宿し居ければ、余も亦此処に入れられたり、

十四日、未明より砲声激く相聞へしが愈近きに迫まりしと覚へ飛丸時として空を掠め去る、同宿の人は皆軽傷者なりければ匆々立去りて、予は又一人となれり、僅に附近を馳せ廻る人に請うて人夫を傭はんとすれとも、此人等は一向家具什器を運んて、更に予か請を容れす、後は一人の影たに見へすなりければ、今は是迄なりと思定めつれとも、坐して死を待たんも口惜しと、爰に附木に堅縛したる足を解きて、附木を捨て、其繃帯を以て膝を約し、之を幾重にも折りて其両端を結ひ、以て頸に懸け傍らに手頃の竹杖の遺しありしを幸に、之を杖いて柱に倚りて起立し而して後柱を放し、杖のみに倚りて歩せんと試みしに、負傷后初めての起立にて、全く左足にも力なく、右足は只ぶらぶらとして定まらす、体は重く腰は

弱く筋緩み骨戦ひ動もすれば転倒せんとするを一歩を運んて物に倚り、二歩を致して壁に就き、辛うして堂を下り門外迄出てたるに、人一人通り掛りしを以て、事情を陳へて救を乞ひしに、彼人即ち負ふて夫割の所迄送り呉れたり、乃ち難を告け人夫を請へとも皆患者を運ひ行きて一人の在るものなし、如何ともする能はすと云ふ、予怒って曰、人夫なくんば汝自から背負うてなりとも此処を避くへし、患者を遺すの罪軽からさらんと、理以て之を攻め、情以て哀を乞ふも更に処置を取るの状なきこそ遺憾なれ、而して彼等は一向家具を収護するに焦慮し居たるが、如何思ひけん少時ありて云へる様、子の如く運ひ残されたる患者尚ほ外に三四名あり、如何ともすることを得すして屋後の小山に隠し置けり、子亦此処に隠れ一時の難を避けらるへし、若し官軍攻来らさる中に人夫の帰来るあらば直に送るへし、若又已にも官軍攻来り敵中となりもせば、僕子等の為に食を給して乏しからしめず、而して時機を窺い良法を以て子等の安全を謀るへし、決して悪くはせさるそかし、見らるゝ如く今は一人の人夫もなし事実に止むを得さるなりと、予曰、果して云ふが如くば亦可なり、必す敵の暴人に告けて以て恥辱に死せしむ可らずと、其人乃ち背に負うて屋後の小山に入る、林樹叢生の奥に小竹の繁茂して少し窪りたる壕の如き処ありけるが、其処に板にて屋根様に構造し其下に一人を容れてあり、余も亦其傍にそ入れられける、已にして又二人入り来る、先の一人は脚を貫通せられ、後の二人は胸部に銃創を受け、皆重傷立つこと能はさる者なり、六時頃とも覚しき頃、巷街甚騒かしく大勢の人の入込みたる模様なり、夜入りて彼人握飯を持ちて入来る、密かに曰、子等を隠せし後敵直に入来りて今は全く敵中となる、食を運はんも昼間は甚危険なるを以て夜に及んて来り給せん、乞ふ諒せられよ、唯此上は息を殺して伏匿せよ、好機を以て救出すべしと、

◎諸口の我兵或は散し或は降り、残る者猶一万人と雖も軍気大に沮喪し、西郷を擁して永井村（長井村、北川町）に集る、時に熊田の兵糧絶え丸尽く、退いて永井村に合す、線内僅に方里、西郷慨然衆に云て曰、諸隊士尽力の故を以て已に半歳を支ふ、今や勝敗目前に在り、只奮発進戦、悉く斃れ恥を後世に貽すことなかれと、悔恨惜かす、桐野は則曰、降らんと欲する者は降れ、死せんと欲する者は死せよ、只其意の欲する処の儘と、於是乎病院其

他将卒降る者数千人、

十五日、敵永井村（長井村、北川町）を砲撃して響天地を撼かす、而して敵の休兵我等隠るゝところの山の左右に来りて戦況を見て終日往来をなす、樹間より人影所々に透見せらる、固より小なる屋根山なれば人の隠れ居るとは気付かさるを幸に、息を殺し身を縮めてそ日を暮す、既に夜に入れとも彼の人食を持来らず、

十六日、夜に及んで彼の人食を持来りて曰、昨夜は官軍の用役甚急忙にして遂に食を持来るの暇なかりき、嘸かし（根）梱腹を抱へられしならんと、又曰、若し不幸にして敵に見出さるゝこともあらば早く降服帰順の旨を陳すへし、必す抗言すへからす、直に刃に血ぬられん、身分を問はるれば平民にして夫卒なりしと答ふへし、士族と云はば罪重し、従軍の事由を問はるれば、脅従の新兵と答へよ、既に降伏したる人両三人ありしが、直に食を給せられ叮嚀なる取扱にて医をして傷をも療せしめ、平原なる病院に護送せられたるがありたりと、

◎此日大に小梓峠（延岡市北端）に決戦す、官兵雲集霧封すれとも我兵決死の勢焔甚当り難く、官兵殆と苦戦、本道の我兵遂に敗れたるを以て、皆恨を呑むて退軍す、

十七日、朝ふと目を覚ませば誰人か入来ると覚しく「パリ〳〵」と枯柴を踏む人音のしければ、スワ敵の入来れり、今日こそ敵に戮せらるゝの日にてありけるよと、思ふ間もなく枕辺近く入来りしが、我等を見て驚き立ち止まり、声をかけて「賊なるか」と云ひしに我中の一人直に応して何とそ助け玉はれかしと云ふ、声後に聞きなして出行きけるが、数多の兵卒に云ひ触らしたると見へ、雑沓山中に入来りて周辺を取囲む、打ち見る処兵士及人夫の者多きが如し、依て直に降伏帰順の旨を陳ぶ、口々に詈り云ふ様、今其重体に伏し我等が為に発見せられ、止を得すして降服を云ふも真の降伏にあらず、哀を乞ふとも及ひ難し、早く異域に旅するの覚悟をなすへし、幸此処に汝等持する処の刀あり切れ味宜からん、首を延へて之を受くへしと、数人の雑人共より詈らるゝこそ悔しけれ、心ばかりは早やれとも足腰立たぬ此容体、何と仕様もあらされば、無念の涙を推し切るのみ、頭を擡けて見廻せば、士官と覚しきが一人木の根に踞して居たりしが、何か兵士に言付けて出行きける、衆中に、居なから降を乞ふ法なし、真に降を欲せば自ら行きて之を乞へと詈るものあり、脚を貫通せられたる一人即ち竹杖にすが

り躄りて山を出つ、体力遂に耐へすして途中より帰る、心情実に愍むへし、其後一人の兵士予が最年少者なるが故か枕辺近く進み寄り云へる様、降伏を陳せし上は決して憂ふること勿れ、既に彼士官の聞きゆかれたれば、直に本営に届出てられ人夫を以て病院に送らるへし安心せよ、食事は如何にせしやと、乃ち答ふるに前日よりの実を以てす、又問て曰、生郷は何れ、年齢は何程、定めて父母も生存しあらん、父は出兵せさりしか、兄弟もあるか、族籍又は創の軽重を問ひ、温言以て慰諭し且つ曰、子の父母又は兄弟は子の負傷を聞き、日夜之を憂ひてあるならん、且つ今は所在も知るに便なく、一層憂惧し居らるゝならんと、味方にも猶ありがたき親切には只感謝の外そなき、少時にして顆飯と羹汁を鍋の儘持来りて給与せらる、続て人夫数人畚を荷ふて入来り、余等を之に乗せて舁て本営に至り、庭上にかき据へなから士官筆紙を携へ来り、隊号及隊長の氏名、次に各自の氏名年令族籍を登記し終り、兵卒一名を附け平原病院に護送せられたり、今は昨日と事変り何の憂惧もなけれとも、楚囚の身となれる恥しさ、四野の風物何となく悲哀を感し頭をも得上けすして通過する、

病院に達せるに、先に降伏せしもの四名あり、是等の人と一所に容れらる、医来りて創口を洗滌治療せらる、

◎十六日桐野諸将を集めて方略を議す、諸説紛々、野村連りに高森進軍を主張す、議遂に可決、時方に黄昏、桐野、池上・河野二中隊を以て先鋒(鋒)となり、一面を敗り、然して後全軍を進めんとす、山路を行くこと殆と一里、攢峰峻嶺連亙綿延、万点の篝火数里の山頂殆と寸隙なし、桐野其遂に全軍を脱すること能はさるを思ひ、遂に軍を退く、十七日、西郷又諸将を集めて方略を議す、遂に鹿兒島進軍に決す、桐野二中隊を以て先鋒たり、西郷之に次て発す、正に是数千の大軍守を撤し四方より麕至す、僅に方里の線内人を以て充つ、恰も是数重網裡の魚、漸く浅瀬に追ひ蹙められ、今や竿矛を下されんとするとき、一条の網目を破り得て、其活刺たるもの方に脱出し去らんとするか如し、斯くて桐野は土人を雇うて嚮導となし、路を可愛嶽の山間に取り、嶮巖を攀ち行くこと殆と三里、天明其頂上に達す、従ふもの僅に十人、乃ち抜刀、関島・川久保等は路を右に転し曾木に向つて進む、兵士相失し従う者僅に二十余人、遂に敵中に陥り、猶相失うて二人或は三人

各山間に離散す、其他の後軍亦三里一線の苔逕、加之夜乃ち暗黒、相失し相離れ、驚擾潰乱、困頓躓蹶、其能く囲を脱して本軍と合する者僅に五百人、我兵本と糧を帯はす、中途餒へて斃るゝ者亦甚多し、

十八日、平原より細島(日向市)に護送せらる、曩に山中に匿れし中の一人胸部に負傷せし者、此夜空しく死亡、

十九日、正午とも覚しき頃又舁き持たれて細島の港に至る、轎内我氏名を呼ふ者あり、驚き顧れば西村鳳之助氏にて、子の創は予よりも一層重きと見へて只打ち臥せしのみなり、共に奇遇を喜ひ相慰めつゝ頓て扁舟に乗せらる、先に舟中に在る我降伏負傷兵凡二十人、直に舟を発す、午後八時頃美々津川口に着く、中食・晩食終に給与せられす、此夜猶舟に乗せられし儘なれば深更に及んて川嵐病衣を吹き満肌皆粟す、

◎此日、脱兵税(祝)子川に至る、悉く守兵を撃破し遂に鹿川に迫る、

二十日、十時舟より下され旧県庁(宮崎市)に入れらる、此時門前にて河内英藏・上妻休藏・大山力之助の諸氏降兵数十人と一列にて今何地にか出発せんとするに遭ふ、此所や、板敷の上に一片の莚を布き、其上に臥せしめらる、医来らず、食給せられす、甚困苦せり、

◎昨夜鹿川の官兵守を棄てゝ走る、此日脱兵進んて鹿川に入る、官兵猶民舎を火して新田に退く、我兵急追せす、蓋鹿兒島恢復の急務なるを以てなり、

廿一日、午後三時此処を舁き出され角町にて夜入る、休息の暇もなく夜を通して行く、日出る頃高鍋に着す、係官曰、此に官の病院あり、負傷者の降伏あるが為に設けらる、入院するや否やと、乃ち請て其指揮を受けて願書を出す、直に許可せられて病院に送らる、西村氏亦入院、

◎此日脱兵三田井に迫る、官兵支へす、狼狽遁逃、脱兵乃ち入りて其遺す処の糧餉弾薬等を収む、於是池上策を樹て大分進撃を声言し、檄を飛して沿道に殉示す、

◎廿二日軍を分ちて三となす、貴島・邊見前軍に将となり、中島・高城中軍に将たり、河野は後軍に将として三田井を発す、後軍将に発せんとするとき官兵来襲前路を遮る、後軍進むことを得ず事頗る危急縦に道を転して樵路を攀ち始めて二軍に達することを得たり、

◎廿三日、七ツ木(山)の本村に至る、官兵拒戦前軍勇奮之を敗る、廿四日神門の塁を攻む、固にして抜く能はず、

乃ち後軍を以て備へしめ、二軍は道を転して進む、二十五日銀鏡（しろみ、西都市）に達す、守兵を研り医及会計吏各一名を捕ふ、廿六日米良に達す、廿七日上槻木に達す、廿八日須木（須木村）の山路を越え小林に達す、官兵此処に拒守す、中軍進むて之を攻め戦大に利あり、廿九日飯野、吉松を経、三十日横川に達す、官兵塁を本道に築て拒守す、前軍は市坊より其右に出て、中軍は左翼の山上より共に之を攻む、戦未た決せす、貴島一隊を分ち背後を研らしむ、官兵退くこと数丁又陣を布く、我兵其遂に抜く能はさるを慮り、前軍に之を支へしめ、二軍は間道を攀ちて踊（牧園町）に達す、前軍尋て到る、又敵衝を避け路を横川・溝邊の中間に取り、夜蒲生に入る、三十一日西郷、野村に命して此地を守らしむ、野村其創痍未た癒ゑさるを以て固辞す、聴さす、三軍遂に鹿兒島に向つて発す、野村残兵を検するに、僅に十余人なり、野村寡兵の終に守る能はさるを思ひ、単騎西郷を追ふ、既に及はす空しく帰る、残兵皆此地を捨てゝ本軍に合せんことを議し、勢制すへからす、野村止を得すして遂に本軍に追及す、中軍既に吉田に至る、官兵繞つて其背後を断つ、後軍進むことを得す、前中二軍は進むて吉野に至る、官兵拒戦乃ち中軍を留めて塁を實方に築て之を守らしむ、九月一日前軍鹿兒島に達す、時已に十一時、此時官兵の鹿兒島に在るもの新撰旅団七百人・巡査三百人のみ、曩に築く所の塁壁皆既に撤し、又守戦の備なし、先是脱兵已に近つくの警報頻に至る、三十一日夜県令庁内の簿書を収めて各官員に令し、其家族と共に軍艦に避けしむるもの凡八百人、而して庁中に留まるもの県令・書記官以下僅に十九人のみ、我前鋒（鋒）の達するや肉祖高歌、剣を舞はして而して過く、官兵一大隊許、旧厩内に在ることを見て躊躇急に迫らす、官兵時に隊を休め銃を卸してありけるが、亦大に驚愕未た為す所あらす、我兵急に刀を揮ふて突入す、官兵甚狼狽屍を踏み傷を棄て潰ゆ、其遺棄する処の弾薬・諸品皆之を掠取す、進むて県庁に迫らんとす、県令以下皆急を軍艦に避く、我隊長堀與八郎等旧厩内の敵に死す、邊見十郎太は頭上を傷く、佐藤三次郎即ち三十余人を率い城山を攻撃す、守兵能く防く、乃ち又十余人を本軍に借り、繞りて敵背に出つ、守兵遂に潰走す、我兵入つて之を守る、

◎七月以来庁下漸く鎮定に帰し、市民安堵す、而して忽

然銃声耳を貫き弾丸壁を穿つに会す、婦女狼狽号哭、村落に向つて走るもの、海岸に出て舟を争ふもの、満街鼎沸、而して先に戦地より帰家するもの及無頼の賤民等、蹶起相応し刃を携へ、棍棒を持し、巡査兵卒は勿論官吏・医員・僧徒苟も県人にあらざるものは悉く敵となし、或は殺し、或は縛し、甚騒乱を極む、即ち中教院を本営と定む、諸郷の士此変を聞き私学校の大勝と思ひ、郷内の巡査を殺し、走せて之に加はる者甚多し、夜十時後軍到着す、

九月二日、裁判官出張病室内に臨み、而して従軍の事由を糺問せらる、皆明白に之に答ふ、書記一々之を簿冊に登録せらる、終つて而して之に拇印す、

◎此暁官兵下田街の塁隙より潜入し、繞つて我後を断つ、我實方の軍遂に敗走纔に城山の軍に合す、此夜貴島清白許人を以て官兵死守する所の米倉を攻む、官軍本と急迫の際在る所の米苞を畳むて胸壁となす、我兵抜刀肉薄之に迫る、官兵一時狼狽、我兵其二堡を破る、官兵乃ち力拒、我兵死するもの甚多し、貴島切歯扼腕躍つて余す所の一堡を越えんとす、忽ち敵弾に倒さる、中隊長増田宗太郎(末)等亦戦死し、残兵遂に纔に身を以て免る、

三日、頃日創口漸く癒へ足力亦漸く加はる、杖に倚りて僅に一二間を運歩することを得、此日一医員来りて書信を手交せらる曰、某宮崎に行きしに、此書恰も来着せり、子の兼ねて此処に在るを知るが故に齎し来ると、執つて之を見れば家大人よりの信書なり、驚喜緘を開く、書意に曰、当方時下恙なし安心せよ、聞く汝傷を負ふと、全く書信なければ生死詳かにすることを得す、甚心を労す、今や反正帰順の誠意を表し、病を療して宮崎病院に在ることを聞く、皇恩天と極りなく、此寛宥を蒙る、感戴欣喜次くに涕を以てす、近状果して如何にそや、近く起つこと能はすんば之を報せよ、暇を請うて来り迎へんと慈心紙上に溢る、感泣之を久うす、時に風説あり、延岡に蹙めらるゝの我兵遂に囲みを破つて鹿兒島に帰り、所在の官兵を研り、勢甚猖獗、県地之が為め大騒擾を来し、再び修羅の街巷と変し去り、漸く将に緒に就かんとせし秩序全く紊乱したりと、故に答書を送るの便を得す、其儘になし置きたり、

◎四日諸道の官軍陸続として皆鹿兒島に集り、重塁を築いて山を囲むこと三四匝、警固極めて厳なり、其兵凡

そ若干万人、八方より砲撃昼夜止ます、

五日、裁判言渡書を交付せらる、其書に曰、

鹿兒島県下種ヶ島西ノ表村
四百三十三番地士族祐平長男
河東祐五郎

其方儀賊徒ニ与シ官兵に抵抗スル科懲役
三年可申付処情状ヲ酌量シ其罪ヲ免ス

明治十年九月五日　九州臨時裁判所出張之印

（因に之れが用紙は鹿兒島裁判所宮崎支庁の十行罫紙なり）

九日、創口略癒合するを以て諸郷の人凡十一名と共に帰県を願出つ、

十日、退院帰県差許さる、然れとも未た歩行を為すことを得す、且つ旅費亦欠乏、今や帰らんとするも能はす、故に外三名の歩行し得さる者と共に再ひ出願して曰、創口僅に癒合せしのみにて、未た行歩し能はす、旅費亦無し、恐懼止むなしと雖も、官費にて送帰の儀を悃願すと、

十一日、願意聴許せられ、乃ち警察預りを以て送帰するの旨を達せられたり、外三名は即ち帖佐の鳥井岩助・鹿兒島荒田の今村長貞・大口の中島浪之丞諸氏なり、

十二日、左記之通愈退院差許さる、

本県種子島住士族
河東祐五郎

右ハ銃創ニテ八月廿二日入院候処創口大略
癒合ニ付本日退院差許候也

明治十年九月十二日
高鍋臨時病院出張所

警察より輿夫を遣されたるを以て乃ち西村氏に別を告けて出んとす、西村氏曰、旅金今ハ全く尽く、余や帰県未た期すへからす、子は官費を以て帰る旅金の用無かるへし、希くば少しく嚢中を分てと、乃ち金壱円を取つて呈して曰、余亦多く有せさるを如何にせん、乞ふ恕せられよと、乃ち相別れ病院を辞し、轎に入り、四人相前後して高鍋を発す、廣瀬に中食宮崎に着す、高鍋より護送の巡査警察に連行し署内に留置せらる、

十三日、猶留置せられ十四日に至るも送帰のなきを以て、其理由を尋ねしに、罪科未決なるか故に上司の指令を待つとのことなるを以て、即ち先の裁判言渡書を提示せし処、是れある上は別儀なしとて、直に宮崎戸長に引渡さる、該戸長即ち書を裁して村次を以て日夜滞りなく

送帰すへく沿道の役場に宛てたるを交付せられ、即時人を召(呼)んて宮崎を立たせらる、時に午後三時なり、源同村(源藤、宮崎市)にて夜入る、然るも昼夜兼行とのことなれば休息することなく、宿毎に人夫を代へて而して行く、學(田野町)の木に至りて天明、

十五日、又人夫を代へて発す、山之口にて中食、高城に至りて夜入る、猶人夫を次いて発す、都城にて天明、四人中の中馬氏は菱刈の人なりしを以て此処に別る、尚輿夫を次て中尾村に至る、予は以為く家大人鹿兒島に在り、然りと雖も乱未た止ます、此容体を以て鹿兒島に入るあらば、或は不測の変なきを保しかたし、志布志には我郷里よりの便船あるを聞く、此処に至りて便船を待たん、若又不幸船便なしせば、大泊(佐多町)より帰郷するの安全なるに若かずと、乃ち此に二人に別れ志布志に向つて送らる、梅田にて日暮る、末吉南之郷に至り戸長役場に宿す、

十七日、午前八時発松山に至る、人夫を得す、又役場に宿す、

十八日、松山発薄暮志布志に着く、役場よりの斡旋に依り旅館に宿す、船便を聞き合せたるに今はなしと云へるを以て大泊行きに決す、

十九日、志布志発大姶良(鹿屋市)に一泊す、

二十日、大姶良発小根占(根占町)に至る、途中巡査に誰何せらる、乃ち宮崎戸長の送り状を示す、尚ほ許さす、又高鍋病院の退院証を出す、尚ほ疑つて糺問多端、輿夫甚恐怖す、最後に裁判言渡書を見て護して本署に到り監置、協議数時の後即ち放遣せらる、

廿一日、小根占発伊佐敷(佐多町)に至り宿す、小根占の途中或門前を過くるとき、年四十許の一婦人に遭ふ、予が病軀垢面甚疲憊せるの状を見て、慰諭懇到、此日恰も旧暦八月十五日にて各家餅を搗き之を月兎に捧け良夜を賞するの日なりければ、即ち家に入り、白餅三個を持来りて之を与へらる、其好意今に胆に銘す、

廿二日、伊佐敷発扁舟小波瀬(佐多町)に至る、着後直に人夫を以て大泊に送らる、一漁家に泊して順風を待つ、

◎桐野利秋、籠城以来毎日両次諸塁を巡視し兵士を慰労す、風雨と雖も敢て怠らす、而して毫も憂慮の色なし、持する所の指旗に題して曰、「天地正大気凛烈貫日月」と此時に至り我兵或は死若くは傷、守日に疎なり、在る者亦官兵八方よりの砲撃に蕞尓たる山巓隠るゝに所なく、崖腹を穿ち穴居して以て丸を避く、至是諸将征

討の理由を官に質さんと議するもの甚多し、河野主一郎亦私に以為く、隆盛は非常の人材、余寧ろ恥を忍んて降伏し、隆盛の助命を哀訴せんと之を村田・池上等に謀る、皆可とす、廿二日、山野田市助(一輔)と共に出つ、官の哨兵之を田之浦本営に送る、川村参軍之に面し、刺客口供の誣妄を以て擅に兵を募り、凶器を弄するの罪明白なり、是征討の詔ある所以なりと弁諭懇切、二人頗る感悟するの色あり、廿三日、河野を留め山野田を返す、令して曰、尚言ふへきあらば今日午後五時を過くへからす、之を過きなば兵あるのみと、山野田帰報す、議未た決せす、期已に過きて報する所なし、官軍乃ち全軍攻撃の策を決す、

◎廿四日午前四時官兵諸軍を令して四面攻撃す、我兵倉皇拒戦支ふる能はす、斃るゝもの、走るもの、縛せらるゝもの、屠腹する者、白旗を揮ふて降を乞ふ者、崖穴に沓蹙して叢刺せらるゝ者、一山紊乱、隆盛自ら出てゝ堡塁に向はんとす、忽ち銃丸股を洞して起つ能はす、別府晋助(介)急に其頭を斬り氈に裹むて之を埋匿す、時に午前七時なり、利秋は銃丸胸を洞して死し、其他別府・邊見・桂・村田・池上・中島等皆斃れ、独別府九郎・野村忍助・神宮司助左衛門負傷病院に在り降を乞ふ、隆盛以下死するもの百五十九人、降る者坂田諸潔以下二百余人、官兵死する者僅に四十名なりしといふ、

於是乎満天の殺気頓に消し、満目の兵焔全く熄む、堂々数万の大軍、半歳苦闘、徒らに人を殺し、財を糜して天下を乱す、噫言ふ所を知らす、

三十日、役場よりの命により宿の主人特に予が為に五丁櫓の扁舟を仕立て大泊を発す、水手二人予と僅三人、恰も順風を満帆に受け、海上恙なく午後四時赤尾木港(西之表港)に着く、巡査舟に臨み之を検す、曰、今度の挙方向を誤ること言を待たす、然りと雖も幸に前途未た遠し、黽勉事に従ひ以て報する所なかるへからすと、我祖母・母・弟・妹及ひ諸友の先帰り居しもの皆喜んて梁に迎へらる、困苦半歳弾雨を冒し、剣刃を潜、寒難暑苦風宵雨晨、豈思はんや生きて再び郷土に帰り得んとは、顧みれば山川故の如くにして、旧友半ば亡し、曩に出つるときは是銃剣勇ましく出て立ちし健児も、今や起つ能はさるの病軀となる、思廻せは今更に、山容水色共に憂を添ふるものゝ如し、

越えて五六日、鹿兒島への船便あり、即ち書を裁して家大人に送り、無事帰着したることを報す、書鹿兒島に達する前一日、家大人は余を迎ふる為め、宮崎に向はれ遂に高鍋に至り、病院にて西村氏に面会し、始めて余の帰島を確知せられたるも、途次果して恙なく帰着せしやは不分明なればとて、帰途沿道の各駅にて之を調査し而して帰らる、中尾村に至り余は志布志に向ひ同行者鳥井氏の帖佐に帰り居らるゝことを聞き、乃ち途を曲けて之に行き其人に逢ひ始めて確説を得て帰麑せられたりといふ、

終

此役我島の従軍者は年齢十六歳より五十一歳に至る士族にして総数四百一人、此内父子二人出る者三家、兄弟二人出る者二十二家、而して西之表二百九十六人内戦死者七十七人、外大字五十七人の内戦死者十六人、今の中種子村内の分二十一人内戦死六人、南種子村内の分二十七人内戦死九人にして、負傷者全島を通して百二十六人なりといふ、

幸に内地と懸絶の土地なるが故兵火及はす家屋什具の毀損せらるゝものなし、家蔵の銃器は洋式の者は総て徴収し尽して残るものなく、遂に和銃をも徴収して以て其不足を補はんとするに至る、其弾丸鋳造に要する処の鉛錫等に至りては焼酎製造用の「ツブロ」に至る迄殆と余すところなかりき、

役中西之表士族部落に於ては、家に残る男子は老人又は幼弱事に耐えさるものか若くは公務員又は病気にして、起つこと能はさる者の外は一人の在る者なく、婦人は日夜神仏に参拝して戦捷と家人の無事を祈願し、或は相誘ひて三味線を弾き太鼓をたゝき、行歌抃舞隊をなして所在を廻り、以て気勢を壮んにする等にて殆と家業を執るものなし、而して一朝敗報至り戦死者を聞くときは互に之を痛惜して其壮烈に泣き、負傷者を聞きては予後の経過を憂ひて益々祈願を凝らす、然れとも後に至りては、鹿兒島より便船ある毎に必す三四名の戦死者と四五名の負傷者を聞くに至り、次便には已れ其凶報に接するにあらさるやとの憂倶を懐くに至り、人心常に恟々、所謂寝食を安んせさるの状況なりきといふ、

役熄みて明治十二年十月、残存者相謀り、玉川の清流に沿ひたる高台に地を相し招魂碑を建て、同盟戦死者の英霊を祀り永く之を子孫に伝へて其儀を謖れさらむこと

を欲す、

以上の一節は昭和七年十一月本記浄書之際附記するものなり、

丁丑乱概抜萃

県令川村参軍に乞ふて隆盛以下三十九人の屍を旧浄光明寺に仮葬し、其余百二十人を旧不断光院内に埋瘞し、各標木を建てゝ姓名を記す、池邊吉十郎日向より郡山に潜行し、遂に官兵に捕縛せらる、庁下各郷の降人及び余兵の潜匿せるもの、警視官之を処分す、曩に賊徒の所分(処)征討総督に委任の命ありて、九州臨時裁判所を長崎に置き、鹿兒島・宮崎等に出張所を設け、各其処分を分任す、至是大山綱良・坂田諸潔・石井竹之助・池邊吉十郎・鮫島元・横山經營、長崎に於て斬に処し、其他罪の軽重に従つて懲役に処するもの十年より百日に至り、凡一千四百八十八名（他県人は此数にあらす）以て典刑を正す、先に田原の敗に失う所の聯隊旗を捜索し、之を得て官に収む、

一日より廿四日に至る間、県庁及久光邸以下、士民の家屋悉く灰燼焦土に帰し余す所二十分の一に過きす、此に至り七百年来の什宝旧器、或は掠奪焚燼略尽く、

管内焼家の数凡一万二千七百一戸、其内庁下三大区に係る者九千七百七十八戸、破毀に遭ふ者二千七百十六戸、其内庁下に属する者二千四百四十七戸、而して県内士民の金穀を出し私学校徒に供する者、金凡十八万円余、穀凡二千九百石余、交戦より戡定に至つて私学校徒の戦死及死生報なき者、薩隅日士族平民凡五千二百十七人、県庁即ち救恤所を松原神社内に設け、庁下三大区の人民を賑救す、負傷者は尚ほ病院に在つて官療せしむ、而して新に兵燹に罹る者及再ひ災に逢ふ者は又皆結廬、架屋の金を給与し、漸次新築業に就くを得せしむ、凡救恤に消費する所金百五十三万円余、米七千三百石余、於是管内全く政治を布き、支庁は則宮崎より南海諸島に及び、出張所は則垂水・知覽・宮之城・水引・谷山・福山・都之城・飫肥・延岡に置き病院は則庁下を本院とし、支院を宮崎・延岡に、出張病院を加治木・都之城・川内・櫻島・谷山・高鍋に置き、各官吏医員を派遣して牧民の力を尽すを得たり、

戦塵録

（表紙）

種子島私学校同盟

戰塵録　上下

郷土館

私学校

十年一月三十日八旧十二月十七日

城山の麓なる旧厩址に私学校を創立したり、而して学校は銃隊（篠原国幹之を監督す）・砲隊（村田新八之を監督す）とし、学課は碩儒今藤勇（玄ノ弟）隔日春秋左氏傳及七書を講したり、

別に幼年学校を鶴嶺社外に設く、所謂賞典学校にして、経費は西郷の賞典禄を以て充てたり、

又吉野に吉野開墾社を設く、平野正介・永山休二等之を監督したり、生徒自ら耕し其傍勉強したり、

推倒一世之智勇開拓萬古之心胸（開墾社内（陳竜川の語）南洲翁筆）

道義相協

大正癸亥（十二年）

男爵種子島守時題

例言

一私学校は一時賊名を負ふた為め、尓後の行動は総て世間に遠慮勝てあつた、併し今日は既に賊名も削られ、南州祠堂も神社に昇格されて居る場合故、最早何の遠慮も入らない、却つて当時の壮士か義に勇んた真相を子孫に語り伝ふへく、記録に残すことは生存者の義務てあらふと言ふ意見を自分は持て居た、然るに旧同盟生存者の委員諸彦か玉川招魂社を財団法人の組織にな す為め、本年八月十日東本願寺に於て協議会を開いた、其際自分も其協議を傍聴し、いよ〳〵実歴談保存の必要を感し、諸彦に諮りて之の稿を纒めたのてある、

一種子島より出陣したる壮士は四百十一名、内死者百八名に及んた、併し最初より城山最後まて克く戦ふて、然も生命を全ふした人は、森友諒・杉崎佐太郎の両氏てある、依て両氏の実歴談を懇望せしに、両氏は本年八月廿七日私の宅に於て、当時の記臆を互に語り合ふ

て、其誤りなきを確めた上、森氏か自ら筆を採つて記録された、故に之を第一篇となし、其後各位より寄せられた玉稿を次第により集録して本書を完成することを得たのである、

一本篇の清書は森友諒氏へ請ふて完備致したのてあります、而して同氏は明治廿六年六月三日北種子村長に選任され、仝三十年六月三日再任、仝三十四年六月二日任期満限にて退職になりしか、右在任中明治廿八年熊毛郡兵事会長に挙けられ、仝四十年日露戦役に於ける我郡傷病兵慰問の為め、熊本衛戍病院及日奈久・羽犬塚・三角等の転地療養地を訪問し、又明治三十一年本県に於ける府県制実施に付、四月郡会議長代理に挙けられ、九月県会議員に選任、仝三十二年府県制改正と共に県会議員及郡会議員を退任され、其後郵便局長ともなられし事ありたる、本年六十六歳の老翁なり、

大正十二年十二月　　千部廣濟識

序

私学校の挙兵は、一言以て評せは義に勇む壮士の発憤なりき、蓋し丁丑役の発端を案するに、欧米を視察し帰朝したる岩倉・大久保・木戸等の諸氏か、国内の輿論を顧みす一途に対外軟を唱へ、為めに征韓論者か続いて挂冠するや、頻りに硬派に圧迫を加へ、殊に鹿兒島に対しては刺客をさへ縦てる疑あり、為めに私学校の志士憤つて曰く、此の如き為政者は遂に国家の前途を誤るものなり、依て其非理を糺すため純忠無比維新の元勲たる西郷先生を東上せしめさるへからす、随て其途中の警衛は最必要なりとて所在より集り来りたるものか、所謂私学校の挙兵となりたるものなり、故に私学校の党は其結果は兎に角当初の精神に至りてわ何等の野心あることなく、渾心維れ義にして身命さへ顧みさる思想の自ら団結をなしたる運動なりき、果して然らは是の精神是の尊き覚悟は永久に語り伝へて、我等の子孫の脳底に深く印象せしめねはならぬものならんと思ふ、

彼の戦役は歳月既に去りて、将に五十年の忌辰に達せんとす、然るに未た種子島人に関する当時の記録なし、依て今回招魂社の基礎の確立するを機会とし、生存者の実歴談を編纂し、以て後日の備忘に供へんとす、蓋又第一の遠忌紀念に相応したる事業ならん哉、以て序となす、

大正十（マヽ）年　　千部廣濟識

明治十年西南戦争ノ動機

漠々たる暗雲低迷せりとは、明治九年の末鹿兒島に対する政界の気分なりき、然るに其際突然官命なりとて、磯其他に貯蔵せる弾薬等を京阪へ移出せんとせし事あり、是の事実を見聞したる私学校党の者曰く、之れ吾等に対する迫害の準備なりとて、即夜客(気)血少壮の同志結束して火薬庫を襲ひ、在庫品を掠奪したり、是の際南洲先生には猟遊して肝屬郡の高山に在り、報を得憮然として曰く、血気の少壮吾か事を破れりと歎息されたりと云ふ、

是の一事か私学校の第一烽火てあつた、元来私学校党か所在より一斉に蹶起するに至つた理由を案するに、在京の官吏及学生か続々帰郷し来り、其挙動に不審の点多かりしを以て、彼等を捕縛し之を取調へしに曰く、私学校党の挙動穏かならすとの風聞ありしを以て政府の密使となり、大久保内務卿及川路大警視の内命を受け、私学校党なる知己故旧を説て、同校を脱退せしめ自然の瓦解を謀り、時機に臨んては西郷・桐野・篠原等をも刺殺する覚悟にて入国したりとの白状をなせしに依りてなり、

是に於て私学校党は彼等の手段の鄙(卑)劣なるを悪み、曲直を質さん為め、正々堂々と政府に訊問せんと欲して上京を企てたり、但し途中危険あるを恐れ、特に武装の護衛を附することゝなせり、是即ち彼の驚天動地の西南戦争を啓く端緒となりしものなり、

少壮志士の決議

種子島に於ても、西郷先生の教育方針に倣つて、私学校を設け孫子・左傳等の講演を為し、下石寺に開墾をなして少数の壮丁入校しをりしか、鹿兒島に於ける出兵計画の報伝るや我島の有志相議して曰く、

一我島は土地懸隔の為め、王政維新の際に出兵する事なかりしは千載の遺憾とする処、依て是の機を逸すへからすと、

一這般の事官兵と衝突するは数の免れさる処、併し何事も西郷先生の方寸に出るものなるへし、先生の為す処わ必す大義名分に戻る事決してあらさるへし、故に従軍するに何等の疑惧をも要せさるへしと、

一若し従軍せされは、私学校の主張貫徹征韓論の目的達成の暁殆んと完膚なき軽侮を受くるは必然なり、故に蹶起せさるへからさるなりと、

種子島同盟者の出発

我島の少壮志士は、右三要点の趣旨に基き私学校党に同盟を結ふ者の中四百九十五名は団結して各出兵の準備をなしつゝ、鹿児島よりの迎の汽船を鶴首して待てり、時は来れり、明治十年二月七日（旧九年十二月廿五日）午前烈風怒濤の間より聞ゆる汽笛一声、やかて西之表港に近つくと共に、大砲三発を発射して合図をなせり、是そ鹿児島私学校より迎ひの為め来れる汽船寧静丸なりき、是の号砲を聞くと共に同盟の壮士は武装を備へ、我も〳〵と海岸に馳せ集ること勇ましとも実に勇ましの極みなりき、然るに西之表港は風浪猛烈にして乗船する能はす、依て寧静丸は東海岸に廻航し、現和より乗船することに変更したり、壮士一同は一時西町民屋に部署を定めて休憩し、夫より旧慈遠寺跡に集合して整列をなし、田上權蔵氏（元鎮台兵）青笠短蓑を着、大隊長の任務を帯ひ、破鐘の如き大喝を以て気を付けの号令の下に、各隊伍を整へ歩調を揃へ現和に向ひ進発したり、其勢や当るへからす、時に午后六時なりき、然るに朝来吹き荒んた西風は遂に車軸を流すか如き大雨となれり、武装の壮士は東町を経て小牧坂を上り、現和街道に差し掛る頃は、黒雲天を蔽ひ咫尺を弁せす、通路亦泥田を行くか如し、然とも勇気に充ちた壮士は之を物ともせす、其夜の十時頃現和の内田の脇に着したり、暫時民屋に休憩し、翌日未明に滞りなく乗船し、汽船は愈々種子島を離れて鹿児島に向へり、汽船の進んて島の北端に至りし時、顧みて海岸を望めは到る処に篝火を燃けり、蓋し見送りの意を表せるなり、是時之そ家山の見納か、再ひ両親に見ゆる事も期し難しと思へは転た惜別の情に堪へす暗涙を催したり、

而して汽船の進航に随ひ篝火の煙も見へすなりし頃、怒濤天に漲り汽船の動揺烈しく人々安危を語り合へり、然れとも我島空前の一大事件なれは、神仏も共に加護し給はんと互に慰めつゝ時を移せしか、幸に海上何等の障りもなく、其日の午后八時に鹿児島港に安着し、直に上陸して予定の宿所に投せしか、県下百二都城の勇士も陸続集合し来り、鹿児島は殆んと殺気を以て充され、右往左往共に戎衣剣影の街と化し、勇気凛々として人を圧する有様なりし、

私学校党の旅装

本島に於る最初の同盟者には、兼て戸長役場に保管しありしスナイドル（向フ明ケハリウチ）八拾挺及民家に所持せし種子島製のミニヘル（ピスウチ銃）ハ悉く没収して之を配布せられた

るのみニして、旅金は勿論刀剣其他ランドセル代用の黄木綿嚢・脚絆等を自弁にて用意し、出廰の上大勢を観察するに、私学校本部よりは従軍者一般ニ対し、弾薬・草鞋及飯汁の外は一切支給せさる事となりしも、只た進を知て退を知らさるの壮士等何の不平あるへき、各古着屋に就き洋服の上衣を求めるやら、和服を筒袖に変更するやら、ズボンを着くるあり、股引を用るあり、帽子を被るあり、陣笠の纓を結ふありて、辺幅を飾らす服装甚た不揃にして、一見戦国時代に於る烏合の野武士を見るか如くなれとも、流石は維新前に於て国家の干城有事の軍人として自任したる士族の団体ニして、国家に捧くるの精神期せすして結合し、意気天を衝き一心不乱寸分の隙なく、所謂人触れは人を斬り、馬触れは馬を刺すの概ありて暴漢酔客と雖トモ途中必す容を改め、到る処満腔の同情を以て簞食壺漿の款待を受けたり、勇気凛々として人を圧する有様なりし、

私学校の部隊編制

廰城に集りし私学校党約一万五千人、之を七大隊に編制し、西郷先生を総大将となし、桐野・篠原・村田・永山・別府・池上諸氏を大隊長となし、一大隊を更に十小隊に分ちたり、吾人は第二大隊第四小隊左半隊に編入され、私学校（現今鹿児島病院地）の番兵及暗殺嫌疑者の監視に従事した、而して熊本に向ひ出陣の旅装中旧邑主種子島家（久尚君）より旧誼に依り賺（旧臣一同へ弐百円）を賜わられた事かあつて、感謝措く能はさるの嬉さを感した、

私学校党の出発

明治十年二月十五日（旧正月三日）私学校党は練兵場（現今県庁の敷地内）に勢揃をなして愈々東上の途に就ひた、前夜来降り続た雪未曽有の大雪にして、城山は悉く桜花を咲せたる如く、人皆出陣の吉兆なりと評し合へり、但し此時の積雪は約一尺に達した、蓋し五十年前に降りし大雪とかや、雪は十二日より降り始め十九日迄続いた、出陣は六・七大隊十四日、一・二大隊十五日、三・四大隊十六日、五大隊十七日てあつた、

十五日の朝第一大隊は、路を西方に取り伊集院に向て発足し、吾等の第二大隊は路を東方に取り、其夜は加治木に宿泊し、翌日は横川に、次は大口に、其翌十八日亀坂を越へ絶頂に到れは老壮者の鬚髯は悉く氷柱と化せり、其苦寒思ふへし、其夜は肥後の水俣に、次は日奈久に、次は宇土に、其翌廿一日は川尻に着したり、此時我軍の

先鋒加治木隊は已に熊本城兵の前哨と衝突し、敵の軍曹を捕虜となしたりとの風評あり、而して熊本市街は全焼し、火焔天を焦しつゝありしを望見したり、

是より先き我私学校党は、大山鹿兒島県(県令なり)権令に托し、使者を熊本城其他に発し、今回隆盛政府へ訊問の筋ありて東上し、護身の為め武装をなし、熊本城下を通過する旨を通したるに、城兵直に使者を捕縛し、我党の通路を遮断し兵火を以て迎へんとせり、我党憤怒何をか猶予せん、忽ち城壁を取り囲み、獅子奮迅の勇を皷舞し、一蹶本城を踏み破り、薩摩男子の胆玉を見せ呉れんと切歯扼腕して夜の明くるをそ待ちにける、之の衝突は必しも予期したる事にはあらされとも、時の勢として終に兵火を交るに至つたのは悲しむへき事てある、

熊本城を囲む

二月廿二日(旧正月十日) 熊本に着したるに、砲声已に轟々たり、依て花岡山を乗り越え堀を陟りて城壁に迫りたれは、弾丸雨注進行する能はす、是に於て菜圃に潜伏し、死を装ひ其射撃を避んとしたるも、危険言ふへからさりしを以て、意を決し歩調を千鳥に取りて其場を退却し、後方なる溝泥中に身を投し、遂に隊伍を乱したるも、入夜市街の焼跡に引揚けたるに、三々五々我中(小)隊相集り、一人の死傷もなかりしは幸ひなりき、其夜城壁に切り込みの命ありしを以て其準備をなし、死を決したるも中止となり夫より長囲軍となる、而して西郷先生の名を慕ひ来り投するもの佐土原隊・飫肥隊・延岡隊・高鍋隊・人吉隊・熊本隊・協同隊・龍口隊等あり、是等の部隊と行動を共にしたり、

二十二日我軍幾分の或部隊は植木に向ひ、乃木大(少)佐の率る小倉聯隊と交戦し、聯隊旗を奪ひ大勝を得たるも、野津・三好の両少将率る二個旅団の来援ありし為め、植木危険なりとの報に接し、我隊には夜を侵し同地に赴きたるも、応援の必要なしとて直に引返し、二本木の豪商某の邸宅に仮設せる本営の護衛兵となる、其当時軍中に於て(勝ては官軍、負くれハ賊云々)の俗歌流行したり、

豐後口(大津)警衛

本営の護衛中に於て、敵兵豐後口より襲来の虞ありとて、某中隊は黒川(阿蘇町)口に、我中隊は大津口に駐屯する事となれり、或夜瀧口村ニ緊急要件ありとて、杉崎氏外十名を一列となし出張の途中、一酒店ニ立寄り同行中押長より軍中酒は厳禁なるも、今夜は特別ニて酒代は私か支弁する

を以て快飲せよとの事にて、互に献酬中表座敷に於て朱鞘の大刀を携へたる風采の立派なる一紳士を認め、右は敵の探偵ニハあらさるかととの疑念を生し、其真相を探るニハ鹿兒島語ニてハ不可なり、普通語に近き種子島弁の杉崎氏をして先つ先方の動静を認(試)みよとの事ニして、互ニ初対面の挨拶をなし、対談中敵の廻し者なる如き挙動判然したり、是ニ於て同列にありし竹の内十郎太と称し其以前同人の柔術先生、軍中ニ於ける同人の技能如何を認みん為め、同人の歩哨線なるを探知し、通行せんとするを引留め暗大格闘をなし、遂ニ先生を捕縛したりとて評判のある柔道に堪能なりし壮士、身を起して杉崎氏を押し除け、紳士に向ひ貴殿は探偵にあらすやとの質問をなしたるに、紳士ハ烈火の如く憤り、竹の内氏を突き飛はせしか、同氏は蹌踉として倒るゝか如く、両三歩にして踏み留まり、拳骨を固めたるや片足を蹴けたるや人目に触れすして紳士の胸部を蹴り、互に数十歩を退き、紳士の卒倒せるを見て取り、縄を投け両手を締め揚けたる其早業ハ実に驚くへき有様てありし、而して大津の本部に引置し詰問をなせしに、果せるかな其地の区長にして、敵の間者となり数十金を懐中しをる事判明し、遂に斬首ニ処せられたり、其際ニハ神色自若として四方を拝し、念仏を唱へ泰然として死に就き、敵なからも立派なる最後なりと感したりしと杉崎氏の実話てありし、

二重峠に進軍

大津ハ豊後より熊本に通する要路ニ当り、竹田街道と称し、其中央ニ阿蘇山ありて冷寒激烈、旧四月中旬比梅花漸く蕾を破り、桃李正ニ爛熳春色一時ニ媚を呈し、暖国ニ生育せし者ニハ実に奇異の観をなし、殊に戦地を巨(隔)る八里余となり、軍中閑日月あるを知り滞留する事一週日ニして、処々の戦報を聞くのみてありし、然るに同地を巨る約三里なる処に二重峠(阿蘇町西端)と称し、実に天険要害の地なりし、同地の巷説を聞知すに、往昔加藤清正公ニハ大言壮言して、薩隅の兵は三太郎坂にて防き、豊筑の兵は二重峠にて防かは、一兵も我領内に入れしと、実際一騎当千の防禦地てある、依て我隊は進んて同地の中の小屋(三軒屋)に本陣を置き、二重峠及近頃車道に開鑿したる新道に番兵小屋及見張小屋を設く、第一着に於て同伍の三浦平蔵氏と見張をなすに当り、木炭の備ありしを以て之を燃し暖を採らんとせしに、屋内の堆雪忽ち融解して川となりたり、暖国に生育したる吾人等は実に奇異の思をなした、

此時川上半隊長は直に巡視として来臨せられ、親切なる訓言を与へられたり、実に注意至れり尽せりとの感想を起した、

其後間道に当れる小栗峠危険なりとて、同地に堡塁を設け守衛となし居たるに、某日敵兵暁霧に乗し、黒川口及二重峠に襲来し専ら力を小栗峠に注きたり、

小栗峠の激戦

小栗峠の堡塁には一分隊即三十名にて固守したりしか、黒川口及二重峠の銃声伝ふるや前面に黒山を築きたる如く敵兵襲来せりとの急報あるや恰も好し、吾人は非番なりしを以て今や朝食を済め、陣行李に昼食を詰め交代に出んとする際なりしを以て、直に疾走堡塁に到らんとすれは已に砲火を交へ弾丸頭上を掠む、

是に於て川上半隊長の指揮に依り約十名同氏に随従し、敵兵の繰出す要路〳〵に置きたる哨兵を狙撃しつゝ峻嶺幽谷を跋渉して流汗泉の如し、依て積雪を攫ては顔を拭き氷塊を呑んては渇を防き零時過きに至り、川上半隊長休憩を命し且曰く、昼食の準備あるものは喫せよとの事に付き、吾人は陣行李の飯を折半して佐々木某なる少年にも与へたり、暫時にして又種々訓戒をなし曰く、如此深入りをなしては死を免れさる必せり、然れとも諸氏の奮励に依りては死を免るへし、唯疾走努力せよとて整列をなし進行を始めたるも、強者は先んし弱者は後れ、青年は先駆し、老者は続かす、隊伍乱れたり、是れ兼て訓練なき軍隊ノ常弊と言ふへき哉、兎も角遂に敵兵の背後を突き全勝を得たり、

時に佐藤中隊長より急使あり曰く、味方は孤軍後援なし、深入りすへからすと、川上半隊長は之を聞き微笑しつゝ其場を引揚け堡塁に向へは、途中には小銃・外套等を遺棄し、堡塁前面には無数の死骸をも其儘に放棄しありたり、而して其日の背面攻撃をなすには迂回三里余に至りしを確知したり、此戦に於て我兵の戦死は原田押伍一名なりしのみ、

同日薄暮我哨兵線に向て一人の兵員進行し来るを認め、之を熟視したるに敵兵なるを以て生捕になさんとせしか、彼亦敵塁なるを覚り、突然歩を止め抜剣したり、依て一斉射撃をなしたるも更に命中せさるか如し、彼遂に免れさるを知りて直に自刃せり、実に感すへき覚悟なりと言ふへし、

是に於て之を検せしに牛島某と称する巡査なりき、依て

本日の敵兵は警視隊なりしを知るを得たり、

豊前中津兵来援

四月五日中津の義士約百人増田宋太郎・後藤純平之を引率して我小栗峠の哨兵線前に来り、白旗を翻し投合の意を表す、故に哨兵は直に中の小屋なる本陣に報告すると共に、之を中の小屋に誘ふたるに同隊は昼夜兼行苦心惨憺の疲労を一時に感したりと見え路上に臥睡したり、夫より中津隊は各地の戦闘に参加し、延岡地方にては殊に其剛勇を発揮し、最後に於て城山の戦にて目醒しき健闘を続けたり、故に私学校党は殊に畏敬追慕の情を表し、同地にて戦死したる増田氏の肖像及其筆蹟・詩歌等は南洲神社の境内なる教育参考館に保管されをれり、

熊本の退却戦

高瀬・田原坂等に於る私学校党の健闘に官兵進むこと能はす、依て熊本城の危急旦夕に迫れりとの情報を得たる官兵は該城長囲軍の背面を脅かさん為め、黒田・川路・高島・山田等の諸将大兵を率ひて海路より八代方面に上陸したるを以て、我兵は熊本城長囲軍を以て防禦に充てたり、

又田原坂等に於る官兵も戦線を拡け、菊地郡部又ハ大津にも進軍したりとの事にて、吾隊は其応援に赴きしに、彼は総攻撃の予定なりしや、進軍喇叭の声諸共に弾丸雨注如何に防戦を試たるも奏効なく、敵弾の為め樹林の枝を折り、竹林の騒擾せる響勇ましく、此時に於て吾同伍三浦某は負傷し、川上半隊長も戦死せられたるを以て若松分隊長之に代り、伊集院押伍分隊長となれり、而して中津隊後藤純平氏も負傷し、左腕に繃帯をなし鮮血に染みたる儘半白半赤の旗を振り指揮しをられたり、其時の苦戦云ふへからす、

退陣の悲憤

我隊は一応中の小屋に引揚け防戦中なりしか、吾人は先きに小栗峠の戦に於て右足に怪我をなしたる疵痕俄に化膿し、歩行不可能となりし為め引籠りて治療を施し、未た全治せさるに当り、八代方面の我兵敗戦して腹背敵を受け、加之兵力は足らす連戦連敗、熊本城長囲軍も支ふこと能はす、其囲を解きて何地にか全軍退却せさるを得すとの情報を聞くや、右の有様にては慓悍血気の薩摩隼人も敗残の兵となり、終に私学校の目的も画餅に属するならんかと悲憤の涙に泪し折りも折り、暗夜に乗し枚を含て椎葉山を指して退却せよとの命に接したり、

是に於てか前日来の降雨の為め、路は泥濘に化し足は立たさるも已を得ず、右足に下駄を着け繃帯にて之を包み左足には草鞋を着け、小銃は吾同伍に托し、帯剣を杖として出発し、矢部に到れは我軍悉く同地に引揚けをれり、

退陣の難路

矢邊(部)に一泊し實(馬)見原に赴き、四月廿五日晩来の風雨を犯し胡麻山(椎葉村)を登れは険嶺峻坂土壁を攀るか如し、通路僅に尺余に過きすして樹根巖矢路頭に突出し、進むこと艱難、俯して膝下を瞰れは懸崖数千仞老樹森鬱、唯遙に飛瀑の響を聞くのみ、落武者の境遇は実に悲惨なるものなり、漸く溪間に点々人家のあるを認め就て投宿せり、是乃ち椎葉村にして断岸絶壁の中央緑茶の繁茂するの外は何等の農産物あるを知らす、土着の人は玉蜀黍・稗・栗実・椎実等を常食にせりと云ふ、

時に旅宿の主人曰く、此地方は五家の荘と称し、祖先は往古源平の乱を逃れたる平家の落人なりしと、而して其語尾能く我種子島の語韻に似たり、蓋し我等の祖先も平行盛の遺子信基公か南海十二島に封せられたる時、鎌倉より随従して移住したるを以て、自然に言語の遺伝を同ふせしものならんと思ひ、今や落武者となりて是の山中に於て是の話を聞き往事を追懐し、家山を恋想して転た感慨の情に堪へさりき、

薩軍人吉に集中す

其翌日溪路羊腸行くこと里許釣橋あり、巨葛数百条を以て橋腹を纏ひ、之を両岸の樹梢に約す、橋の長さ数百尺にして橋の幅弐尺に過きす、而して橋下幾百仞水石相触れ奔盪の声轟然雷を為し一瞥人をして戦栗(慄)せしむ、行て中央に至れは動揺甚し、戦々恐々徐にせんとすれは愈動揺し、一行皆匍匐して過き江代(球磨郡水上村)に出て人吉に赴く、

我軍は各部隊を人吉に集め再興を謀るの計画なりしを以て各方面より続々集り来り、宿泊すること二昼夜にして、偶出陣以来三閲月も相見さるの友人故旧に邂逅したる時には、君は未た生存しをりしやとの語を以てせり、是れ互に最早戦死を遂けをるものと想像しをりし故なり、

夫より快談壮語気焔万丈の吹き競へをなし、且つ郷里より恤兵の為め派遣されたる河内節藏氏にも面会し、図らさりき家山の近況を承知するのみならす、現金弐円外煙草等の恵与を受け、実に歓喜の至りてあつた、

薩軍の編制変更

人吉に於て薩軍は部隊の編制変へをなせり、即ち奇兵隊・

振武隊・正義隊・行進隊・干城隊・雷撃隊・常山隊・鵬翼隊・破竹隊を組織し、部署を定むること左の如し、

人吉方面防禦には正義・干城・常山・鵬翼及佐土原・延岡・人吉・熊本の諸隊を以てし、鹿兒島進撃には振武・行進・破竹の諸隊を以てす、

而して豐後口突出には奇兵隊を以てし、野村忍助氏(介)之を率ひ、其後佐藤三次氏(二)総監軍となられたり、

奇兵隊の進軍

吾隊は奇兵隊三番と改称し、四月廿八日東方日向を指して出発し、湯山(水上村)江代の内(南郷村)神門を経富高(日向市)に出て、夫より国道を沿ふて延岡に至る、此一行中神門に一泊したる朝首を軍門に曝しあるを見たり、是は或夫卒酒屋の下婢に強姦したりとて、直に斬首せられたるものにして、薩軍の軍律厳粛なりしを知る一例なるへし、吾等は延岡より猶北上し、熊田川(北川町)の上流山間に於て豐後口に対する防禦線を張りしも、左したる交戦もなく毎日山上に哨兵を設くるのみにして、只日暮の声に無聊を感し薇を摘みて夷斉の往事を追想したり、

或日溪流に巨大なる鮎魚の沈めるを見附け、歓笑しつゝ之を拾ひ揚けたるに、半身は鼈なる者嚙み切つてなかりき、然れとも食慾頻りに催せしを以て、其傍に乞食の徒やら樵蘇の童やら抛棄したる素焼の土瓶ありしを幸ひとして、吾等に団飯の菜として与へられてあつた一握の味噌三人分を集め、摘みをきたる薇と共に煮たるに其美味言ふへからす、蓋又陣中供給不足の賜ならんのみ、寧ろ憐むへきかな、

又本陣と哨兵線と隔懸せるを以て報知役を置き、某日吾人其任を帯ひて小溪川を徒渉し、半日ニして交代し帰らんとする前に於て暫時驟雨ありしか、右の溪川に到れは已に増水して渉る事能はす、故に土民の兼て準備しある軽舟を浮へ、漸く前岸に達するを得たるも、瞬く間に濁流岸を呑み白波渦を巻ひて舟をも浮へる事不可能なりし、是に於て初て大山幽谷に於る水勢の恐るへきを悟りたり、

奇兵隊の奮闘

五月十二日重岡(宇目町)に進軍し、駐在巡査三十人位を追ひ払ひ同所に一泊、十三日竹田へ突進したるに、同所の官吏及巡査は四方に潰走して一の敵影をも見す、滞留一週間位なりしか、土人士の歓迎を受け転た通快(痛)の至りに堪へさりし、而して同地の志士約百人位報國隊を組織し我軍に投合したり、

竹出に於て旅宿の主人曰く、先月二重峠を襲撃したる警視隊の人々は「人のすかたと二重の峠登る間の恐しさ」と俗歌を謡て出発したりしか、悉く打死して帰へるものなかりしと云ふ、

五月廿四日敵軍には隊を分つて二となし、間道及本道より突進し、間道なる我(法師山カ、竹田市)寶珠山の堡塁を陥れ追撃して鏡(竹田市)に至り本道の兵と相合せり、故に我軍は左右の山顛に伏兵を設け、正面には吾隊の一部を以て防禦を為したるに其虚に乗し深入せり、是に於て切り込の号令と共に一同抜刀し、吾人も其内に参加し敵兵に迫りたるも、我右翼の伏兵より射撃猛烈、敵兵も亦退却したるを以て其塁内に躊躇せる際、我左翼の伏兵激戦の声聞へけれは応援せんとて、其山上に登りたるに塁内鮮血淋漓死骸を認めたり、右伏兵指揮者佐々木分隊長曰く、敵の抜刀隊樹を(攀)挙ち草を分け魚貫して本塁に迫りたるを以て、一斉打方の号令をなし射撃をなしたるも、更に命中せざりしかは二三名塁内に飛込み、其部長らしきもの吾人に向ひ白刃を頭上に振り廻すのみにして、切り込み来らさるを以て此方より袈裟切りをなし、彼倒死せんとする際其刀端吾顔面に触れたるか如し、其他の敵は逃走したりとて、顔面に五寸位の刀痕ありて流血淋漓たり、而して吾同伍下村喜之助氏も其短刀を奪はんとする際、右腕に負傷を受けたりとの事なりし、之を氷川の快戦と称し合へり、

其後敵兵応援日に増加したる為め遂に敗戦となり、同地を退却せさるを得すして小野市(字目町)重岡の隣まて引揚たり、

三十日三重市(三重町)に進軍し、六月一日更に進て臼杵を襲撃す、同地には東京巡査約百人、同地の応募兵約八百人ありて防備を厳にせり、依て三面攻撃を試み、吾隊は左翼となりて進軍し、一斉に勇を振ひ破竹の勢を以て敵塁を破壊し一気に市街に突入しけれは、市民は茶菓其他を捧て歓迎し、官兵に組せし戦闘員は海水を以て繞囲せる古城に立ち籠れり、依て我軍は其丘上ヨリ俯瞰して射撃したるに城兵は之を固守する能はす、沖合に向て游泳を始め恰も鴨の泛へるか如し、之を狙撃せは最愉快なりし如くなれとも、夫は余り惨酷なりとて端舟を漕き出して之を救助し、応募兵は直に放逐し、巡査は悉く捕虜となしたり、

豊後口の退却

然るに敵の応援隊一時に襲ひ来り、一小川を隔て互に塁を築き対戦すること約一週間、終に我兵は敗戦し佐伯に向て退く、其途次津久見に於て敵艦より砲撃を受け死傷

ありたり、

臼杵敗軍の日未明吾隊杉崎佐太郎の同伍渡邊某は重傷を受け、我島出身の野間病院長に托し治療中なりしか、我兵全部退却するに依り已を得す同兵を戸板に乗せ、一方は杉崎氏一方は同氏の同伍下村氏と吾人交互相棒となり担かんとするも、年少且労働に経歴なき為め腰部の筋骨軟弱にして歩する蹌踉寸進尺退、味方は疾走敵兵は横合より弾丸を浴せ進退極りたる際、西牟田某此窮境を憫察し之を背負ひ進行せしも、行路は益険峻敵兵は益発砲し、苦心中吾同郷なりし羽生某此窮状を聞き附け大手を拡けて駈け来り、杉崎は何処に居るやと連呼すると共に、人夫二名来りたるを以て大に安堵し、右患者を担荷せしめ本隊の屯所に駈着けたり、地獄に仏と云ふ事は此事ならんかと想像せり、

而して羽生某は其後敗戦に際し、山中に潜み本隊を失ひ降伏するの外なかりしも、右は男子の潔とせさる処なりとして、或農家の保護を受け馬厩の二階にて日子を経過する数月にして、戦乱鎮定の後商人の装をなして帰島し、戦乱鎮定後月日を経たるを以て、裁判の宣告を受けさりしは氏一人なりとす、

退軍の悲境

警視隊は佐賀関其他より続々上陸し、豊後方面官軍の防備は日に厳重となり、薩軍の折角計画したる豊後口突進も終に失敗に帰し、今は何等の目的もなく唯退陣に退陣を継続するのみてある、

而して先きに佐伯より重岡(宇目町)に引揚け、同所を退くや国道より西方の間道を通過し、湯ケ内(柚ケ内カ、北川町)にて敵兵には要処〳〵の山顛に防禦線を張りしを以て之ニ対戦の際、吾同伍廣瀬某負傷せるを以て、延岡の病院に護送せり、

其後梓峠(宇目町)の敵兵を襲撃せんとて、或日の暁天老樵の案内にて山中に入り、藤葛を攀ち樹根を握りて進行し、午後より風雨となりし為め敵の背後に出たるも、我兵の所持せる銃の過半はミニヘルなるを以て、発砲不可能なりとて攻撃は中止すへしとの議起り退却に決したり、時に風雨は益猛烈となり、日は没して四面暗黒、加之山中路なく往く処を知らす、遂に隊伍を離れ方向に迷ひ深更に至て三三五五相集れる戦友と謀り、濡葉を折りて之を敷き、小銃を抱きて跪坐し、眠らんとするも眠る能ハす、全身寒冷に襲はれ、腹中又空虚を感す、時に熟ら〳〵家山を思ひ起し悔悟の念頻りなりし、是れ乃ち事心(志)と違ひし時

に於ける人情の弱点とも謂つへきかな、凡そ砲煙弾雨の裡にありては何人と雖も興奮して死を知て生を知らす、只成効(功)を期するのみなり、然れとも一度圏境に憂ふへき敵もなく、心に余裕を生し身に苦痛を感しなは丈夫の鉄石心も挫折するの例古来少しとせさるなり、

其後は休戦の状態にして、炎熱は蒸すか如く、虱は全身を侵し、垢亦堆をなせるを以て、或戦友と共に熊田川の上流増水の為め、川幅の約三十間を游泳せんとて吾人は第一着にして前岸に達したりしか、夫より帰らんとするに臨み友人等は遙か上流に到り游泳を始めたるも、夫に気附かす其処より吾人のみ游泳をなしたるに、四苦八苦溺れん計にして漸く上陸するを得たり、是れ急流を知らす識らすの間に遡りたる理由にして、海浜に育ち河水に慣れさる人は大に注意すへきことを覚りたり、

而して本営より引揚の命ありとて、更に退ひて長井村(北川町)に到れは、先きに鹿児島に向ひし我兵は百戦利あらす逃れて日向に走り、美々津(日向市)にて殆んと全滅せりと聞知し、失望落胆限りなし、

又先きに氷川の戦にて負傷し入院せられたる吾が同伍下村喜之助氏は、軍需品募集其他の為め帰郷せられ、木砲製造の大工三名と、和銃をミニヘルニ改造の鍛冶二名を伴ヒ帰隊ニなりし事を聞き及ひをりしが、突然ニも邂逅して且驚き且喜ひ郷里の近況を問ひしに曰く、已に帰郷せる戦友は多く帰順しをれり、且両親も健在にして朝夕神仏に参詣し心配しをられて、面会せは然るへく申伝よとの事なりしとて、暗に降服勧告の意を寓せしも、仮令未丁年なりと雖モ、最初の同盟を顧み戦友に対しても、自ら進んて敵の軍門に降るは潔とせさる処なり、斃れて後止まんのみと、併し運を天に任せ捕虜となりし場合は已を得さるなりと決心したり、

延岡へ突進

八月十六日長井村より延岡本道に向て突進せんとし、各部隊の精兵を選抜し、吾人も其一人となり、夜襲を試みたるも路は狭隘、殊に柵を設けて固守し、岸上より横撃の恐あるを以て進む能はす、其時中津隊先鋒となりしか其一人我斥候を敵兵と誤認し逃走したりとて、其隊長之を追詰め切り殺したるは勇ましき極みなり、

更に豊後口に向て突撃せんとの議あり、夜闇に乗して整列したるも人気沮喪し、敵の防備亦厳なりと聞き是の快挙も遂に現実する能はさりき、

進むも敵、退も敵、加之各方面に向たる我軍は惨敗に惨敗を重ねたる結菓(果)、人心沮喪の極に達し流石に慓悍無比の薩摩隼人も策の施すべきものなく、一切の希望は水泡に帰し、今は唯埋骨の地を撰択する一事残れるのみ、依て我軍の首脳者に於ては、一には家山に帰り潔き最後を遂んとし、二は三田井(高千穂町)迄赴かは或は豊後又は竹田に突出して活路を得へき機会もあらんかと、一縷の望みを持つて最要害険阻なる側面間道に当る可愛嶽(北川町)より脱出せんことを企てたり、但是の時一般の兵に対して降伏を欲するものは随意にせよとの申渡をなしたりと云ふ、

可愛嶽の切り抜け

八月十七日(旧七月十日)夜可愛嶽に向て出発す、敵の監視を避け其重囲を脱する計画なりし故、敵影なき間道より進むのである、然るに途中狐狸若は宿鳥の声に驚きて、夫れ敵影見へたり、夫れ敵兵来れりとて退くこと数回なりしか、其都度我兵は減少して過半数を失へり、蓋し是等の落武者は或は樹陰に匿れ、或は溪間に潜みて降伏の機会を得んとする心底ならんかとも察せられたり、但夫等は不問に附し、決死の一隊可愛嶽の麓に到るや山顛には篝火を焼き時々探りの銃声を発せり、夫に何等の反応もなさず、山月の没するを待ちて隊伍をなして樹根を握り藤蔓を攀ち魚貫して并風(屏)を建たる如き山顛に登れは、三四名の哨兵のみなりしを以て大に狼狽し直に退却せり、吾人か其頂上に達したりし時には、先鋒已に其嶽を乗り越へ敵兵の背後に出たり、

是に於て敵は其保塁を反対に守りて発砲頻りなり、之を認めたる我先鋒切込を掛けたるも少数なるを以て効を奏せす、更に後部兵と共に十名位旭光の輝く下に白刃を聯ねて肉迫したれは、敵は其威光に恐れ全部退却せり、其時の壮烈なりし偉観は今に至り尚眼前に在るか如くてある、

始て西郷先生を見る

可愛嶽を乗り越へ集まれる同志は僅に四五百に過きす、顧ふに挙兵の始め麑城を出発せし同盟は一万五千と称せられしに、今や是の有様は如何、嗚呼何人か感慨無量ならさるを得んや、而して幸に之の要害を切り抜けたれは、敵の逆襲を避け幾百尺なる幽谷に下りて休憩をなせり、其際我軍幹部も三々五々来会せしに、其内体軀殊更巨大眼光最炯々たる偉丈夫あり、一同同人に向て敬礼をなし、同人も亦微笑しつゝ答礼ありたるを以て、初めて西郷先

生なりし事を覚知したり、

夫より先生は山籠に乗り、黒の畦鞘にして刀身二尺位の刀剣を籠に結ひ附け、二連発銃を取りて山中より探りの銃声猛烈なる方面に狙を附けられたり、吾人は敵の哨兵を追ひ払はん為め山上に登りたるも、銃声稍鎮静となりしを以て、方向を溪間の樵路に転し進行したり、

又杉崎氏は可愛嶽を乗り越へ山中に入り込みたる時、木炭若くは椎蕈製造業者の一小木屋ありて数多男女の衣類を放棄しあり、且酒樽三挺を残しありたりしに、西郷先生らしき偉丈夫熊本の総大将池邊氏等を伴ひ来集あり、幹部の或一人之を見附け、之は天より先生へ与へられしものならん、御一酌あられかしとて吾人か腰に着けたる水呑を借り、酒を浪々と盛りて捧けられたれとも、唇に附けたる儘其水呑を返戻になりたるを以て、之は先生と献酬をなしたる心地して感涙に咽ひつゝ其酒を飲み干したり、且垢附き又破綻しをれる我着物を抜き棄て、其処に放棄しありし衣裳と取り代へ、帰郷の時迄夫を着用したりとの話なり、

飢へたる落武者

長井村を出てより兵糧続かす、欠飯一昼夜余にして其間は唯泉水を汲て之を飲み、草根を堀りて之を嚙り漸く餓死を免れしのみ、

八月十九日必死の覚悟を以て敵の保塁を破り、祝子川（ほひかは）に至りしに恰も好し、其兵站部は昼食の準備中なりし模様にて、炊事品一切は其儘ニして逃走せしを以て、之を襲ひ梅干やら団飯やらを争奪し喫食したる、其美味天下何物か之に如かん、嬉しきことの極みなり、尓来食料常に欠乏し艱難なる道中を続けたり、

八月二十一日三田井穂高（町）にて敵より奪取りたる米なりしとて馳走なり）を通過するに当り空腹に堪へす、或民家を訪ひ一飯を求めたるに、主人は之を快諾し飯櫃の儘提供せしを以て歓喜の余り直に喫飯せしに、稗に多少小豆を混入したるものにして冷却しをりたる為めにや殆んと喉に下ること能はす、依て点々混入したる小豆を一粒つゝ拾ひ飢餓を凌きたることあり、其後年新聞紙に於て乃木大将は、非常の場合の練習なりとて奈須（那）野の開墾地にては常に稗飯を喫せられたりと聞き往時を憶ひ起し自己の修養の足らさりしを愧ちたり、

夫より敵の保哨（歩）を避け、江代の一部に出て或蕎葺の民家に休憩す、偶々其家（屋）根を修繕せんとて多くの人を雇ひ、

昼食に供する為め大鍋に汁の準備しあるを認め、同伴中なる或紳士は其汁を購ひ、一同に頒ちたるを以て腹鼓打て其汁碗を傾けたるに其美味云ふ可らす、深く其恩恵を謝しつゝ、再ひ之を傾けたるに巨大なる油虫の混入しありし故、仮令飢へたりとも之を吸ふ気にならす竊に之を放棄した、

而して其紳士か代金を払ふを一見したるに、其懐中より取出したる風呂敷の内には数千枚の紙幣あるか如し、世間には如此富豪もあるものかと吃驚し浦山(羨)しかつた、夫は其筈吾人等鑑一文もなく、日々饑餓の腹を抱へて流浪しつゝあるか故なり、

又杉崎氏は高千穂に於て、空腹に乗し或民家に早熟の柿枝も折れん計りに結実しあるを見附、飛ひ込んて之を採収し袖に裾に之を包んて其門を出んとせしに、図らすも門外より一巨漢来り、両手を拡けて門に塞り微笑しつゝ其柿は貰つたのか、盗んたのか如何ニする考なりしかとの詰問ニ付き、直に右は西郷先生なるを覚り恐懼しつゝ答て曰く、兵員皆空腹に堪へさるを以て彼等に分配せんと欲し、実は無断にて採りましたと白状せしに、先生曰く、仮令餓死するとも人の物を盗むへきものてはない、併し是の家には自分か止宿しをるゆへ自分か其代価を償ふへし、早く隊に持ち帰りて一同に分配せよと、衆人之を聞いて先生の恩威窮地に陥りても乱れさりしを感嘆せりとの話なりし、

昼夜兼行城山に入る

種々の窮地を逃れ、江代を出てゝ河岸に到れは、約二十間の河幅に丸木を継きて桁となし、其上に又丸木を載せ之を葛蔓にて結束高低甚しき橋梁あり、其中央に到れは垂下して川底に陥るか如し、故に吾等は匍匐して漸く通過したるも、先生には河岸に到り幾回となく引返し、遂に土人に左右より擁護されて渡られたり、

是に於て死を決せられたる先生の挙動にして如何にも卑怯なりし如き感想を起したるも、熟々考るに死地を撰ふは和漢とも英雄豪傑の慎む処にして、決死せんとて戦場に臨む際腹痛をなしては遺憾なりとて、平素好嗜の柿を進められたるも之を退けられたる古例もあり、先生には秋風埋骨故郷山の目的にて大事を取られたるに外ならさりし、此一事を見ても偉丈夫なりし事を知るに余りあり、而して全軍是の急流を過き小高き峻坂を越へ丘上にて休憩したるに、数日間一睡もなさゝる事とて、一同疲労を

感し一歩も動くこと能はす、是時先生には「二歳衆ハメツケヨ」との一言をなせしに、衆皆電気の伝ふるか如く勇気百倍し一斉に起て進行を始めたり、訓言の簡にして而かも感動の大なる全く徳化の然らしむる処なるへし、二十五日銀鏡(しろみ、西都市)に入る、是夜風雨劇甚なり、二十六日雨猶止ます、溪流漲り橋梁落ちたるも屈せすして進行、米良に入り二十七日上槻木(多良木町)に達し、二十八日須木の山路を経小林に出て、三十日横川にて敵と衝突せしも更に間道に入り、三十一日蒲生を経て吉野に出つ、其時将卒一同民屋に入つて休憩し談笑の余或将校「ダレタ」と云ふ、言下に河野将校(主一郎)、曰く「浮世わ車チヨ」との言あり、其後同氏は十年懲役の刑を受けられたるも、清国に漫遊し水産学校長となり、其他県知事等の栄職を帯ひて天命を終へられたり、是れ薩軍の幹部中只一人にして其言の適中したるは真に奇なりと云ふへし、

九月一日(旧七月二十四日)鹿兒島守備の敵兵を襲撃して城山に入れり、是時将校より夫卒に至るまて総員三百七十二名なりし、

吾人は岩崎谷入口の加治木屋敷に杉崎氏其他と守を附けしか、吾等と前後ニなり帰廬せられたる桐野副大将には頗る健脚にして、筒袖の白衣に銀製鞘の長剣を帯ひ、同所にて某兵の小銃を取り、老松を楯ニして狙を附け、私学校前面の路上を来往せる官兵を打たれしに一々命中したり、

夫より杉崎氏は元琉球(現長田中学校)仮屋の跡に守りを附けをりしに、軍艦より上陸したる官兵黒山の如く襲ひ来りしを以て私学校に引揚け、石垣の上にて発砲中右腕に重傷を負ひ、先きに負傷し岩崎谷病院に入院中なる我鳥出身の長野只衛氏を訪ひ入院したり、

城山に籠りしより官兵の包囲益厳にして、我兵糧亦欠乏せんとするを以て某々将校協議をなし、九月二十二日河野主一郎・山野田一輔の両将校を使節として官軍の本営なる磯に赴かしめ、河村参軍と談判す、其結果河野将校は留置され、山野田将校は復命の為め二十三日帰城して曰く、官軍の要求を容るゝに於ては本日午后五時迄に回答せよ、然らされは明朝四時総攻撃をなさんとの事なりしを聞き、左の偶感一絶を賦す、

鹿子城山風怒号　楚歌四面月輪高
不知今夜生兼死　三百残兵意気豪

果せるかな、二十四日暁天総攻撃ありしを以て、防戦中

流弾飛来し脊骨に負傷したるゆへ、直に杉崎氏の入院せる岩崎谷の病院に到れは、同所は危険なりとて已に同所岸上の岩窟内に引揚ありたり、依て同所を訪ひ杉崎氏等と病床に平臥中終に城山は陥落し、一時窟内にも雨注せし弾丸収まると共に官兵駈来り、武器を差出せとの差図の下に悲しや捕虜の身となつた、

八閏月の戦争も九月二十四日旧八月十八日午前十時に全く終局となり、捕虜一同は磯の官舎に移され、其途上横臥したる女子の死骸もありて実に悲惨の極みてあつた、而して磯の石蔵に幽せられたるに、其階下には河野将校及重傷を受けし野村・伊藤の両将校を居られしを認め、其二階に上れは板間にして雑兵二百人位あり、其内にわ長らく互に音容に接せさる戦友もあり、又先きに江代に於て大金を所持し紳士と見受けたる坂田諸潔氏にも面会したり、同氏わ兵員及兵糧を募集せられたる高鍋区長にして、其後大山権令(県令)等と斬罪の刑に処せられたる人なりしならん、一週間位にして長崎出張裁判所開庭(廷)ありて、一同呼出を受け形の如き取調の上「自宅謹慎申付候事」との切紙を貰ひ放免される事となつた、

西郷先生の終焉及各将校の最後

石蔵に雑居中城山陥落の最後を見届けたる人あり、曰く、西郷先生は陥落の際、路頭にて敵弾の為め斃られしを以て、別府将校介錯して首級を秘密に埋葬せられたり、故に官兵は暫く之を発見することを得さりき、

而して桐野・邊見以下の将卒一同は岩崎谷口の塹壕(現今田上七之助氏温泉場の所なり)の内に集合し、或は首を斬り、或は腹を割き、桐野氏は最後迄銃を放ち百発百中敵兵近づく能はす、躊躇せし時雑兵に向て曰く、降伏するものは今之をなせと、依て僕は其壕内を飛出せしに外に二三名追従し来れり、其時敵兵は手招きを以て僕等を呼寄せ、而して後敵兵は一同其堀涯に迫り、畳を抛ち戸障子を覆ひ、其上より銃剣を以て突くやら斬るやら実に惨虐の最後なりしと、是に於て先刻吾等捕虜となり岩崎谷を通過の際、女子の横臥したるを認めたる附近か先生終焉の地なりしかと感想を生し、又堀の内に鮮血淋漓たりしを実見したる所か最後の場所なりしことを覚知し感慨無量なりし、

種子島に帰着

裁判の宣告放免に依り、杉崎氏及長野氏と磯を出て市街に到れは、兵火の為め全焼し、商店もなく旅館もなく、海岸にも亦一隻の船舶を認めす、往来の人影さへ甚稀ニ

して桑滄の感頻りなり、依て此地を巨る陸路十三里なる山川にて便船を求るの外なしとて、同所に赴く途中元南林寺墓所に於て監視員に邂逅し、之を以て通行せは何処に到るも無銭宿泊なりとて鑑札を渡されしを以て、歓喜云ふへからす、直に之を携帯し鹿兒島郡中村に到り種子田戸長を訪問したるに、早速粟飯の馳走になり、他に適当の旅館もなけれは今晩は吾家に一泊せよとて優待を受け、翌日は喜入にて平山戸長の世話に依り旅館へ一泊し、夫より指宿郡湊に赴き弁指某の助力に預り外宿一週間余なりし、其内に戦友桑山周八氏・芝喜十郎氏来宿し、幸にも住吉の伊太郎船入港せしを以て共に同乗し山川に廻船したるに、同地より東京巡査十名位乗船せんとして、初メ吾等には上陸を促されたるも、事情を訴へたれは神部警部大に同情を表せられ、同乗して帰島したるは十月十四日、即旧暦九月九日なり、

我家に於ては重陽の節なりしを以て朝来来客あり、談動すれは城山陥落の事に及ひ、吾人は已に城山の煙と化し去りしならんとの噂取り〳〵にして、聞くにも聞かれす気も狂乱する計りにして、老父は殊更大酒を傾け只今就床したる処なりとの事にて、戸を叩き無事帰宅したりしを告くるや、夢か幻かと飛立つ計りに喜ひつゝ両親は戸外に出迎せられたれは、先立つものは涙のみにして互に語るへき言葉も見出さす、暫くは黙然たる有様なりし、而して揖宿湊の宿料金八円の取換を快諾し、殊に其船賃は無償とせられたる伊太郎船主に深謝すると共に、其八円は芝氏を除き四名に分割し弁償をなしたり、

其後種子島警察署より招喚を受け出頭したるに、連類者約三十名にして連名を以て左の宣告文を受けたり、

其方共儀賊徒に与し、官兵に抵抗する科懲役三年可申付処、情法を酌量し其罪を免す

明治十年

九州臨時裁判所出張之印

西南の役に関する戦後の経歴談

戦役の後は浪人の身となり唯慷慨悲歌を是れ事とせしに、当時の江馬出張所長及前田種子島学校長より招喚され、尓来大に学業を励むへしとの訓戒を受け、直に種子島学校に入校、漢学を専修し明治十二年四月西町小学教員となり、同年十一月旧同盟戦歿者の霊を慰せん為め、西之表字玉川の地をトし招魂碑建設の議ありたるを以て之を賛し聊か其工事に助力したり、

右工事も已に竣らんとするに当り慈親曰く、戦役中に於て武運長久を伊勢の太廟に祈願せり、満願報謝の為め太廟に参詣し、序を以て東京をも見物せよと其恩命に接したる時は歓喜云ふ可らす、直に其準備を為したるに、先きの文学博士西村氏其他より同伴せんとの申込を受けたり、

依て明治十三年三月上京の途に就き、三人同行にて神戸迄は汽船に乗り、西京迄は汽車に乗りて到着し、夫より大胆にも東海道徒歩をなさんとて往くこと約三里にして忽雲間に大海を見たり、疑訝に堪へす其水を嘗れは海水にあらす、始て琵琶湖なりしを覚り、石山寺等を見物し、勢多長橋渡り旅行する再三日にして全身疲労を感し行脚続かす、依て旅行案内を求め之を閲するに、伊勢の四日市より東京往きの汽船あり、且毎日二回宮に往復船ありとの事なりしを以て、四日市に出て船にて太廟に参詣し、汽船にて東京に出んとの旅程に変更し、漸く四日市迄徒歩にて辿り付き、宮行きの便船を請んとすれは、豈図らんや宮は熱田にして太廟にあらさりしを覚知し落胆したるも已を得す腕車を借り、往復二日にして此地を巨る約二十里の太廟に参詣せり、其時始て葉書なるものあるを知り、之を求めて慈親に安着を報したるに、印紙の個所に筆跡ありしも無効とせす、符箋を以て丁寧に注意を与へられたる事あり、地理に暗く経験に乏しき書生の旅行も亦滑稽にして嗤笑の至りならすや、

四日市より汽船にて上京し、西村氏は前田恩師の添書に依り重野安繹先生の紹介を以て島田塾に入り、吾人も同恩師の添書に依り水元成美先生の紹介を以て岡塾に入りたるに、同窓学友より西南戦争中の状況は如何、戦闘の趣味は如何と質問を受け動すれは戦争談に及ひ、各友より士官学校へ入学すへく勧誘頻りなりし、且つ吾人より先きに上京されたる今の河内中将は郷里の同窓なりしか、已に同校に入学しあるゆへ軍学研究の念起り、之を郷里の両親に謀りしも、以ての外なりと拒絶され、遂に志望を達する事能はさりしは遺憾なりし、

然るに我帝国と清国との間に小衝突ありて、少壮青年間に於て義遊(勇)兵組織の議あり、吾人にも頻りに賛同を申込めり、依て左の一絶を賦し之を示す、

寒風凛烈五更天　日本狂生難就眠

聞説西蕃養兵力　読来孫子十三篇

其当時の政海(界)に於ては、征韓論に起因したる前原・江藤

及私学校党の挙兵敗滅に鑑み益興論政治の緊要なるを感じ、前参議板垣氏の民撰議院開設建議に引続き、自由党・改進党・帝政党等の論戦となり、遂に明治二十三年を期し国会開設の大詔下れり、是に於てか何時かは私学校党蹶起の趣旨明了ならんと竊に喜びし事あり、

吾人には明治二十一年老親養護の為め帰島し、村政に従事中同二十二年　天朝より西郷隆盛に特赦の恩命あり、吾等も亦青天白日の心地を感じたり、

而して日清戦争となり、日露戦争となり、全勝を得たる毎に、玉川招魂に奉祀せる我戦友諸氏の霊に向て報告祭を挙行せり、其際左和歌を読み述懐をなしたる事あり、

ながらえて忍ふも悲し御軍の
　　誉ある世にまさは如何にと

世人も亦此再度の大捷に依り、深く西郷先生の征韓論は卓見なりし事を会得したるが如く、先生を追慕するの声高きを聞き、会心の笑を禁ずること能わさりしなり、

又元吾同隊にして杉崎氏の押伍なりし河俣嘉一郎氏蚕業視察の為め来島せられたる事あり、依て同隊なりし生存者相謀り或酒亭に於て歓迎会を開きたる時、同氏曰く、先生の大隅山狩猟には必ず高山なる拙宅を常宿とせられたり、或時支那にては上海より北京に鉄道を敷設せんとすとの噂をなしたるに、先生憤然として曰く、そんな事は断然あるまい、若しあるときは我日本はどうなるかと身を振わして憤懣せられたりとの実話なりし、之に依て見るも先生には私学校党を以て韓国を我手に入れ、清国を圧伏して帝国の発展を計らんとの抱負を懐き常に念頭に置かれし事を証して余りあり、

大正十年四月玉川招魂の四十五年祭挙行に際し、旧同盟相会し祭祀永続の方法を協議せり、吾人は三男友信飛行機墜落に依り惨死の為め村葬せんとの申込を受け、其準備中なりしを以て其席に参列せざりしも、成るべく法人組織をなし資財を永続せんとの議ありしを承知し、其当時委員の末班に列しをるのみならず、平素戦歿諸氏の旧誼に報ん為め永年に至るも、祭祀の強固ならんことを切望しをるを以て出魔の時機を利用し、再三ならず運動をなし夫々手続を了して大正十二年十一月十一日其筋へ出願したるも、目的狭少資財僅少なりとて却下されたるは遺憾の極みなりし、

大正十二年一月廿三日佐世保に赴き、郷友牧龍太氏を訪問したるに、図らずも踪跡不明なりし元種子島私学校に

掲げありし西郷先生の親筆なる額面を示され、転た今昔の情に堪へず、是亦何等かの因縁ならんかと想像し覚へず落涙を催したり、是に於て同氏先きに其親筆を写真版に附せられたる一枚を貰ひ受け、之を玉川招魂社縁記(起)中に記載せる先生の趣旨書と照合したるに誤謬ありしを以て、縁記の欄外に明記して其正誤をなし、同年十一月廿七日栖林神社前に於て戦塵録関係者の撮影をなすに当り右写真版を捧持したるも文字判明せざりし故、之を複写して前紙面に貼附し、且栖林神社殿は火災前に於る旧形其儘なるに付き、同じく貼附をなし共に後年の紀念(記)に供するものなり、

右玉川招魂五十年祭に臨み、本郡の史蹟に趣味を有し風教に精神を留められし千部氏の懇請に応じ、其紀念に供せん為め、西南の役に於て我同盟の従軍したる趣旨を明にし、且吾人が千軍万馬の間に於る鍛錬と修養とに依りて得たる効果をも叙へ、戦歿諸氏の英霊を慰んと欲したれども如何にせん、才拙く力微にして空しく五十年間を経過し、余喘を保ちをりしは慚愧の至りに堪へざるなり、唯願くは、後世子孫に至り前文の顚末を翫(玩)味し、戦歿諸氏の全く名利を去り千辛万苦専ら国事に尽さんとして心事大に違ひ恨を呑んで瞑目せられし事を諒し、其遺志を万世に伝へられん事を請ふ、

大正十三年　　森友諒識

西南の役の五十年祭を迎へて

星霜は夢の様に移り行き、月日矢の如く流れて已に五十年、その昔西南の役を追想し転た懐旧の情鬱勃として禁じ得ないものがあります、七十有余の今日迄空敷生に憧憬れて来た私は戦歿諸氏の英魂に向ふとき、只に慙愧に堪へないところであります、茲にその五十年祭を迎ふるに方り、当時一個人として経験したる出来事の一端を叙述し、聊か以て戦歿諸霊の神前に供せんとするものであります、而して是が仮初の慰めともなり、将又地下永遠の冥福を弔ふことの一助ともならば此の上もなき満足であります、

扨て西南の役を溯る数年前に私は単身上京し、当時芝新錢座にありました海兵隊に志願して軍務を事としてをりましたが、偶此の海兵隊なるものが明治九年に廃止となり、止を得ず同年の十月に郷里鹿兒島に向て発足しました、此頃西郷隆盛は已に征韓論の容れられない為めに奮然鹿兒島に引揚げていた際の事であり、其当時人心は極

めて動揺してをり、今にも事起らんとする有様でありました、私は前に海兵隊にある時軍曹の職にあつた、旁々軍隊訓練に経験のあると云ふことから、帰国早々私学校種子島分校の幹事に推挙されたのであります、ところが此時は風雲啻ならない折の事とて、私学校へ入校を希望する者が甚だ多かつたのでありますが、万一を控へたる折の事とて濫りに之を許可することは出来ず、此時の者は一々検査したのであります、

愈明治十年に戦争が始り、仝年の二月に南洲軍は東上を企たのであります、処が熊本城に鎮台があり之を陥れての後にあらざれば甚だ困難なので、先づ之を攻撃することになりました、時の鎮台司令官は谷干城でありました事は申す迄もございません、そこで此熊本城包囲の目的でどし〳〵と軍隊を繰り出したのですが、丁度先発隊が此地に到着して三日目に私共は熊本に着いたのでありました、夫は軍の編制や跡の色々な準備の為めに遅れたのでありました、熊本に着いた頃は已に先発隊に由て城はすつかり包囲してをりました、此中に官軍は屢々城中よりなだれ出る、之を喰ひ止める為めには長六橋或は本妙寺山等に於て戦ひ、始めは家にをりました、斯くして先づ持久戦の様な状態にあつたのですが、恰も三月二十日に黒田清隆の率ゆる官軍が海上より八代方面に向つて上陸するとの報道があつたので、早速此の方面へ若干の兵を差向け其防禦に当ることゝなつたのであります、丁度私も此の中の一人に加わつていた訳であります、砂川に於て官軍を迎へたのでありますが、戦将に酣ならんとする時に至て我軍の両翼が伍を乱したので、正しく敗戦し退却するの余儀なきはめとなりました、敵軍を背後にひかへて退却して行く、それは実に悲惨なものであります、其処でなるにまかすべく決心して居るものゝ、人間と云ふものは矢張本能的に生きたいと云ふ心は常にきざしてをるものと見へて、平常ならすぐに疲を覚へる脚部もこんな危険の場合には決して疲は感じないものであります、味方は散り〳〵に退却してをりますと、行く手に不図も折悪しく一筋の溝が横わつてをります、其はまるで田とも流とも判明のつかない泥溝だつたのであります、其際の事でありますから一も二もなく其中へ飛込んだのであります、処が殆んど胸の辺までの深さで泥ときていますから、丁度型にても嵌められた様に身を縛られて一寸の動きもとれなくなつたのであります、此時こそは必ず敵

の勝手に甘んじなければならぬものと心にきめてをりました、すると不図も彼の堤の方から鳥渡銃床が差し出されたのであります、此時こそは夢心地にて全く神様の加護とばかり必死となつて夫にすがり付いたのであります、之で漸くの事に苦痛や恐怖の域から脱する事が出来ほつと息を吐いたのですが、何を申しましても泥土が漆の様にべつたりくつゝいて居る為めに其重さに耐へず充分な歩行がでけ兼ねたのであります、其処で地を這ひ或は転ひ辛ふじて一筋の流に辿り付いたのであります、茲で漸く土を洗い流し身も忘れた様に軽快になつたので、これから大河平と云ふ分隊長の下に急いだのであります、到着して見ますれば、分隊長も多少負傷してをり、残兵は僅に五十幾人を越へない位でした、此の勢では到底逆襲を試みる事も出来ないので、本営に向て援兵を請ふことになり、協議が極まつたので私が其使者として行く事になつたのであります、

其処て私は直に本営をさして急いたのてあります、丁度此の時本営にわ二本木と云ふ処にありました、着剣の歩哨に導れて営内に這入りました、奥庭を南に控へたかなり寛ひ座敷には西郷大将を中にして桐野と永山の二人か控へてをります、そこて私は三氏の前に進んたのてあります、処か永山氏か突然何にしに来たのたと鋭く叱り付けたのてあります、そこて私は件の退却の顛末を報告し援兵増派の旨を願つたのてあります、処か重ねて桐野・永山の両氏から叱言を蒙り、加ふるに私をして割腹せよと命せられたのてあります、此時に初から西郷先生は一語も発せられす中央に座を占めた儘、奥深く力あり人を射る様な眼をじつと据へてをられた、此時云ひ知れぬ威厳の感に打たれ、私の頭わ自然ずつと下つたのてあります、慥かに先生こそは当時の偉丈夫てあり、今日と雖とも斯の如き人を見ることは到底出来ないのてあります、

割腹すへしと申し渡された時、私は使命を全ふせすして徒に生きなからふも武士として本懐ならすと深く死を決して奥庭に通ふたのてあります、けれとも又切腹わ許されなかつたのてあります、永山氏は再ひ口を開き私に告くるに、既に切腹するに及はす、速に本隊に帰り負傷せるものと雖歩行に耐へる者わ率ひて戦場に向へ、而して万一是に応せざる者あらは容赦なく斬り捨てよとの事てありました、此時こそわ一度割腹せよと申渡された身てあり、此儘生きてはいられす再度の戦争てわ必す死すへ

き事を覚悟して分隊長の下に引き帰したのてあります、そこて命令の顚末を復命したのてあります、

此以前に我部隊は官軍か必す通過すると目していた或山道を擁して纍深く塹壕に身を潜めて時の至るを待てをりました、此時は勿論咳一つすることも出来す腹の虫を殺して構えていたのてありますか、夜も更くる頃其山の頂に烽火が上るのてあります、そこて吾々わ吃驚し是はてつきり官軍に先を越されたと思つたのてあります、そこて一刻も猶予せす未明の中に此地を退却し様と思つてゐる内に夜は明けてしまつたのてあります、止むを得す松橋町の方へ向つて進軍し、此処て図らすも千余の援兵に会し、之て漸く力を得て気勢一時に揚り更に進軍したのてあります、一条の河を隔て敵と対峙し愈々交戦状態に這入つたのてあります、尤此の様な陣容にある時は、川を早く渡り橋を占領してをく事か必要たつたのてすか、既に敵に先を越されてゐたのてあります、

此戦ては我軍わ殆んと必死となつて奮闘を続けたのてすか、其内から百幾人の兵を選んて河尻(川尻)の方へ廻し、此処から敵の側面攻撃を始めたのてす、此時こそはまるて数珠つなきに僅か数弾を以て幾十人となく斃すと云ふ様な奇切(功)を奏したのてあります、此勢を以て益々敵に肉迫して行つたのてあります、為に敵軍は隊漸く乱れて吾軍の勝兆わ愈々闡明となつたのてあります、私は丁度此側面攻撃に加へて指揮をしてゐたのてすか、愈々肉迫戦となつたので吾には抜刀にて軍中に斬り込んたのてあります、暫くは入り乱れて互にしのきを削りてゐたのてありますか、其中に敵の一人か突然私の正面から組付いたのてあります、そこて私は彼の髪を掴んて引き寄せ一刺にする積りたつたのか、肝緊(腎)な刀か彼と私との胸間に挾さまつたのて其自由を失つたのてあります、彼を組伏するにわ私の身は余りに疲れてをつたのて、無茶苦茶に刀を鋸引きにして遂に敵の頭部に傷つけ其場に斃したのてあります、私も亦力か尽きて彼の上に折り重なつて斃れたのてあります、此時夜わ既に深更に入り辺りは寂として何物の声もなかつたのてあります、暫くして吾に帰つて見ると胸のあたり一面さなから油を流した様な触感に之か敵の鮮血てあることを知つたのてす、然し自分も慥に腕を負傷してゐたのてあります、味方の一人かとも思はれた位い頼母子く手厚き看護をしてくれた人かあつたのてあります、夫は此土地の農夫てありました、彼は木皷(番)て直

く其町の川尻病院に運んてくれました、此処て親切な看護の下に幾日かを送りました、後に聞く処に依れは其折看護に当つてゐた婦女は此町の娼婦たと云ふ事てした、然し彼等の日頃の生活に似す至て忠実に我々を取扱つてくれた事は感する処てありました、

旬日の後我軍敗戦の報を是の病院て耳にしたのてありました、夫は我軍利あらす、各自自由に退却すへしとの命令てありました、愈又此土地をも去らなけれはなりませんてした、傷は全癒した訳てはなかつたのてすか、急に此土地を発足して木山村(益城町)と云ふ処に移つたのてあります、此時看護してくれた女たちは名残惜しけに何くれとなくいたわり遠くまて見送てくれたのてあります、然し又此土地にも久しく居ることはでけなかつたので、更に日向の方面に向つて落ち延ひたのてあります、

途中奇怪な説の様てすか、野狐の戯に会ひ行く手左右に沢山な燈火か点せられたのてあります、勿論人家のある様な処てはありませす、人の気も全くなき処にこんな珍な現象を見たのてありました、此は全く敗北を以つて全部を蔽はれてゐる私の心にふさはしき対象として、敵宮のある如く見せかけし業にはあらさるかとさへ思はれたのてあります、途中人里もなけれは木の下草の根に露をさけた事も幾夜なりしかを覚えません、昼を夜に次きて漸く椎葉山五家山の方面まて遍れたのてあります、此辺りの一帯は昔平家の落人が余生を此処に送るへく住みなした地て、今も其子孫に依て此村はみたされているとの事てすか、非常にそこて吾々にわ味方してくれる者たとして歓迎されたのてありました、此土地に留る事暫くにして傷も漸く全快に近ついたので、愈出発の準備をして之から鹿児島城下を指して下つたのてあります、勿論夫は味方の形勢を知る為めてありました、

暫くして後薩州軍わ愈城山に引揚けたと云ふ噂を聞きました、又官軍の警戒は厳重になりましたので、久しく隠ることも出来なくなり、遂に此土地をも退かなくてはならなくなつたので、商人の装に紛して武と云ふ町まて行つたのてあります、此町ては元西郷先生の菩提寺なる最上院と云ふ寺の住寺(持)か今は還俗して一個の商店を経営している同名最上院と云ふ人かありました、此人の所に立寄つたのてありますか、彼の忠告に因て一先つ此屋の床下を借りて身を潜めたのてあります、偶官兵か此店を訪れて縁側に二十人許りざらりと腰を下して種々の取沙汰

をしてをりました、此間の苦しかつた事は前に御話した嶄濠(塹壕)の中より更にひどかつたのであります、官軍の去るのを待て此処を亦出て佐多の岬に行き、之から船を借りて種子島に渡つたのは五月半過ぎでありました、

処か毎日の様に官軍の降服を迫る事が急てあり、又当時此地に来てゐた綿貫警視等も盛に私等を説いたのであります、然し味方は現に城山に在て戦ふてをり、私等のみか官軍に降ると云ふ事か如何して出来ませう、此難関を避くる為めに、又もや安城山と云ふ山に身を隠し、大木の横はつてゐるのを屋根として、少しはかりの構へをしつくらひ雨露をしのきつゝ幾旬日かを過してをりましたか、遂に味方に利なくして再ひ本陣に帰りて戦ふの期も来すに城山は落ちて仕舞つたので、詮方なく官軍に降服してしまいました、

是て先つ一通り御話したのてありますか、単に逸話的のものとはならす自叙伝の様なものに終りましたか、私には余り変つた出来事もなく、目醒しき働きもなかつたのてあります、斯くして西南役は終りを告けたのてありますか、此時知友の多くは皆戦死して仕舞ました、私には死ぬる時は幾度も与られたのてありましたか、只た討死するの外徒に犬死に終らんも本懐とする処にあらすと思ひ、時の至るのを待つ中に遂に死の期を逸して仕舞ひ、惜しからぬ命を今日まて存らへ奇特も五十年祭を迎ふるまて寿あることは、又私をして何ものかを意味せしむるものとなるのてはなからふかと思ひます、時を同うし行動を共にしたる諸君の霊を弔はんとするに方り、只管に往事を懐想して涙更に新に感慨無量てあります、劣なき筆に任せて当時の一端を記し、此日を卜して永く忠魂に酬ひんとするものてあります、

大正十三年二月十二日　　田上貞質識

西南戦争ノ話

我隊は四番大隊の八番小隊にして、小隊長峰崎半左衛門、半隊長石上萬右衛(神)門(門脱)、分隊長大山精之助(越)氏なり、明治十年旧正月三日鹿兒島を発し、東廻(大口筋)りにて仝月十日熊本着、先発隊は已に戦端を開始し、鎮台兵は市内へ放火し籠城せりと聞けり、依て我兵漏なく取り囲み我隊は近き部落に其夜を明し、十一日木之葉(玉東町)に開戦の報を聞き、高岳に上り横合より発砲突進、鎮台兵は大敗して退却、我隊は植木に引き揚げ一泊、翌十二日山鹿へ到着、此日の戦争

にて半隊長戦死、川上宗一郎氏半隊長となれり、十三日南ケ關へ向け出発の途中、向ふ坂（植木町）に於て野津将軍の引率せる兵と衝突大激戦、互に其場を去らず、仝十四五日頃我兵少しく後方なる上原とか鍋田（山鹿市）の原とか云ふ岳に台場を築き、双方睨み合ひ昼夜の別なく砲戦時々互に挑戦一進一退、我隊此地に居ること廿六日間、夫より熊本方面に向つて出発の途次、植木にて鎮台兵と衝突、激戦の末敵兵百五六十名を切倒し、死体は山をなし血は川をなすの状態なりし、此地を去て田原坂の応援をなし他隊に交代、熊本に至り明後橋（午）の守兵となり此地に居る廿四日間、然るに伏見之宮殿下川尻を破り安正橋（政）より城内へ入御、城内よりも出兵し処々の囲を破られ、我兵止なく囲を解き後方に退却、我隊は竹宮（健軍、熊本市）に引揚け二三日間対陣の処隈府方面敗軍、我兵の後方なる木山に官兵突進、遂に木山引揚と云ふ大困（麓）戦をなし、馬見原（蘇陽町）・矢邊（邨）等を経江代（水上村）と云ふ小部落に泊し数日を経たり、

是に於て我軍部隊の編制変をなし、我隊は奇兵十一番となりて、宮崎県富高（日向市）新町に出て細島（日向市）に一二日を経延岡に至り、又処々を経て豊後の竹田に着す、此地に報國隊なるものを組織し、我兵に応し為めに多少勢を得、当地より下ノ關へ向はん為め四五十名位を先発せしに、鳥越と云ふ小部落に於て官兵と衝突、日夜の別なく十数日間激戦ノ処、後方を破られ止むなく同地を退却、東海岸の佐泊（伯）に出て臼杵に向ふの途上、峰の市（三重市、三重町）にて官軍に応したる臼杵兵と衝突激戦、我兵大勝を得臼杵旧城趾に追窮為めに海中に投するあり、射殺せらるゝあり、八百名と云ふ兵員皆無の状態なり、此地に在る事四五日、亦戦利あらす、津久見を経長井村（北川町）に退却、仝地より三四里余の椎畑（北方町）と云ふ山奥の銅山ある小部落に数日間滞陣中官兵来り激戦、我兵利あらす引退、長井村を経延岡へ向け進発の処、其附近の田甫（圃）にて全兵死を決し一大激戦、遂に亦々長井村に退却す、

旧七月九日晩官兵の守備忽かせなる断岸絶壁の険地より竊かに脱走を始め、我隊其地に着せしときは夜已に明け、官兵の知る処となり一斉射撃を受け、我亦応戦せんとするも弾丸悉く尽き、一両日前より兵糧続かす脱走する能はさる我兵は官兵に降りたるも、仝隊なる上妻休造・大山力之助・拙者並報國隊の分隊長と鹿児島市西田町の某都合五名、夜に乗し脱走を申合せ中の処、官兵の捜索厳重身を匿くす余地なく、為めに銃器帯刀を其場に置き遺

憾の涙を呑んて降服せり、

官兵来りて我等に縄を掛け延岡へ護送、翌日より大阪の農兵並巡査の護送にて宮崎町に着、旧七月十六日宮崎裁判所に於て自宅謹慎の宣告を受け、当日放免となれり、

河内英藏識

西南の役従軍実記

吾人は三番大隊六番小隊に編入され、小隊長町田權左衛門、半隊長長崎金兵衛、分隊長大中源之丞ニして、明治十年旧正月四日鹿兒島を発し、西廻り市來港に一泊、阿久根に一泊、出水に一泊して水俣に出て、夫より三太郎峠を越へて日子(日奈久)を経川尻に到れは、数多負傷せる加治木兵に邂逅し、始て已に兵火を交へたる事を知り、急行して熊本迎町に出て一戦をなし、応援の為め植木向坂に赴き、此処にて近衛兵と交戦し大捷を得て、敵兵の死骸二百八名を埋葬し、銃器は悉く分捕して我隊のミニヘル銃に代へ我隊は皆針打銃となれり、夫より熊本に引返し出町に留ること約三十日なりしか、敵の兵線川尻より熊本城兵と連絡せるや、

我隊は長峰(熊本市)に引揚け一戦をなし、木山に留ること五日にして矢邊に到れは数多の婦人躍り来れり、一驚之を熟視すれは、味方の壮士二十名余にして士気を鼓舞せん為め女装をなしたりとのことなり、夫より實(馬)見原を経て椎葉山を跋渉(渉)中に於て、外皮は蕎麦にて製し内部のアンは栗を用たる天下の珍品なる饅頭等にて空腹を満たし、江代及人吉に出たり、

是に於て我隊は正義隊と改称し、桐野氏の護衛兵となり、再ひ椎葉山に赴き三田井(高千穂町)に出て男山・鏡山(五ケ瀬町)にて交戦二三回、此地に留ること廿日、夫より中村(日之影町)に向ひ簞司峠(丹助岳、日之影町)にて鹿狩をなし軍中の慰安をなせり、

其後首木(北方町)に於て激戦あり、敵の砲弾破裂して砕片我帯剣に飛来り、鞘は破壊したるも刀身には異条(傷)なく、臀部に多少の負傷をなしたるのみなりし、其際我同隊なる某には敵に背を向け逃走したりとて、直に捕縛され切腹を命せられたれとも自ら果す能はす、依て我隊長介酌(錯)をなし斬首したるに、恰も円荷の破裂したる如き音響をなせり、夫より十日を経今村に到れは大滝あり、飛沫進路を遮り時已に六月なりしも猶寒冷を覚へたり、時に六十余歳の老翁ありて、呑気に鳴子を持て害鳥を追放し、其下に甲の回り一尺五寸余の蟹を瞥見し、実に一驚を催し、山谷

僻地の状態優々緩々世間知らすの高枕なりし真味を悟りたり、

松山を経て延岡に到れは、無数の婦人歓迎をなせり、是わ鹿兒島より傷病兵の看護婦として病院へ出張せるものなりとの事にて、其辺の谷間を瞥見すれは降服旗を掲けたる病院あり、

依て此地防備の策を講せんとて此処を巨る一里余なりし高岡に馳せ昇りたれは、軍艦より発砲すると共に激戦となり、我軍利あらす味方散乱せしを以て私には已を得す藪中に隠匿したるに、日没となり、其夜は月明にして炬火無数、敵か味方なるかを弁せさるも幾万の兵員往来をなせり、而して単身其夜を過すも心元なく、六時比其藪を這出て浜辺に達せんとする時、東天已に明け敵兵は其地を固守して頻りに発砲せり、其際四五の兵員に会合し猶進めは味方らしき数十の兵員あり、依て敵味方を確めん為め、何処より来りしかと尋問したるに、答弁の語鹿兒島県人にあらさるを以疑訝に堪へす重ねて其部隊を確めたるに、二階堂と称し先年西郷先生に随伴し東京より来りし人なりしこと判明となり、初めて安堵したり、

而して我軍は遂に長井村(北川町)に包囲せられ、豊後口・鹿兒島口、熊本口とも進路なく絶体絶命為す処を知らす、是に於て長井村切り抜けの報知ありたれとも、士気は沮喪して奮戦する勇気なく、正義隊の傷兵抔はギュ〳〵不思議(驚)の声を立て割腹するあり、吾等も図らす深谷に陥りたれは、這登るへき路なく山中に留ること二日、全く絶食し、敵の弾丸は頭上を掠め進退茲ニ極まり、六百の我党降服するの外なしと協議をなし、白旗を振り上けたれは、官兵は天幕を張りて休憩中なりしか指揮して曰く、然らは武装を解除せよとて、直に米飯とカマスの肴を与へたり、夫より我党六百人を数珠繋きにして、食糧を負はしめ延岡に護送されたり、此処に於て西郷先生には如何なされたりやと問へは、三隊に分ち鹿兒島に向はれたりと聞き、時は恰も旧盆会にして転た無限の感慨に打たれたり、夫より高鍋を過き宮崎県庁に到れは、降服者夥多にして巡査之ヲ裁判所に引率す、判官問て曰く、官軍に抵抗したるは如何にと、答曰く、吾人は西郷東上の供奉に過すと、又問て曰く、然は発砲せしは如何にと、答曰く、是隊長の命なり、何れか官何れか賊なりしかを知らさりしと、右問答を了へ扣所に留ること暫時にして、又法庭(廷)に呼れ無罪放免の宣告を受けたり、

右吉留熊次郎氏の従軍実記断片的なりしを綜合して講話の一章となし、玉川招魂五十年祭に於ける英魂を慰せんとすると共に、後進青年者の参照に供せんと欲したるものにして、意至て筆随はさるの嫌はあれとも、文飾を衒はす専ら正鵠を主としたるを以て、事実に於ては寸毫も差違なし、読者幸に之ヲ諒せられん事を乞ふ、

森友諒識

西南の役従軍実記

吾人は二番大隊二番小隊に編入され、小隊長中島武彦(健)、半隊長大隈正蔵氏にして、明治十年旧正月三日出軍の号砲響くや、吾同伍鎌田某突然疝気を起し戦栗(慄)せしを以て其旨届出をなしたるに、然らは代人を立よとの事なりし、依て直に種子用場に赴き、銃器不足の為め従軍に漏れたる諸氏に之を相談したるに、河内某抵身曰く、吾人代らんとの事なりしを以て大に満足し、吾同伍に組込み本隊と共に出発し、東廻りにて加治木・横川・大口・水俣等エ宿泊したる後川尻に到着したれは、熊本城兵一小隊位来り放火せんとするの風聞あり、依て直に立附をなし其夜は松橋に潜伏し、翌十日花岡山下の田甫(圃)より熊本城に掛りたるも何等の効果を奏せす、十一日暁天向町に引揚け其晩植木に赴きたるも、城兵と連絡せんとしたる官兵は已に退却したりとの事にて、其翌朝熊本に引返し、十三日より廿日迄川尻亀崎の出入船舶取締をなせり、

廿一日田原坂に赴き廿二日大激戦あり、夫より互ニ一勝一敗、台場を築きて対向し、寸隙あらは肉迫せんとする形勢なりしを以て、昼となく夜となく風雨に関せす台場中に伏せ、兵糧は夜暗に乗して運搬せり、然るに廿九日暁天官軍大兵を卒(率)ひ進軍喇叭にて突撃し来りたるを以て同処を退却し、夫より植木に向ひ切込を試みたるに大捷を得、血は流て川をなし、骸は積て山をなす有様にして、敵の損傷数千人に及へり、而して旧二月一日には米俵或は麦俵を以て台場を築きたるも、敵弾容易に貫通し其用をなさす、故に畳を以て之を改築し廿一日迄滞留せり、

同日同伍川内某戦死せるを以て熊本二本木に護送し、廿二日切込をなし、余り深入りの為め敵弾三方より飛来し、同伍鎌田某速(即)死せるを以て又々二本木に護送し埋葬をなせり、

夫より連日接戦をなせしか、三月三日には同地を引揚け

熊本城東の保田久保(窪)に切込をなし、恰も鋭鎌を以て芋柄を払ふか如く、我島出身なる押伍日高休助氏は慥に敵兵三人を切り倒されし事を認めたり、如此大勝利を得たるも故ありて四日同地を引揚け、或部落にて休憩中、官兵一小隊位なりしも突然襲来したるを以て、我兵狼狽逃走して我伍長町田彦七氏は足部に負傷を受け、漸く其場を逃れたるも数百歩にして全く徒歩不可能となれり、依て今日迄上官として崇敬したる某を放任する訳には行かず、弱腰なからも同人を背負、此処を巨る約十三里と唱ふる矢邊(部)に向て進行せんとするも寸進尺退、遂に暗夜となり空腹を感せり、是に於て町田氏曰く、余は切腹の決心を為したり、君は速に去れとの事なり、然れとも必死の人を残し其場を去るは、男子の潔とせさる処なりと考へ、之を慰めつゝ躊躇しをる際向より跫音あり、是れ定めて敵兵ならん、然らは此処に於て共に死を決せんとて路側に潜みて其挙動を窺ひ、愈接近するを待ち、兼て定めありし味方の暗号郭公と呼ひたれとも、其答弁要領を得す、益之を訝り更に問返したるに、同人等は味方の為め荷物を矢邊に運ひたる人夫にして帰家の途中なりしこと判明せり、是に於て大に安堵し、謝金は何程にても惜まさるゆへ、吾等を同地に護送せよと頼みたるに、彼等曰く、朝来断食にて空腹なりしを以て其事は不可能なりとの事なり、依て此近処に於て食事の仕度をなす人家はなきやと問ひたるに、是より後方一里位ニして四五の人家ありとの事なりせは、此処まて万難を排し通過したる進路を引返すは如何にも遺憾落胆の余りなりしも、已を得す後方に向ひ進行中又々向より人馬の影微かに見へたり、之こそは敵ならんと思ひ、狼狽して郭公と暗号を掛たるに、振武四番と答たり、是ハ我か隊名なりしを以て大に安心し、何用ありて何地に行くやと問へハ、右は駄馬二頭を雇ひ負傷兵二名を矢邊に護送中の喇叭卒なりし、是に於て互に名乗り合ひ事情を吐露して、先きの人夫は解雇して、馬上中腕部に負傷せし一人の兵には迷惑なりしも徒歩せしめて其馬に町田氏を乗せ、昼夜兼行にて其翌日日暮矢邊町に到着したり、

夫より矢邊越をなし實見原(馬見原、蘇陽町)を経て椎葉山に入り、例の釣橋を通過して、江代(水上村)に出て人吉に集合して我軍再興の計画あり、我隊は鹿兒島に進軍し、十三日晩玉里屋敷に休憩して、其夜深更に至り白鉢巻の装をなし、城山に切り込みたるも応援続かす、小人数なりしを以て引返し、夫

より夜間西田・武・荒田を経て天保山に屯し、暁天干潮を待て切り込を掛けたるも、敵は柵を引廻し台場を固守して動さるを以て其目的を達するを得す、引返して武・田上・荒田・天保山を引廻し守を附け約三十日滞留したり、

軍中亦慰安の時機あるものと見へ、此時こそは休戦中にして優々(怠)緩々半隊は番兵をなし、半隊は休憩せるを以て、此附近より従軍せし家族は酒を携へ菓子を提け、我親子は如何になりしや、我兄弟は何処に居りしやと訪問頻繁ニして、或ハ酩酊放歌するあり、或は剣舞するあり、日も猶足らさりしか、官兵には竊に軍艦より谷山に兵を廻して上陸せしめ市内守備兵と示し合せたりしや、三月廿八日暁天正面なる高麗橋より来襲せしを以て、之を防禦中後方なる谷山口には火縄銃携帯の新兵にて固めたる為め、寸時にして谷山上陸の官兵に敗られ、挟撃を受けて二本松にて激戦したるも利あらす、武岳に引揚け日暮時(問)の声を上け切込みを試みたるも奏切(功)なく遂に敗走、山田(給良町)に引揚け蒲生に一泊し、此日吾人は押伍となれり、

廿九日には重富にて小戦をなし二日位滞留、夫より國分・福山又ハ都城・志布志等に転戦したり、

五月廿七日志布志に到れは、官兵先きに志布志湾に上陸し、夥多の兵器弾薬を百引に廻し駐屯しをれる事を聞知して、其夜案内者を連れ一面は丘上より、一面は平地より挟撃をなし、続て切込みを試みたるに大勝利となり、分捕品無数、小銃八百挺・弾薬四百駄・大砲四門其他、医士(師)四名・人夫四十名を生捕にし、分捕品は其人夫をして運搬せしめたり、

吾隊は数回の激戦に於て死傷夥しく、悉く補充されたる新兵となり、古参の兵は僅少となりしを以て、市来藤次郎氏と共に指揮号令をなす事となれり、

五月廿八日吾人は右脛を射られ卒倒したれは、一時間位を経て同隊兵二人来り、腕を握りて畑の土手下に引下し、夫より人夫二名にて戸板に載せられ、其晩は或茶屋の軒下にて雨を侵して夜を明し、翌日都城の病院に送られたり、其時渇する事堪へ難くして水を求めたるに、其疵は鉄砲なりしや、刀剣なりしやと問はれ、鉄砲なりと答へたれは、夫なら差閊なしとて許されたり、六月八日山口を経て延岡に到り大恩寺の病院に収容せられ、傷病者三百二十八名、外に学校の病院には五百人位の傷病者ありし由、是日我兵には末吉にて敗戦したりと聞り、

我兵は富高(日向市)新町にて小戦したる後、長井村に引揚たれは、官兵は直に延岡に攻入り、病院には初め官兵五六名来り、引返したるを以て此際降伏するか是乎、切腹するか非乎、

若し殺さんとする模様あらは先立て切腹せんと覚悟を極めたる時、又官兵三十名位来り、武器を出せとの事なりせは、一同は帯剣を残らす呈供(提)し、頻りに助命を請ふたるも、吾人は万一の用なりとて刀を密に懐に抱きたる儘平臥し、三日は之を保管し後其寺の住職に依托したり、最病院には其三日前より医士(師)は逃走して、老夫二名へ看護を任せ、飯は全部に玄米弐升を渡され、死者は其儘に附しあるを以て臭気云ふ可らす、其後官の病院となりて手当も付き看護も届きたり、

夫より延岡出張裁判所に呼出され、式の如き取調を受、八月中旬に至り足稍立つこととなりたるを以て島浦(延岡市北端)に流罪され、更に同所裁判所に呼出されて、九月十六日放免の宣告を受ると共に、巡査に守護され宮崎支庁に引継となり、同庁より金拾円余と左の辞令書を渡されたり、

大隅国種子島郷士族

芝　喜惣次

右之者降伏負傷者ニ付、延岡臨時支病院へ入院、平癒之上今般釈放相成候処、廃疾となり歩行難出来ニ付、宿継を以て原籍へ及送附候条、宿駕籠壱挺人足弐人半壱人壱里金七銭之積を以て本人より賃金申立無滞継立可申、且賄料之義ハ一泊金拾三銭一昼金五銭宛可申受候也、

明治十年十月五日　　延岡宮崎支庁出張所

延岡より原籍迄

駅々

戸長

其晩は支庁に一泊し、駕籠にて五日間にして福山迄到着、夫より小蒸汽にて鹿兒島に着したれとも旅宿なく、何れ谷山脇田の茶屋まで行さるを得すとの事にて腕車を雇ひ同店に到り一泊し、規定の宿料を支払ふに当り金弐拾銭にあらされは引合すとて女将大に立腹せるを以て、前日来の旅宿にては同情を表し、宿料は要せすとの事なりしも強て支払をなしたりしか、同情のなきも甚しきものなりと感情を害したるを以て、金は持合ありしも規定なりとて拾三銭を支払ふたるに、又曰く、然らは内の子供は鍋商にして種子島にも渡航する事往々あり、其際報恩せよとの事なり、依て能く調査を遂けたるに同人は磯次と称し曽て吾隣家に永々止宿をなし、吾家にも度々来り世話をなせしたる事相分り、益其貪慾の甚しきに一驚したり、而して山川に赴かされは便船なからんと思ひ、駄賃を雇ヒ行々聞合をなしたるに、果して山川に便船あり、

夫を待ちをられし旦那方もありしとの事にて大に力を得谷山町外に至りたる時、傘を手に持ち長羽織を着したる人あり、先方より我名を呼へり、能く熟視すれは先きに矢邊(部)に於て身命を屠(賭)して世話を為したる町田氏なり、是に於てか暫く相互間の経歴を話合ふたる後、今回は恩返の為め拙者種子島迄護送せんとの懇請ありしも、固く之を謝絶したれは、他日出麗の時ニは必す家鴨馬場の自宅を尋ね呉よとの謝辞ありて相別れたり、夫より揖宿湊に到りたれは、共に死生を誓ひ我島より従軍せし杉崎佐太郎・桑山周八・長野只江・森友諒の四氏に邂逅して互ニ往事を語り、将来を談して大に満足を表し、日ならすして共に帰島したり、

夫よりは何の仕事も手に附かす、只日暮の徒然さに戦争中の実地経歴を左記の数歌に作り、童蒙女子に示すと云ふ、

数歌

一とせーとのよのー人は道義か第一よ、「西郷様の学校にこんもをふしやはいなー

二とせーとのよのー冬の寒さもいとやせん、吉野原て腕ためし開墾しやはいなー

三とせーとのよのー未練不覚のないよふに、老も若きも勇み立つ時勢しやはいなー

四とせーとのよのー世の中よいよふ立て直し、朝鮮取て支那打も薩摩しやはいなー

五とせーとのよのー何時まて此処にをるはつか、早く出張りに御江戸迄旅立しやはいなー

六とせーとのよのー無理よ正月雪の中、十四五六の若武者も出陣しやはいなー

七とせーとのよのー何の役目もみな止めて、西郷大将護衛とは剛気しやはいなー

八とせーとのよのー焼けてのこるは城はかり、立ち退く人は西東笑止しやはいなー

九とせーとのよのー此処は熊本城の前、戦端開くる大砲の響きしやはいなー

十とせーとのよのー突貫すれは逃けこもる、城を囲んて兵糧攻め英気しやはいなー

十一とせーとよのー いさ植木田原坂にと繰り出し、勝ては官軍そらそうしやはいなー

十二とせーとよのー 二月末まて戦ふて、二万はかりの敵味方打死しやはいなー

十三とせーとよのー 三月始め鹿児島に帰れは、最早占領され大辺(変)

しやは
いなー

十四とせーとよのー　暫らく台場を守るのみ、軍なければ楽なもの
慰安しやはいなー

十五とせーとよのー　五人三人今日も来て、子やら夫の伝り聞く涙
しやはいなー

十六とせーとよのー　どこが居所やら定めなく、往き来さまよふ人
はかり哀れしやはいなー

十七とせーとよのー　広ひ鹿兒島皆焼けて、見ゆるは藤安酒屋のみ
ふしきしやはいなー

十八とせーとよのー　はげしき軍は武の岡、遂に引揚け跡を見て残
念しやはいなー

十九とせーとよのー　暗ひ夜明けに百引町を、囲んて切り込む大勝
利愉快しやはいなー

二十とせーとよのー　二方面より敗れ来る、兵は籠りて長井村降服
しやはいなー

右芝喜十郎氏の実歴談にして、大正十五年三月廿八日弊屋を訪問され、午前九時より午后四時に至る迄、昼食を忘れ参考書を繙き、西南の役に関する経歴を、細大洩さず快活に勇壮に縣(懸)河の弁を振ひ、叙へられたりしを随聴随筆し、単に其条項を逸し事実に違はさらん事を専一として、文章の流暢温雅を欠きたるは遺憾の至りニ堪へす、殊に数歌の如きは愚見を加へ、多少修正をなしたるを以て歌曲の譜に合はさるの点はあるかなれとも只た其事実を述へるのみ、幸に今回挙行さる玉川招魂五十年忌大祭に臨み、戦歿諸氏の英霊を慰め、且後世子孫啓蒙の一端ともならは本懐の至りなり、

森友諒識

日　誌

平田盛二

（表紙）
明治十年丁丑二月五日ヨリ
日　誌
鹿児島県第三拾大区（弐脱）三小区
東郷　平田盛二

丑二月五日　雨

一今日午前第二時、田海村（川内市）役所出立、当所私学校へ出頭候、尤昨日取納□（済カ）、藏本ェ止宿いたし居候処、出兵報知相達シ否哉、右役所ェ帰リ在役并夫卒共ェ、諸都合申渡シ出頭候事、

同　六日　雨

一今日モ同所止宿候、尤所手当金ヲ以賄等之事、

一自身当職代理実父ェ□（引継カ）置候様致承知候故、一時暇いたし、実家ェ帰リ祖母・実母・類家中ェ見廻シ、夫ヨリ右次渡として田海村役所ェ参リ、午後六時ニ及テ着シ、実父ェ面談、諸帳面及諸届□（遣渡、夕食カ）相喰ミ、夫ヨリ仕夫壱人召列レ私学校ェ出頭候事、

一校費銭ノ内ヨリ銘々五円ツヽ、引渡シ相成候、

丑二月七日　半天

一今日モ当所止宿、尤他県ヨリ入来人員且不審之者ハ取押候様向田警視化（分カ）所ヨリ承知いたし、当校ヨリ手配候て、正午時分諸端々ェ着手候事、

一今夕瀬口容堅殿所ェ遊ニ参リ候事、

一本県ェ為報知出頭相成居候高橋正十郎殿、今晩帰区相成候処、自身共鎌田氏・長野氏是迄仮入校ニテ候処、今度本校ェ入門被仰付候、尤自身組合木脇清・長野祐章・鎌田常富候事、

同　八日（旧十二月廿六日丁ル）　雨

一今日モ当所止宿候、尤弟藤太夫、水引之新田神社ヘ参詣之由、御守并旧改年之祝餅、家内ヨリ送来リ相喰ミ候事、

一東郷ヨリ私学校ェ加入人員左之通リ候事、

	相良正吉郎	手負	三原雄輔
手負	三原情四郎	手負	緒方惟貞
戦死	高橋正十郎		村松傳右衛門
	瀬口武二		市來助之進

戦死　東郷隼人
戦死　西牟田才之丞
緒方直之進
西俣六郎太
戦死　神川正之助
戦死　佐藤眞信
阿久根源兵衛
中村宇左衛門
川添彦五郎
長倉英治
吉留仲之進
麻生正兵衛
中村源七
鳥原權之丞
増田彦八郎
戦死　伊東藤太夫
田嶋多郎太
石野田彦太夫
生駒八郎
貴島孫四郎

久松仲太郎
田口彌右衛門
後藤東圓
川添正藏
川添　勇
海江田次右衛門
山口勇左衛門
東郷甚兵衛
海江田勇助
瀬口袈裟七郎
鶴田敬壽
山下市郎兵衛
肥後壯右衛門
長倉榮之助
有川孫右衛門
若松仲四郎
有馬休太夫
鬼塚早左衛門
野間覺之丞
手負　鎌田藤太

西牟田謙輔
野久尾伊才
古川休兵衛
遠矢仲太夫
田代源五
東郷猪輔
木場紋四郎
午田藤兵衛（牟カ）
戦死　桑畑勇次郎
内田良右衛門
早崎慶之丞
宮内直八
緒方正之助
後藤慶輔
山口源兵衛
鳥越重右衛門
小田原甚兵衛
戦死　濱田治右衛門
戦死　濱田袈裟助
戦死　濱田八十一

手負　關　教治
深川正次郎
手負　鳥越雲二
濱田平六
戦死　堀ノ内喜之助
後藤才之丞
重留佐七郎
若松源八郎
川添傳左衛門
山口直次郎
戦死　長野矢九郎
野久尾正之介
長野　篤
内山喜之助
田口利兵衛
戦死　阪元喜次郎
星原藤之進
手負　平田直次郎
戦死　松山□二（輔カ）
戦死　阪元休之進

緒方八十治　小林五右衛門
谷口矢七郎　木場源左衛門
増田正左衛門　伊東彦右衛門
手負　飛松幸右衛門　中原正太郎
内山民之丞　中馬保之助
瀬口　甚吉　山之内喜左衛門
知敷平右衛門　戦死　野崎源次郎
手負　土生武右衛門　手負　阿久根彦兵衛
手負　平峰　喜助　戦死　古川善七郎
崎山市右衛門　比志嶋直次
木脇　清　平田盛二
長野祐章　鎌田常富
合百拾弐名
外ニ　夫卒(ママ)廿五名
惣合　百四(ママ)拾六名

丑二月九日　雨
一今日モ当所止宿候、尤伍列組合等取究方之事、
一町太郎右衛門宅止宿候処、今日ヨリ酒屋四郎兵衛処ヱ転宿候事、

同　十日　半天
一私学校ノ当番ニテ出校候、尤隊中武装相付門出等有之事、
一自身儀、瀬口容堅殿ヨリ仍招ニ参リ候処、門出等之祝ヒニ預リ、神前ヘ御備リ候御酒頂戴候事、
一新田宮ヱ弟直次郎参詣之儀候付、御守札及ヒ守石等頂戴、自身ヱも頂戴候事、

丑二月十一日　半天
一今日隊中年久公(歳)ヱ参詣シ候事、
一下人長次郎、弟藤太夫品物持来、家内ヱ伝言いたし候、自身髪ツミ候事、

同　十二日　雪
一今日東郷ヨリ午前六時出立、午後七時ニ本県止宿、相良家ヱ着、一泊候事、

同　十三日　朝雪後チ半
一今日隊与被仰付候、隊号左之通リ、

自身隊
第五大隊二番小隊
三番分隊
隊長　村田三輔
淵邊彦次

伊知地　賢

藤太夫隊
第四大隊八番小隊
三分隊
隊長　峯崎半左衛門
石神万右衛門
大山城之助
直次郎隊
第二大隊六番小隊
隊長　川上某
竹下九郎
有馬源五郎

一実父ェ出立之日限相分リ、報知書状仕出候事、
一英語学校ェ宿営候処、自身組合丈ハ、問屋ェ引転候事、
丑二月十四日　雪
一今日番兵ニテ、午前六時ヨリ午後六時迄、本校門ェ出頭候事、
一今夕坂元定之丞殿所ェ遊ニ参リ一泊候、
同　十五日　大雪
一今日一番大隊ヨリ二番大隊迄、午前六時ヨリ同八時ニ及テ出隊相成候事、
一自身隊武装検査トシテ、立場ェ御備ヘ相成候付、出頭候事、
一明後十七日自身出立、今日直次郎出立シ、報知トシテ任幸便父方ェ書状仕出候事、
同　十六日　大雪
一弟藤太夫隊、今朝出立相成候事、
丑二月十七日　半天
一今日自身加入之五番大隊午前第七時西目方ェ出隊、市來湊次右衛門宅ェ一泊シ候、尤い十院町ェ小休ミ候、
同　十八日　大雪　雨
一今日午前四時、市來湊出立、向田小休、尤自身実父母・家内・類家内・田海村在役共餞別トシテ岩谷迄出迎居面談シ、夫ヨリ阿久根町縁在家ェ午後六時ニ着、一泊シ候事、
同　十九日　雪
一今日午前第八時、阿久根出足、野田ェ小休、自身儀ハ、同所牧増右衛門ト云ふ人所ェ小休ニ候テ、午後二時ニ及テ出水麓ェ着シ、尤自身儀ハ、同所岡部徳之助ト云ふ人所ェ止宿候事、

丑二月廿日　晴

一今日午前八時出水出立、米津町ェ小休、同所ヨリ乗船ニテ肥後佐敷來迎寺ト云フニ午後六時ニ着シ、及後ニ同所町ェ一泊シ候事、

同　廿一日　晴

一今日午前七時サシキ町出立、同所浜ヨリ乗船ニテ午後六時ニ及テ松橋町ェ着シ、一泊シ候賦候処、熊本城下ェ戦争之催相達シ、午後八時当所出立、宇都（宇土）ニ小休、夜明ニ及テ熊本城下ェ着、直ニ合戦候事、

同　廿二日　晴夕雨降リ

一今日右城ニテ戦争不相止候也、

一夜ヲ込テ引続キ戦ヒ、然処同隊相失ヒ、諸所ェ相尋候処、同県植木ヘ敵兵迫リシ候段ニ付、出隊相成シ候言承リ候事、

一同所ニテ一戦、尤夜戦ニテ勝利、終ニ敵方逃去リ、連隊旗分捕リ相成候由、

丑二月廿三日　晴夕雨

一今日失ヒシ同隊尋方トシテ、本営ヘ参リ候処、前号之通弥植木ヘ参リ居リ、直ニ彼方ェ参リ候様相達シ、午後一時ニ及テ、植木町ェ着シ、尤同隊ニて廿名同道ニテ参リ、終ニ本隊行逢候、夫ヨリ当所番兵等之事、

同　廿四日　雨

一今日モ植木町ェ在陣、番兵等之事、

同　廿五日　晴

一今日午前七時植木町出立、同県山鹿ェ着シ、尤同所ェ敵兵屯集いたし居候段相達シ、打方トシテ我隊取合十五小隊参リ候処、本日ハ敵方逃去シ跡ニテ、同所町ノ井上貞次郎所ェ自身組合ハ一泊シ、午後十一時ニ及テ着シ候事、

一当所温泉ェ入湯いたし候事、

一不図敵兵参リ候段相聞ヘ候ニ付、▨隊相集候得共、不実ニテ直ニ引揚候事、

丑二月廿六日　晴

一今日午前八時当所ェ敵方寄来リ及戦争、正午時分迄相戦ヒ、敵方凡百五拾人討取、残兵逃去、直ニ本宿ェ引揚候事、

一六番大隊、木ノ葉ニおひて及苦戦、已ニ植木迄引揚居候旨、我隊ヲ応援トシテ差出候様、午後五時ニ出隊相成候処、植木押寄候儀ハ不実也、尤当所終夜番兵等之事、

同　廿七日　晴

一今日午前七時植木出立、正午時分ニ又々山鹿ヱ着シ止宿候事、

丑二月廿八日　晴

一今日午前三時ヨリ当所ヱ番兵、同六時ニ及テ止宿ニ引取候事、

一又正午ヨリ番兵、午後六時交代候事、

丑三月一日　晴夕雨

一今日モ山鹿ヱ滞陣、尤午後六時ヨリ同九時迄当分隊番兵いたし候事、

同　二日　半天

一今日同所止陣、午前六時ヨリ九時迄番兵いたし候事、

同　三日　晴

一今日山鹿ヨリ午前十一時出立、ウラ道通ヨリ南ノ關ヱ掛ル賦ニテ出掛、途中ニテ熊本ノ内八町ト云フ処ニテ敵兵相見得一戦シ、終ニ敵方迯去り、午後五時同所十町ト云フヘ着シ、北原ト云フ人処ヱ一泊、尤桑履踏ながら止宿候事、

丑三月四日　雨

一今日午前三時、十町番兵ニテ同六時ニ及テ、由井ト云フ処ヱ敵兵相見得候由ニ付、繰出相成、此処外隊ヨリ一戦有之、終ニ敵方迯去リ午後一時ニ及テ又先止宿山鹿井上処ヱ着、一泊候、尤午後十二時番兵候事、

一番兵之賦候処、相異リ、不其儀(成脱カ)候事、

同　五日　雪雨

一今日山鹿(山鹿市)鍋田ケ原ヱ敵兵相見得一戦シ、尤一時之戦争ニテ敵方迯去候事、

一今日も同所滞陣候テ、午後十二時ヨリ番兵相勤候事、

同　六日　晴

一昨午後十二時ヨリ今日正午迄、同所鍋田橋ヱ番兵之事、

一又午後六時ヨリ同十二時迄前条同断候事、

丑三月七日　晴

一今日モ鍋田ケ原ヱ正午ヨリ午後六時迄番兵候事、

一又午後十二時ヨリ同所番兵候事、

一同所番兵先キニおひて敵方騎兵壱名、飫肥隊ヨリ炮殺シ、所持品分捕相成候事、

同　八日　晴

一昨午後十二時ヨリ今日午前十二時迄、鍋田ケ原ヘ番兵候、又今午後六時ヨリ同十弐時迄同所番兵等之事、

同　九日　雨

一今日モ山鹿雨屋ェ滞陣候、尤午後六時ヨリ鍋田ケ原ェ番兵候事、

同　十日　半天

一今日モ同所滞陣、尤昨九日午後六時ヨリ引続キ今日午後六時迄同所ヘ番兵候事、

一午後六時ヨリ同町紀屋ェ宿替いたし候事、

丑三月十一日　晴夕雨

一今日滞陣候事、

同十二日（旧正月廿八日ニ丁ル）　晴午後七時ヨリ雨

一今日モ同所滞陣、尤昨午後六時ヨリ今午前六時迄鍋田ケ橋ェ番兵候事、

一今午前六時、鍋田ケ原ェ敵方寄来リ、番兵先キヨリ繰出シ直ニ戦争、午後七時迄発炮不止、敵方逃去候事、

一今戦争、戦死同隊隊長村田三助・谷山萩原四右衛門・カゴシマ木原仲之進、手負カゴシマ土師孫市・右同井上謙輔・土持泰輔・四元榮藏・谷山新保東一郎・夫卒一名、

一今終夜戦先キニ、待伏居候、

同　十三日（旧正月廿九日ニ丁ル）　半天

一今日戦場ヨリ同所村郷校ェ引揚ケ、各分隊ヨリ交代ニテ番兵之賦、午前六時ヨリ午後六時迄番兵候事、

一今午後若松源八郎殿ヨリ承候ニ、弟藤太夫儀昨十二日同所岩村（三加和町）ニ於テ戦死いたし候段相達シ、直ニ番兵相頼止宿ヘ帰リ掛ケニ同郷ノ東郷猪輔殿ヘ面談シ、事実承リ候処、右東郷氏ヨリ葬礼旁々等モ取計被給候由相達候、尤山鹿長源寺ト云フェ葬被給候ニ付、若松仲四郎殿ヘも面談同道ニテ墓処ェ参リ、直ニ墓石等注文いたし、手付トシテ金壱円五拾銭入金、残リ弐円五拾銭入ルヘク賦ニ取究、同所花見坂石屋半四郎ト云者ェ相頼、石ヒノ儀ハ左ノ通リ、

一鹿兒島県東郷士族伊東藤太夫墓

一熊本県山鹿岩村ニ於テ戦死

一明治十年丁丑三月十二日旧正月廿八日ニ丁ル

一第四大隊八番小隊

一当年三拾歳

丑三月十四日（旧正月晦日ニ丁ル）　晴

一今日本営守護トシテ、各小隊ヨリ弐名ツヽ、選挙ニ相成、熊本迄出頭候様、同隊ヨリハ自身ト鎌田常富殿ニ被仰付、今午後四時山鹿出立、植木ニ小休、同十一時ニ及テ熊本祇園音山ェ着シ、同所町ェ一泊シ候、

旧二月一日ニ丁ル
同　十五日　晴
一今日祇園音山一時宿シ、午後六時ニ本営日本木(二本木)町ヱ転営
相成、同刻同所町ヱ転宿いたし候事、
一今晩当所番兵等之事、
丑三月十六日　晴
一今日モニホンキ(二本木)ヘ滞陣、番兵等之事、
一各隊ヨリ両名ツヽ出シ、面々只今伍組左ノ通リ、
鹽津正吉・樗木壽一・窪田直介・山田源之丞・平田盛
二、
一右組合ニテ午後四時ヨリ当所近辺宮寺ト云所ヱ転宿候
事、
同　十七日　晴
一今日同所滞陣、尤午後十一時隊組被仰付、名テ狙撃二
番隊ト云、隊長石見半兵衛、自身組押伍窪田直介、伍
長川畑勇八、
同　十八日　晴
一今日も同所滞陣候、尤午後六時ヨリ巡邏候事、
一鬼塚早左衛門殿所ヱ遊ニ参リ候事、
丑三月十九日　晴
一今日モ同所滞陣、尤坂元喜次郎戦死ノ段鬼塚早左衛門
殿ヨリ承リ、勤方ニ午前十時ヨリ出候処、本山村淨勝
寺ヘ参リ候処、弥葬有之、墓拝シ候、尤田原ニテ丑三
月十四日戦死、隊号第五大隊四番小隊坂元喜次郎、勝
軍山淨勝寺ト云寺也、
右之通ニ付、同所石屋ヱ参リ目書等いたし、墓石等相
頼置候也、
一敵兵裏ヱ廻リシ候由ニ付、自身隊差向ケニ相成、同所
午後七時出隊、松橋ヱ着、一泊シ候事、
同　廿日　雨
一今日午前七時松橋出立、小川町ヱ着、同所鏡村ヘ敵兵
見得、番兵之事、
丑三月廿一日　雨
一昨日ヨリ引続キ小川ヱ番兵候処、敵兵相見得、午前七
時比ヨリ相掛リ、午後四時迄発炮、終ニ敵方逃去リ途
中迄追ヒ、尤同所岡ヱ番兵等之事、
一右戦ヱ同隊戦死両名、手負両名有之事、
同　廿二日　晴
一今日モ同所阿彌た坂ヘ宿陣、番兵いたし候事、
同　廿三日　雨
一今日午前八時敵方寄来リ、一時及合戦、及苦戦ニ、午

後四時ニ又追返シ、夜ニ入テ発炮止ミ、終夜番兵等之事、

同　廿四日（旧二月十日ニアル）　雨

一今日午前六時ヨリ敵辺ェ伏込相成、自身ハ南大原ト云フ処ェ伏居候事、

丑三月廿五日　晴

一今日モ同所番兵等之事、

同　廿六日　曇

一今日午前七時敵方寄来、戦争ニ及ヒ、苦戦ニテ午後四時ニ及テ、松橋迄引取候事、各小隊同様、当所番兵等之事、

同　廿七日　半

一今日モ当所番兵等之事、

同　廿八日　晴

一今日当所番兵ニテ候処、午前七時敵方寄来リ及戦ニ午後三時比ニ及テ敵方逃去リ、猶番兵等之事、

一同郷鎌田常富今日深手負被致候事、

丑三月廿九日　晴

一今日モ曲野（松橋町）ェ番兵候、尤今未明ニ敵方寄来リ発炮シ候ニ付、各隊伏場ヘ伏込候得共、終ニ不寄来候、猶又扣場ニ引揚候事、

同　卅日　雨

一今日午前七時敵方寄来リ及戦ニ、午後七時ニ発炮相済ミ候、苦戦ニテ味方相応之手負、戦死等有之、当所終夜番兵等之事、

同　卅一日　半

一今日午前七時及戦争ニ、極苦戦ニテ午後四時比ニ及テ宇都（土）迄各隊引揚相成候事、

丑四月一日　晴

一今日川尻手前ニテ午前一時ニ及テ各小隊ヨリ拾名ツヽ斥候差出相成候処、当斥候ェ発炮シ、同八時比発炮相止候事、

一午後一時ヨリ同所出足、川尻ェ各小隊引揚、同所番兵等之事、

丑四月二日　雨

一今日モ当所ェ番兵等之事、

一同県ヨリ兵隊千五六百人八代ェ着シ、右敵方本営ヘ打掛、銃器・火薬等分捕、勝利之向キ承リ候事、

同　三日（旧二月廿日ニアル）　晴

一今日モ当所番兵等之事、

同　四日　晴

一今日モ当所番兵等之事、尤狙撃隊組合相異リ、左之通リ自身組合、

一三番組

かとシマ
什長（ママ）　郷原正幹
重留　長野作太郎
下庄内　上原尚武
加治木　大石卯太郎
長島　長友佐善太
東郷　平田盛二
いち十院　帖佐熊介

一戦死墓参トシテ熊本川尻法宣寺ト云ヘ、午後一時ヨリ同隊三四名同道ニテ参リ、同三時比ニ帰陣候、尤同郷之戦死墓見受候、左之通リ、

一丑三月十八日両人共田原ニテ戦死、

佐藤眞信　野崎源次郎

一今午後三時比、敵方ヨリ寄来リ、大炮・小銃打掛候処、此方ヨリハ不打合候、夜ニ入テ打方相止候事、

丑四月五日　晴

一今日モ同所番兵ニテ候処、昨日之通敵方ヨリ発炮シ候得共、此方不打合、終ニ発炮相止候事、

同　六日　晴

一今日当所番兵ニテ候処、隈之正（熊庄、城南町）ト云フ処エ敵方相見得、各隊相掛る賦、午後七時ヨリ出隊、当▒▒寺ヘ一泊シ候事、

同　七日　雨

一各隊敵方伏場エ相掛ル賦ニテ、今午前三時ヨリ当寺操出シ、我隊ハ本隊ノ場ニテ隈ノ正川渡リ迄参候処、右川尻正面方兵相少ク故、縣（懸）念ノ向キ、応援トシテ彼方ヘ引返シ候様承リ、直ニ引揚伏居候、然ル処又々隈ノ正山手之方苦戦之向キ、彼方ヘ参リ候様相達シ、途中迄ニテ各隊引揚ケ之向キ相達シ、我隊又々右川尻ヘ引揚番兵等之事、

丑四月八日　半

一今日午後一時ヨリ川尻番兵所相異リ、中牟田（無）ト云フヘ参リ番兵候事、

一同所馬原源ト云所エ一泊シ候事、

同　九日　半

一今日モ同所番兵等之事、

同　十日　雨

一今日モ同所番兵等之事、
同　十一日（旧二月廿八日ニアル）　晴
一今日モ前条同断、
丑四月十二日　晴
一今午前四時、敵方ヨリ川越シ炮発シ、午後四時戦止ミ候、尤同隊長野氏ト五ノ十番隊伏場ヱ応援トシテ午前四時ヨリ午後四時迄参リ候事、
同　十三日　半
一今午前一時、中牟田ノ二町ト云処ヨリ破レ、各隊及戦争ニ、終ニ当方苦戦ニテ、午後一時比ニ及テ熊本迄引揚、及後熊本ノ内木山（益城町）ト云処ヱ趣賦ニテ、午後九時ニ同県永峯（長嶺）ト云所ノ田藤家ヘ一泊シ候事、
同　十四日　晴
一今日午前六時永峯村田藤家出テ、同八時木山町ヱ着シ候事、
一午後三時ヨリ同所番兵等之事、
丑四月十五日（旧三月三日ニアル）　晴
一今日モ当所番兵等之事、尤今日熊本之内大津口ト云処ニ合戦有之、勝利ニテ馬壱疋外ニ品々分捕之段承リ、我隊出頭不致候、
同　十六日（旧三月四日ニアル）　雨
一今日各隊一同ニ敵方ヱ差掛る賦ニテ、午前一時木山町出隊、斥候差出シ相成候処、敵方一昨晩迯去候段、高（御船町）山村ト云処ニテ宿陣之賦候処、午後一時ヨリ打立三島（上カ）町ヱ着シ、然処午後四時ニ及テ敵方寄来リ、及戦争、大勝利ニテ終ニ敵方迯去リ候事、
一同七時比ヨリカタシワ（片志和、御船町）ト云処ヱ番兵候事、
丑四月十七日　晴
一今日モ同所番兵等之事、尤午後二時ヨリ木山町ヱ参リ一番狙撃ト合併之賦、同所一泊、当夜巡邏いたし候事、
同　十八日　晴
一今日モ当所本営ヱ番兵候事、
一い十院住人ヨリ便宜有之、親元ヱ書状仕出候事、
同　十九日　晴
一今日惣戦争之賦、尤午後一時ヨリ三舟及ヒ高山ノ様破レ、山手迄引揚候由承リ候、
一我隊ハ本営番兵ニテ候処、自身ト朝隈氏ト大津口本営ヱ報知トシテ参リ候様承知、書状相受取、午後二時ヨリ参リ、同八時過ギ木山ヱ帰リ候事、
一同所ニテ東郷猪輔殿ヘ面談シ候処、弟直次郎儀、手負

いたし居候得共、全快帰隊、同所在陣候様承り候事、

丑四月廿日　晴

一今日午前七時ヨリ木山町本営引取相成、隊我相連也、熊本之内矢部ト云町ヱ午後五時ニ着シ、一泊候テ本営番兵等之事、

一同郷ノ若松氏・緒方正之介・若松仲四郎・石野田氏・肥後壮右衛門・吉留氏ノ面々ヱ面談候事、

同　廿一日　晴

一今日モ同所番兵いたし候事、

一弟直次郎先達て手負ニテ候得共、全快帰隊いたし居候処、又々手負シ昨廿日熊本之内馬見原(蘇陽町)ト云フヱ参候段、同郷キ嶋(貴)氏ヨリ承リ候事、

丑四月廿二日　晴

一今日当所番兵、尤当近村ヱ各隊之内無届之隊有之、探索、隊号等聞繕方当隊ヨリ手配相成、自身ハ小谷氏ト参リ、午後四時ヨリ参リ同七時比ニ帰リ、尤田尾(田小野、矢部町)ノ村言処迄参リ候事、

一鎌田常富殿、松橋ニテ手負候処、去ル四月十五日矢部濱町ニテ死シ、当所ヘ葬有之候事、

同　廿三日　雨

一今日矢部濱町ヨリ熊本之内管村(田、矢部町)かこひと云所ヱ転営相成、午後一時ヨリ同三時比ニ着シ一泊シ候事、

同　廿四日　雨

一今日午前五時管村出立、シバサント(椎葉山)云フ大山ヲ越ヘ、午後六時ニ及テ鹿兒島県ノ内尾前(椎葉村、現在宮崎県)ト云フ村ヘ着シ、一泊シ候、尤右大山ヱ雪有之、相喰ミ候、

丑四月廿五日　雨

一今日午前六時尾前出立、当所ヨリ桐野先生ヱハ別レ、栗支尾ト云村ノ那須源六ト云家内ヘ立寄相休ミ、午後六時ニ及テ人吉之内岩野(水上村)ノ高野村ト云処ヱ着シ、一泊シ候事、尤此道ヱ野タケト云フ高岡ヲ越候事、

同　廿六日　雨

一今日午前六時高野村出立、黒ヒチ(黒肥地、多良木町)及木乗ト云処ヱ小休、午後五時ニ熊本之内人吉町米田彌平ト云宅ヘ着シ候事、

丑四月廿七日　晴

一今日当所ヘ休暇候、尤弟郷太夫平病ニテ当町ヘ参リ居候段、同郷鬼塚早左衛門殿ヨリ被相知、直ニ同道ニテ右弟在宿ヘ参リ面談シ、尤同郷之中鶴氏・川崎氏・其外衆ヘ面談候事、

一郷太夫ヨリ金弐円相受取候事、

一鬼塚氏外ニ同郷之人一名同道ニテ料理屋エ参リ候事、
一今日一番狙撃エ合兵被仰付候事、
同　廿八日　晴
一今日モ同所ヘ休ミ候、尤伊東彦右衛門当止宿ヘ被参候て諸事相咄候事、
一同隊長野氏・大石氏・同郷鬼塚氏同道ニテ料理屋エ参リ候事、
一三原雄輔殿病院掛トシテ当町ヘ参被居候様承リ、遊ヒニ参リ面談候事、
一鶴田住人ノ者、帰県いたし候便ヨリ宿元エ、弟郷太夫ト連名ニテ書状仕出候事、
丑四月廿九日　晴
一今日モ同所エ休ミ候事、
同　卅日　晴夕雨
一今日同所休ミ、尤伊東彦右衛門殿ト同道ニテ料理屋エ参リ候事、
一今日午後五時ヨリ同所士族佐々木遊水ト云人宅エ転宿候事、
一ヤタテ(矢立)及ヒ手帳等取入方ニ相巡リ候事、
一本宿米田か処エ、長野氏・大石氏・上原氏同道ニテ午後七時比遊ニ参リ候、此留主(寺)也、
一弟郷太夫エ帰県被仰付、只今帰県いたし居候様当宿ヘ参リ候段、帰リショリ承リ、直ニ平病院エ参リ候処、帰リ跡ニテ空ク同郷ノ平病人木場氏エ伝言ノ趣承リ、宿ヘ帰リ候事、
旧三月十八日丁ル
丑五月一日　半
一今日何事無シ、尤午後六時比ヨリ上原氏・長野氏・大石氏同道ニテ本宿米田彌平処ヘ遊ニ参リ候事、
丑五月二日　晴天
一今日当所滞陣番兵等之事、
一同隊ヨリ有川氏・有馬氏・長野氏・鹽津氏・堀添氏此面々、外隊隊長及ヒ監軍等エ選挙ニ相成候事、
同　三日　半天
一今日モ当所滞陣番兵等之事、
一角力見物トシテ午後二時比ヨリ同隊五六名同道ニテ、当所ノ青井大明神エ参リ候、
一三原雄輔殿止宿ヘ遊ニ参リ候処、鬼塚氏外ニ同郷ヨリノ人一名被参居候、漸(暫)時相咄候、
一鬼塚氏其外一名同道ニテ当所岡本正ト云宅エ遊ニ立寄預馳走、午後及七時ニ帰リ候事、

丑五月四日　雨

一今日同所番兵等之事、尤午後二時ヨリ同隊大石氏・上原氏同道ニテ当地岡本正ト云人処ェ遊ニ参リ候事、

同　五日　雨

一今日当所番兵等之事、

一正午時分ヨリ鬼塚早左衛門殿ト同道ニテ遊ニ出テ候、往掛ケニ当所菱刈某処ェ出兵跡祝トシテ立寄、預馳走、及後ニ同所岡本正殿所ェ参リ相休ミ、及後ニ同所近辺之酒屋ニ立寄、午後五時ニ帰リ候事、

丑五月六日　晴

一今日モ当所滞陣番兵等之事、尤午前第九時比遊撃隊長野作太夫殿所ニ大石氏・上原氏同道ニテ遊ニ参リ、帰リ掛米田彌平処ェ立寄、正午時分ニ帰リ候事、

一午後一時ヨリ為遊歩、大石氏并上原氏同道ニテ、当所近辺豊永左八郎ト云人処ェ参リ、夫ヨリ市來種藏ト云人処ェも参リ夫ヨリ帰リ候事、

一同四時比ヨリ大石氏・上原氏同道ニテ料理屋ェ出張候処、長野氏ニモ行合同席候事、

一夫ヨリ平病止宿中鶴氏・相良氏・川崎氏処ェ遊ニ参リ候事、

一右市來家ヨリ預招ニ、午後八時ヨリ大石氏同道ニテ参リ預馳走、同拾弐時ニ及テ帰リ候、

丑五月七日　晴

一今日モ当所滞陣番兵等之事、

一正午時分ヨリ大石氏・上原氏同道、為遊歩当地田町ェ参リ、茶屋休ミシ、尤旧同隊長野氏ニモ行合、料理屋ェ立寄相喰候、長野同隊人数五名モ同席候、

一午後六時ニ及テ岡本正殿所ヘ大石・上原之両名同道ニテ立寄、尤同県大迫氏・生駒氏・白石氏ニモ同席、預馳走、同九時比ニ帰宿候、

一午前十一時、前晩借用明燈返却トシテ市來氏ニ一時参ル、

丑五月八日　晴

一今日モ当地止陣候、尤同隊大石氏・上原氏・遠矢氏同道、午前第十時比ヨリ為遊歩、当城内ェ参リ、原城ト云フ処之有瀬某及ヒ馬場圍滋殿・相良某・那須某等之宅ヘ立寄、茶相給リ茶相貰ヒ、午後二時ニ及テ帰宿候事、

一午後四時ヨリ同隊五名同道ニテ向町ェ参リ、料理屋ェ立寄遊会、午後七時ニ帰リ候事、

丑五月九日　半

一今日当所滞陣候、尤県本便宜有之、親本(許)ェ書状一封仕出候、

一午後七時ヨリ大石氏同道ニテ市來種藏処ェ預招キ候テ参リ、預馳走帰宿候、尤夫卒十介・八郎介列越候事、

同　十日　半

一今日モ当所止宿、番兵等之事、

一午前十二時ヨリ上原氏・大石氏同道ニテ、旧同隊長野氏処ェ参リ、一時相咄し、及後ニ向町七日町ノ岩城岩吉云人宅ェ参リ、焼酎相喰候、午後六時ニ帰リ掛ニ近藤氏・池上氏等ェ行合、是も同道ニテ帰掛ニ岡本氏処ェ寄、茶相給リ帰宿候事、

一当隊ノ儀、今夕中隊編製(制)相成、中隊長小倉壯九郎、自身左小隊長(行カ)ニテ候、左小隊長大野藤太郎、半隊長市來政明、分隊長倉山藤太郎ニ候事、

一弟直次郎事手負ニテ両度入院いたし居候処、平癒帰隊之由承リ候事、尤振武五番、

丑五月十一日　半

一今節ニ狙撃隊編製方ニ候、各人員入混レ自身儀ハ左小隊三分隊ニテ、押伍竹ノ内實彦ト云人也、仍て宿陣佐々木氏ヨリ白坂彦吉ト云人処ェ転宿候、白坂氏子息白坂滿哉ト云人也、

一正午時分ヨリ同隊大石氏・上原氏・帖佐氏同道ニテ向町方ェ遊歩トシテ出、鬼塚氏ェも逢ヒ、共ニ当町料理屋ェ立寄候事、

一同郷東郷猪輔殿ェ面談シ候事、尤本人平病気之由、

丑五月十二日　半

一今当所滞陣、午後三時比ヨリ同隊上原氏・圖師氏・大石氏同道ニテ向町岩城岩吉処ェ参リ、酒相喰ミ帰リ候、

同　十三日　半

一同所滞陣、尤午後三時ヨリ同隊上原氏・圖師氏・大石氏同道、為遊歩向町ェ参リ、料理屋ヘ寄、帰リ掛ニ菱刈氏ェ立寄、茶相給リ夕方ニ帰宿候、

同　十四日　雨

一今日当隊中隊共々午前十一時武装検査有之、尤以来左右小隊一日越ニテ右同断、且当番相勤、外出不相成候筋承知候事、

一門限クレ迄相究候事、

一午後二時ヨリ同隊野村氏・上原氏・圖師氏同道ニテ、為遊歩、町マンヂウ屋ェ参リ相給リ、夫ヨリ岡本正殿

宅ェ参リ、酒肴等相設候事、

丑五月十五日　雨

一今日左小隊当番前ニテ番兵相勤、外出不致候事、

一同郷ノ東郷猪輔殿、為面談当宿営被参候事、

丑五月十六日　快晴

一今日同隊上原氏・大石氏・圖師氏同道ニテ外出、尤出掛ニ市來氏ェ立寄、一時相咄し、及後市中ェ出テ、自身ト圖師氏丈ハ東郷猪輔殿止宿ヘ遊ニ参リ、一時相咄し、又東郷氏モ同道ニテ当町料理屋ェ立寄、酒相喰ミ、又為遊歩当士族西勇雄殿ト云人処ェ参リ、一時相咄し、夫ヨリ帰リ掛ニ大石氏・村山氏ェ出会、同道ニテそば屋ェ寄相喰、及後原城那須某所ェ参リ、漸時相咄し焼酎預進相給リ、夫ヨリ帰リ掛ニ旧隊長野作太郎殿止宿米田カ所ェ参リ、焼酎相給リ午後七時ニ帰宿候事、

丑五月十七日　雨

一今日当番ニて外出致さす候、

一神瀬傳殿ト云人ェ面会、

同　十八日　晴

一今日同隊上原氏・圖師氏・帖佐氏・池上氏・野村同道ニテ外出候事、

一平病宿東郷猪輔殿在宿ヘ参リ、右人員共ニ七日町岩城岩吉処ェ参リ、酒相給リ、及後西弘司殿所及ヒ税所助三郎殿所、園田里右衛門殿所等ェ立寄候、夫ヨリ帰リ掛ニ長野作太郎止宿米田か宅ェ参リ、右長野氏同隊衆ノ面々ヨリ預馳走帰リ、尤右同道ノ人員ヨリ外ニ同隊ノ村山氏及大石氏・小谷氏ニも同席、同道ニテ帰宿候事、

一肥後達四郎殿平病気ニテ当町ェ被参候段承リ、

同　十九日　半

一今日当番前ニテ外出不致候、尤鬼塚早左衛門殿当宿ヘ被参、古郷(故)ヨリ便ノ人参リ候段被相知候事、

旧四月八日ニ丁ル

丑五月廿日　晴

一今日非番前ニて午前七時ヨリ肥後達四郎殿病室ェ遊ニ参リ面談、諸事相咄し、尤古郷ヨリ平民参リ居、明日帰県之向キ、家内其外ェ伝言等相頼ニテ帰宿候、

一知識氏・帖佐氏同道ニテ器械方ヘ銃器聞繕方トシテ参リ、向ヘ町ェ遊歩帰宿候、

一同郷之生駒矢八殿夫卒諏方市之介・田海村百姓壱人、今朝面談シ候事、

一同隊大石氏・上原氏・圖師氏同道ニテ、午前十一時ヨ

リ出外(外出)候、尤旧隊長野氏在宿米田か宅ェ参リ、漸(暫)時相咄し、夫ヨリ染屋町佐藤ト云ソバ屋ェ寄、夫ヨリ岩城岩吉所ェ参リ、諸品相喰ミ夕方ニ帰宿候、

一下庄内之隊之人知(知人)左之通リ、隊長安藤幸彦、半隊長皿(相)良彦四郎、分隊長大牟田越右衛門、四役場築地辰之丞・黒木休左衛門・桑畑連四郎・松浦甚左衛門都合七人米田彌平か宅ニテ知人候事、

丑五月廿一日　晴

一今日当番ニテ毎之通番兵等、外出不致候事、

同　廿二日　晴

一今日同隊大石氏・圖師氏・上原氏・大迫氏・野村氏・橋口氏・大保氏・小谷氏同道ニテ外出、こん屋町そば屋ェ寄リ相休ミ、及後ニ大迫氏・小谷氏・大石氏・上原氏此四名ェ別れ、残人数七日町岩城岩吉処ェ参リ、遊会也、夕方ニ帰宿候事、

丑五月廿三日　晴

一今日狙撃左小隊大野口(葦北町)破れ、右ェ援兵トシテ操出(繰)ニ相成、尤午前第六時止宿出立、一小路(一勝地、球磨村)ト云村本営ェ小休、午後四時比ニ大瀬(球磨村)ト云村ェ着シ、在宿相休居候処、元通引取候様承知シ、即引揚、渡(球磨村)リト云村ェ小休、又一小路小休、午後十二時過ニ本在宿白坂氏ェ着シ候事、

市小路(一勝地)村ニテ同郷村尾伊三左衛門殿外ニ両名ェ不図面談シ候事、

丑五月廿四日　晴

一狙撃右小隊今日午前十一時比、渡リ村ェ為応援御繰出相成候事、

一同隊知識氏・帖佐氏・圖師氏同道午後一時ヨリ外出、諸々遊歩、同七時帰宿候、尤帰リ掛ニ橋口氏・小谷氏・野村氏ニも同道帰(龍)リ罷リ候事、

同　廿五日　晴

一今日午前二時比、人吉御出立ニ付、午後二時比ヨリ宿主白坂滿彌殿ト鮎かけニ出候て、同五時比帰宿いたし候処、同郷之東郷猪輔殿被参候て、書状遣シ有之、披見候処、宿元ヨリ書状到来ニ付、受取方トシテ新町岩田喜平止宿へ参リ候様相達シ、直ニ暇貰ヒ右処ェ参リ、面談候処、左之通リ書状参居候、

一去ル五月十六日認之書状、家父ヨリ之状今日相達候、

一同五月廿日認之木脇傳五左衛門殿ヨリ之状、今日相達候、尤鬼塚氏・東郷氏・永倉氏・自身其外衆ェ連名也、

一帰リ掛ニ岡本正殿処ェ立寄、暇乞之盃ニ預リ相給リ午

後七時比帰宿候、

一当隊付夫卒中摩十介、兵隊ニ加入被仰付、今日当隊ヨリ出し候付、

丑五月廿六日　晴

一今日大斥候トシテ左小隊四番分隊ヨリ三番迄三名除之外出隊相成、自身同様人吉止宿白坂氏午前十時出立、(二武、錦町)市來ト云村并ニ(兎田町)兎田茶屋等ヱ小休ミ、同県湯ノ前之内、(湯前町)猪ノ鹿倉村ト云ヱ午後六時着、同所一泊シ候、

一右里程七リ半、

同　旧四月十五日　廿七日　晴

一今日猪ノ鹿倉止宿、午前七時出立、猪之鹿倉ト云フ大山ヲ越テ、同山之内人家ヱ小休、又(西米良村)村所ト云処ヱ三度小休ミ、雨ツヽミト云フ山ヲ越、旧宮崎県之内、旧米(西米良村)良ヱ午後五時ニ及テ着シ、同所一泊いたし候事、尤当所ヱ(西郷)先生も被為入候事、

一右里程八里也、

丑五月廿八日　旧四月十六日丁ル　晴

一今日米良小川午前七時出立、(西米良村)越野尾村ト云ヱ小休、午後一時比ニ、旧佐土原内尾留(尾鈍、西都市)ト云村里ヱ着、当所一泊候、尤此里程四リ半ニて大山中ニ候事、

同　廿九日　晴

一今日尾留リ午前七時出立、(西都市)笹ノ元ト云、并南方(西都市)杉安ト云ヱ小休、正午時分ニ及テ旧佐土原之内(西都市)妻万町柳屋平太郎ト云宅ヱ着、一泊候、尤此里程四リ半ニて候事、

同　三十日　晴

一今日午前一時、妻万町止宿出立、同八時比ニ旧宮崎県城ヱ着シ宿陣候、尤午後二時比ヨリ同隊野村氏・長友氏同道ニテ外出、諸々遊歩、上町料理屋ヱ寄、一時相休、同六時比ニ帰陣候事、

此里程六リ也、

丑五月卅一日　晴

一今日モ当所滞陣、午前ハ第十時比ヨリ同隊長友氏・帖佐氏外五六名同道ニテ宮崎神社ヱ参詣シ、守護札等申受、御酒等頂戴シ正午時分帰リ候、

一午後二時比ヨリ同隊野村氏・長友氏・山口氏外三名同道外出、諸々遊歩、中村町(宮崎市)ヱ渉リ、及後茶屋ヱ寄、又芝居見物、夕方ニ帰リ候事、

一人吉ヱ残リシ同隊之面々衆まても着相成候事、

丑六月一日　半あられふる

一今日午後三時比ヨリ同隊野村氏・上原氏・圖師氏・大

迫氏外三名同道ニテ外出、諸方遊歩、茶屋ェ寄相休ミ、同六時比ニ帰営候事、

同　二日　晴

一今日午後二時比ヨリ同隊圖師氏・長友氏同道ニテ外出、当所町ます井屋ト云ェ寄、うなきめし相喰、夫ヨリ帰リ掛ニ芝居見物シ、同隊之面々衆外五六名同道ニテ、同六時比ニ帰宿候事、

一自身所持之銃器、針打銃ト引替いたし候事、

丑六月三日　晴

一今日同隊同郷鬼塚氏見廻トシテ当陣着、同隊遠矢氏・中原氏同道ニテ被参候、尤人吉之岡本正殿ヨリ薬一包被進、右鬼塚氏持参被給、相受取候事、

一午後三時ヨリ同隊安樂氏・長友氏・野間氏外ニ両名同道ニテ外出、諸々遊歩、当所市來政常ト云人処ェ立寄、茶相給リ、又外茶酒相給、同六時比帰陣候事、

一今夕ヨリ自身共宿替ニ相成、当地上別府高橋新次郎宅ェ転宿候事、

丑六月四日　晴

一今日同様宿陣、外出不致、尤弾薬銘々何発ツ、所持之訳申出候様相達、取調差出候処、自身儀も今三拾発相受取候様承候、四役場方ヨリ相受取候事、

丑六月五日　半天

一今日午後三時比ヨリ同隊上原氏・小谷氏・圖師氏其他同道ニテ外出、諸々遊歩、同七時比帰リ候、

一当小隊・分隊混入いたし居り候処、今日順番組合相成候ニ付、自身宿陣も官宅ェ転陣いたし候事、

一今日ヨリ右左小隊隔日ニて、当番相究候事、

同　六日　半

一今日当番前ニて外出不致候、

同　七日　晴

一今日午後一時過ヨリ同隊橋口氏・村山氏・大保氏・大石氏同道ニテ外出、旧県庁見物及当所学校見物シ、及後ニ当地湖水縁之料理屋ェ寄、漸(暫)時相休ミ、午後七時比ニ帰陣候事、

丑六月八日　半

一今日番兵前ニて外出不致候、

同　九日　半天

一今日同隊帖佐氏・松下氏外五六名同道ニテ、正午時分ヨリ新別府村一ツ葉稲荷社ェ参詣シ、同所浜ェ出、網引等見物シ、酒肴等相喰ミ、午後七時比帰陣候、

同　十日　雨

一今日当直前ニて午後八時ヨリ番兵所エ出勤、翌十一日午前一時帰陣候、

丑六月十一日（旧五月朔ニテル）　雨

一今日外出不致候事、

同隊

一狙撃中隊名簿

中隊長

居鍛治屋町　小倉壮九郎

右小隊長

同樋ノ口　和田助作

半隊長

同田　代　小牧昌平

分隊長

同新屋敷　石原周一

一番分隊押伍

同後　迫　武　彦左衛門

伍長

居西　田　岩切實徳

同高麗町　有馬榮之丞

押川　武

同牛　山　隈元定治

同加治木　湯田仲之丞

同踊　荒武馮輔

同曾　木　萩原有助

伍長

同吉　野　五代與七

同萩原小路　池田彦八郎

同後　迫　山田源之丞

同加治木　二見助一

同垂　水　町田　貢

同喜　入　池ノ上信愛

二番分隊押伍

居草牟田　東條義安

伍長

同後　迫　山本英助

同高麗町　龜澤八郎左衛門

同内ノ丸　岩本八郎左衛門

同加治木　岡山平吉

同溝　邊　外山十郎

同種子島　畦地謙一

伍長

同鹽　屋　仁禮仲靜
同吉　野　藤田壽左衛門
居敷　根　槐島榮德
同加治木　古江主左衛門
同加世田　宇留島權五郎
同阿久根　河南矢四郎

三番分隊押伍

同後　迫　宮之原雄藏

伍長

同春日小路　北郷資一
同樋ノ口　鎌田彌藤次
同内ノ丸　宮原半助
同帖　佐　中村吉太郎
同山　田　竹下靜治
同垂　水　川上親美
居新屋敷　山ノ内正一
同　武　兒玉彦吉
同草牟田　隈元善左衛門

同國　分　山ノ内孝作
同帖　佐　小城榮之助
同南　方　吉見平次郎

四番分隊押伍

同花　倉　伊地知靜一

伍長

同郡(元)本　山本勘兵衛
同草牟田　大山喜右衛門
同帖　佐　中原市之丞
同東　郷　鬼塚早左衛門
居今和水(泉)　江川彦八
同田布施　遠矢助次郎

伍長

同上ノ原　新納八次郎
同後　迫　山本　秀
同加治木　高橋小次郎
同帖　佐　津曲助次郎
同今和水　近藤正晴
同知覽　朝隈勇吉

左小隊長

居諏訪馬場　大野藤太郎
半隊長
同内ノ丸　市來政明
分隊長
同西　田　倉山藤五郎
一番分隊押伍
居鹽　屋　染川亮一
伍長
同家鴨馬場　福崎政一
同堀ノ内馬場　河野　一
同鹽　屋　福永休一郎
同加治木　川原源助
同加治木　柚木新助
同加治木　安樂佐七郎
同溝　邊　野間次右衛門
伍長
同新屋敷　榎元　彦
同上荒田　田尻樂助
同串良　松下主右衛門
同加治木　竹下庄助

居田布施　遠矢為次郎
同山　田　川俣豊彦
弐番分隊押伍
同東福ヶ城　山田權十郎
伍長
同新照院　村田強兵衛
同高麗町　井上矢次郎
同西　田　森　直一
同山　田　田代通英
同加治木　壱岐孫八
同末　吉　長野祐之
同山ノ口馬場伍長　土岐平二
同新照院　山口輝昌
同帖　佐　肥後友備
居帖　佐　白坂惠一郎
同帖　佐　愛甲源左衛門
同加治木　大脇四郎太
三番分隊押伍
同草牟田　竹内實彦
伍長

同西田後馬場　川島重行
同新神橋　山口幸之丞
同福ヶ迫　知識鏑矢
同喜　入　池ノ上藤次郎
同谷　山　橋口一兵衛
同東　郷　平田盛二

伍長

同城ヶ谷　佐土原八郎
同諏訪馬場　西田八郎
居谷　山　小倉平之助
同荒　田　野村直助
同長　島　長友佐善太
同い十院　帖佐宗徳

四番分隊押伍

同吉　野　野間　叶

伍長

同高麗町　小森量助
同高麗町　大迫隆美
同西　田　田中休次郎
同加治木　大石卯太郎
同種子島　日高吉次郎
同山　川　大保誠一

伍長

同常　盤　池端清秀
同稲荷馬場　村岡彦一郎
同都之城　上原尚武
同今和泉　村山八兵衛
同出　水　圖師彌右衛門
同い十院　小谷武右衛門

〆　百拾三名

右五月四日狙撃一番二番合併シテ中隊編製(制)之事、

丑六月十二日　晴

一今日当直ニて外出不致候、

同　十三日　晴夕雨

一今日正午時分ヨリ同宿川島氏・佐土原氏・知識氏・西田氏・帖佐氏同道ニテ当地新別府村一ツ葉稲荷社エ参詣、同所ノ浜エ出テ網等見物シ、午後七時比ニ及テ帰リ候事、

旧五月四日ニ丁ル
丑六月十四日　半

一今日当直ニテ外出不致候事、

同（旧五月五日ニ丁ル）十五日　半

一今日午前第九時ヨリ同隊帖佐氏・野村氏・長野氏・小倉氏同道ニて諸々遊歩、城ケ崎町エ行キ午後一時比ニ帰リ候、

一同隊知識氏・野村氏・帖佐氏同道ニテ外出、諸々茶屋エ寄リ、午後七時ニ帰リ候、

同　十六日　晴

一今日同郷ヨリ参リシ人有リ、書状宿元エ遣候事、

（表紙）

明治十年丁丑六月十六日

日誌

鹿児島県　第三拾弐大区　三小区　東郷

平田盛二

一伊東藤太夫事、熊本県山鹿岩村（三加和町）ニ於テ丁丑三月十二日戦死、同所花見坂長源寺ト云フヘ葬候事、

一坂元喜次郎事、熊本県田原ニ於テ丁丑三月十四日戦死、同県本山村勝軍山浄勝寺ト云フヘ葬候事、

○丁丑六月十六日　半

今日当番ニテ外出不致候事、

一同郷鬼塚氏エ旅金送リトシテ斧淵村間五郎ト云者参リ、帰リ便宜ヨリ親本（許）エ書状一封仕出候、尤今日迄相記候日誌一冊并実父ヨリ去ル五月十六日認ノ書一封封込差遣候事、

但旧宮崎県下エ在宿候、

○　同十七日　半

今日同隊野村氏并長友氏・池ノ上氏・橋口氏・圖師氏同道ニテ外出、当所町書店エ参リ、紙買入、午前十一時比ニ帰リ候事、

一午後一時ヨリ同隊知識氏・帖佐氏同道ニテ生目（宮崎市）村生目八幡社エ参詣、帰リ掛福島（宮崎市）町エ小休、又在宿近辺ノ菓子屋エ立寄、醪ヲ相給リ同八時比帰リ候事、

○　同十八日　半

今日当直ニテ外出致さす候、尤今夕ヨリ番兵等之事、

○丁丑六月十九日（旧五月九日）　雨

今日午前一時ヨリ番兵致候、

一今日午後一時ヨリ同隊知識氏・野村氏・帖佐氏・小倉氏同道ニテ外出、官宅壱番宅エ遊ニ参リ、茶相給リ、及後町大黒屋エ立寄、同七時過帰リ、尤外方ニテ同郷ノ濱田源輔殿・久松氏外壱名エ不図行逢相咄し候、

○　同廿日（旧五月十日ニ丁ル）　半

今日当番ニ候得共近辺茶屋ヱ遊参候、

一同郷濱田源助殿（輔）、当陣内ヱ為面談被参候事、

○　同　廿一日　半

今日正午時分ヨリ同隊知識氏・山口氏同道ニテ外出、中村町ヱ渡、諸々遊歩、及後上ノ川原町福延屋ヱ寄、諸品相給リ候、尤外ニ壱番分隊河野氏、当分隊ヨリ川島氏被参、同座相給リ、午後六時比帰リ候事、

一今夕明日ヨリ斥候ヱ出テ候様、及承知候事、

○丁丑六月廿二日　晴夕雨フリ

○今日午前九時、旧宮崎県ヨリ同吉田（えびの市）ヱ斥候トシテ染川亮一・右小隊大山喜右衛門・柚木新助・長野祐之外壱人、自身都合七名（六）参リ候様相達シ、右時限出立、むかさ町ニテ小休し、及後ニ高岡町下町遠矢理右衛門ト云者宅ヱ立寄昼飯事いたし候、当所ヨリ馬ヱ銘々騎リ、午後八時比ニ野尻町ヱ着候、当所馬遣所馬取替同十弐時ニ小林町ヱ着、当所ヱ一泊シ候事、

○　同廿三日　半

今日午前七時かこ（籠籠）ニテ小林町出立、午後一時比ニ吉田ヱ着、相尋候処、前日転営之由ニテ、直当所出発、田（え）代村（びの市）内竹之内ト云フ村ヱ参リ、当所ヱ村田新八殿ヱ相付候事、但宿亭主下原藤右衛門ト云者也、午後四時ニ着、

○　六月廿四日（旧五月十四日丁ル）　雨

今日当所在陣、尤同組合内ヨリ染川氏・柚木氏鹿兒島ヱ斥候トシテ午後三時ヨリ差越相成候事、

○　同廿五日（旧五月十五日）　半

今日も同所止陣候事、

○　同廿六日　大雨

今日小林之様転営候、当営付大小ニ駄（荷）相転候、自身共ハ都て同様転リ候様承知候事、午前二時ヨリ当所出立、午後一時比小林町ヱ着シ候事、

○　同廿七日　大雨

今日小林本営ヨリ加治木及鹿兒島之様斥候トシテ参リ候様相達候、大山喜右衛門殿同例（列）ニテ、同所午前八時出立、かこニテ高原馬継場ニテかこ乗替、二ケ所途中小休ミ、午後七時比ニ庄内之内アラソト（都城市）云フ茶（屋脱カ）ヱ着、一泊シ候事、尤本営付越山休蔵殿ト云人も同道ニテ候、此里数都合九里、

○丁丑六月廿八日（旧五月十八日）　曇

今日午前六時アラソ茶屋かご(駕籠)出立、襲山大久保(大隅)通運会社(ニ)エ於テ馬ニ乗替、夫ヨリ清水戸長ノ出張所エ寄、馬乗代エ、同所近辺茶屋エ寄、昼飯相喰候、及後國分戸長出張所エ寄、馬乗替、午後五時ニ及テ加治木町エ着シ、然処行進隊本営相良五左衛門殿宿陣エ立寄、事情相咄、尤鹿兒島守場ハ各隊引揚、当所ヨリ帖佐・蒲生等エ護相付候段承リ、当町佐藤助左衛門宅エ一泊シ候事、

○　同廿九日　晴夕小雨

今日敵兵寄来リ一時戦争有之、自身ハ大山氏ト同宿ヘ滞在候事、

○　同三十日　晴　小雨

今日モ前日同断、一時之戦争ニ及候、尤自身大山氏ト同宿ヘ滞在いたし候処、午前八時比村田先生当所本営ヘ着相成、直ニ参リ、然処同郷之内西之別府(加治木町)村ト云ヘ外出、大山氏ト同伴ニて当村向江門ト云宅エ参リ、昼飯相喰、夫ヨリ御帰リ掛ニ戦場エ御到着、其跡ヨリ参リ直ニ御帰リ相成候事、

○午後五時比ヨリ右先生國分之内転宿被成、自身同道ニテ参リ候事、

同郷之面々衆ヘ六七人ヘ面談いたし候事、

○平田直次郎同隊之人三名エ西之別府村ニテ面談、内情承リ候処、無異之段承知候事、

○午後九時ヨリ報知トシテ、村田氏ヨリ西ノ別府村在陣別府氏所エ自身御遣相成、翌未明國分之内三組田村(野久美田、車人町)エ帰リ候事、

旧五月廿一日
○丁丑七月一日　晴

今日村田氏三組田村出立之賦、自身儀ハ、先キ行キ候様相達、午前八時出立、同十一時比國分町エ着、村田氏相待居候、午後四時比ニ右先生着、尤大山氏ニも同道也、長野祐之殿ニも被参候、自身共止宿ノ儀ハ、國分之町桐原源介処エ止宿候也、

旧五月廿二日
○　同　二日　晴

今日横川方限戦破レ、為報知大山氏同道ニテ踊郷(牧園町)之様出頭候様承知、午前十時國分町桐原止宿ヲ出立、同郷馬継所ニテ馬ヲ取、清水運送所ニテ右馬乗代(替)、午後三時踊郷本営ヘ着候、邊見氏エ相達、直ニ事情承リ、返報相受取候テ、帰リニハ、同馬ニテ翌日未明帰リ候、

○右道ニテ踊犬乞(編)ノ滝見物シ候事、

○　同　三日　晴

今日ハ午前三時比、昨日出掛之報知先ヨリ帰リ、尤帰る途ニテ茶屋ニ寄、茶・焼酎等相給リ、同四時比本村田氏止宿ヱ立寄候処、福山之様御越シ候段承リ、國分ニテ馬継所ヱ参リ、案内壱人取リ、又敷根(国分市)宿ニテ案内取替、午前七時比ニ福山郷士族和田盛禮殿及厚地政豊殿此両宅ヱ着、先生も被参居止宿候、尤村田氏儀ハ御出相成候得共、外未だ列会越、両人ハ不出候事、

○加治木町ヱ火出シ候段承リ候也、

○丑七月四日(旧五月廿四日)　半

今日村田先生転宿ニ付、自身共ニも同道ニテ福山午後二時出立、同五時比ニ及テ末吉之内通山(財部町)ト云村之士族佐土原八郎左衛門殿ト云人処ヱ着シ止宿候、尤村田氏儀ハ同村之内御宿也、且同隊前日末吉ヱ斥候トシテ出頭シ候長野氏被通掛、当宿同泊シ候事、

○同隊知識氏へも離進居候処、今日福山止宿と聞、且外隊ヨリ報知トシテ村田先生へ附相成居候人之都之城士族鎌田五郎及同郷二ノ宮幸平ト云人も同宿故、尚同道ニテ参リ同泊シ候事、

○丁丑七月五日(旧五月廿五日)　晴

今日午前五時比ヨリ村田氏通山出立、自身共儀ハ、午後三時比ヨリ同所出立、午後五時比村田氏在宿末吉之町ヱ着シ候処、同隊福崎氏ニも被参居、及後松山郷之町ヱ着、当所ヱ一泊シ候、尤各小隊も当所へ過半繰込相成候事、

○　同　六日　半

今日恒吉(大隅町)及ヒ市成(鹿北町)等ヱ炮声相聞へ、右ヱ為斥候参リ候様承リ、長野氏同道ニテ午前六時ヨリ出テ、岩川町へ小休、尤当町へ村田氏儀も被追着、夫ヨリ恒吉麓ヱ着シ候処、当所ヱ隊も引揚相成、遠矢某等ヱ本営有之、其ニテ事情承リ、及後村田氏ヱ返報トシテ帰る折節、同隊染川氏ヱ行逢、相尋候処村田氏儀ハ、恒吉之様被参候旨承リ、夫ヨリ岩川ヱハ被参(不カ)、又々恒吉之様参リ、村田氏ヱ逢、当村麓ヱ止泊シ候事、笠毛氏ヱ、

○丁丑七月七日　半

今日当所ヱ滞陣候也、

○　同　八日　晴

今日市成・百引(鹿北町)間ニ敵兵相集居、進撃トシテ各小隊繰出相成、一時之戦争、大勝利ニテ弾薬百▨・銃壱筒、其他諸品分捕、生捕之敵も百名有之、自身ト知識氏儀ハ不快ニテ出頭不致候、夫ヨリ本通宿へ村田氏も引取

相成候、
○ 同九日（旧五月廿九日） 雨
今日モ同所滞陣、外出候事、
○ 同十日（旧五月晦日） 半
今日も右同断、自身不快今日ハ快シ候事、
○ 同十一日（旧六月一日） 半
今日午前七時、恒吉在陣出立、同郷之内一リ（里）余ノ所エ戦争相発居、夫エ村田氏も御出ニ成リ、同道ニテ参リ、味方都合悪敷引揚相成候、又及後同所出テ志布志之内平山村ト云エ参リ、一泊シ候、尤午後九時ニ着シ候事、尤宮原ト云所也、
○右戦場ニテ水引宮内島本彌一郎殿エ面談シ、弟直二郎方ヘ伝言等相頼ミ置候事、
○丁丑七月十二日（旧六月二日） 半
今日午前七時、平山村出立、大崎ノ内ヒシダ（菱田）村ト云エ小休ミ、午後一時比ニ及テ志布志町エ着シ止宿シ候事、
○大崎ニテ戦争アリ、大勝リ（利）、追撃相成、諸品分捕相成候事、
○ 同十三日 半
今日午前八時比志布志町出立候、松山之内泰野村ト云フエ寄リ、昼飯相喰ミ、午後六時比ニ及テ末吉町エ着止宿候、尤当分組合之内ヨリ染川氏・大山氏・鎌田氏都之城方エ斥候トシテ出テ相成候、此里数六リ也、
○丑七月十四日（旧六月四日） 半
今日午後四時比ヨリ末吉町出立、同七時比財部之内通山村エ着シ止宿候也、里数二リ、
○ 同十五日 半
今日柴（柴建、福山町）たけ村ト云処ニテ進撃之賦掛方相成候処、些ト不都合、本通引揚相成候、尤右場所エ村田氏ニも御出相成、自身共ニも同道ニテ参リ、又本宿ヘ帰リ候事、
○ 同十六日 雨
今日午前七時財部之内高籏嶽ト云フヘ斥候トシテ二ノ宮氏ト同道ニテ参リ、同所手前荒川内村ヘ寄相休ミ、右たけ上り、午後六時比ニ帰宿候、
○同隊町田氏・松下氏今日福崎氏・柚木氏代リトシテ被参候、尤金弐円余宛銘々下金相成シ由、持参被給相受取候、
○右高籏峠ヨリ大峯村ト云フ処エ敵兵相見受、帰リ候事、
○丑七月十七日（旧六月七日） 雨
今日モ止宿候也、

○　同十八日　　半

今日窪田氏同道ニテ高城方本営エ報知トシテ参リ、午後六時比財部町出立、都之城町本営大小荷駄方ニ寄夕飯相喰ミ、同所ヨリ馬ニテ参リ、同十九日午前一時比ニ及テ高城之内大山村ト云フ所ノ本営エ着シ、事情承届候、七時比ニ帰リ候事、

○　同十九日　　晴

今日午前九時財部町出立候、十一時比ニ荘内町縁者所エ転宿被成自身共も同様転宿候、尤福山方・財部方及戦ニ不面白候也、

○荘内稲荷社陰陽石参詣いたし候事、

○午後六時比ヨリ荘内戸長所エ転宿、同所一泊シ候事、

旧六月十日
○丑七月廿日　　晴

今日午後七時比ヨリ都之城麓、瀬口某宅エ転宿止宿いたし候事、

○　同廿一日　　晴

今日モ瀬口順玄宅エ滞陣候、

○　同廿二日　　晴

今日午後七時比ヨリ末吉エ斥候トシテ長野氏同道ニテ参リ、尤奇兵本営エ着シ、明日進撃之賦、事実見聞之上帰リ候様承知候、

近郷水引萩原市助外ニ壱人面談候、

○　同廿三日　　半

今日、昨日承知之通リ、午前一時比ヨリ各隊操(縁)出相成、敵方末吉之内、笠木鍋ト云フ村エ居リ、自身共同様参リ、同七時比ヨリ戦争始リ、長野氏ハ夫ヨリ被帰、自身丈ハ各隊共ニ戦イ些ト不都合、尤身(味)方各隊引揚相成、自身も同様末吉迄引取候処、先生同道者共ニも当所エ被参居届申出、当所小休、又先生も都之城エ引取被成、自身共も同様本宿陣帰リ候、

旧六月十四日
○丑七月廿四日　　半

今日午前七時都之城戦破レ、味方諸方エ散リ、過半山口エ引揚相成、先生・自身共ニも同行参リ、田邊祐常殿宅止宿候、

○大山氏報知トシテ宮崎エ被参候、

○　同廿五日　　雨

今日同組鉾立氏ト三俣(三股町)郷エ斥候トシテ参リ候様承知、午前七時比ヨリ参リ、然処途中ニテ去ル方エ逢ヒ相尋候処、同所長田村戦破レ、彼人徳吉村エ小休ミ相成居候処、敵兵寄来ルヲ見テ被帰来候事、直ニ帰リ報知いた

し候事、

○午前八時比山ノ口戦破レ、各隊引揚相成、自身共ハ飫肥ノ内學校村(学ノ木、田野町)ト云ヱ小休シ、同所飯倉ト云村ノ長友某宅ヱ着、二泊し候事、

○同郷ノ人ヱ面談、同平民喜次郎ニ昨日都之城ヨリ引揚之節面談候、

○直次郎同隊振武五番隊ノ人ヱ逢、弟一左右相尋候処、敷根ノ戦ニテ手負シ、都之城ヱ引揚居候段承知候事、

○丑七月廿六日(旧六月十六日)　曇

今日飯倉村ヱ滞宿、尤諸方ヱ斥候報知トシテ同隊ヨリ差越相成候事、

○　七月廿七日　晴

今日鉾立氏同道ニて飫肥之内、楠原村(田野町)ヱ斥候トシテ参リ、同所破レ自身共儀ハ、飫肥ノ内清武(清武町)ト云町ヱ参リ、当所小休、夫ヨリ宮崎中村町(宮崎市)ヱ正午時分ニ着、

○同郷ノ夫卒ヱ面談シ、弟直次郎一左右承リ候事、

○当町端ヱ逃兵押之為、番兵トシテ参リ、且当川筋地景見トシテ同隊松下氏ト午後五時比ヨリ出テ、同七時比帰リ一泊候、

○　同廿八日　晴

今日戦地出張先ヱ先生も被成、自身同組同道ニテ、午前七時比ヨリ出テ、右地ヱ着いたし居候処、戦争相始リ、直ニ外方引取、自身・田中氏ハ戦地ヱ斥候トシテ参リ、午後五時比ニ帰リ、尤旧県庁脇ノ様転営ニ相成、当所ヱ帰リ、本営ヱ届申出候、

○今日戦之内、右手方シグレト(時雨、宮崎市)云処ニテ大勝利之旨承候事、

○同郷川島良右衛門殿及ヒ坂元早右衛門・濱田仲右衛門殿・木場紋四郎殿・牟田某殿・夫卒袈裟次郎面談シ候事、

○当所宮宅ヱ一泊シ候、尤当夜打散し兵隊円方トシテ市中ヱ番兵ヱ出、

○丑七月廿九日(旧六月十九日)　晴

今日散兵円方トシテ、当地近在ワシカハラ(和知川原、宮崎市)村ヱ参リ、尤同隊五名列、且午後五時比ヨリ宮崎内江平町大田屋ヱ転営止泊候、

○同隊ノ内、大石氏・大保氏・山口氏昨日戦死、

○　同三十日　晴

今日江平町午前七時出テ、宮崎内下北村(宮崎市)ト云所之戸長宮宅ヱ寄一泊候、

○　同卅一日（旧六月廿一日）　晴

今日午前十時比柏田村ト云処ニテ戦破レ、旧佐土原ノ廣瀬町ヱ引揚、自身共儀ハ、当所田中村ト云ヱ漸時（暫）相休ミ、夫ヨリ高鍋城下ヱ着一泊シ候、尤自身ハ遠矢氏ト当地川端迄散兵探方トシテ参、午後十一時比右宿ヱ着シ候事、

○同隊狙撃隊ヱ右場所ニテ逢ヒ、且豊後地ヨリ応援トシテ壱中隊当所ヱ着シ、追々外ニモ援兵参リ之賦候由、

○丁丑八月一日（旧六月廿二日丁ル）　晴

今日当止宿、午前七時出立、当町ヱ相休、夫ヨリ近辺ヱ止宿候、

○弟直次郎ヱ当町ニテ出立後始テ行合、諸相咄シ、両人角（スミ）ト云処ヱ直ニ参リ候、

○坂元宗太郎殿・牟田殿手負ニテ被参、面談候事、

○　同二日　晴

今日廣瀬川上ヨリ戦破レ候間、自身斥候として午前六時ヨリ参リ、途中迄ニ確乎相知リ、猶同組鎌田五郎殿ニも被参候、自身丈ハ直ニ帰リ返報いたし候事、

○午前十一時比高鍋町被乗取、各隊高鍋之内津野町（都農町）ト云ヱ引上、尤自身儀ハ、染川氏并遠矢氏等ト散兵操（繰）止方トシテ漸時跡ヱ残リ、午後七時比ニ及テ津野町へ着シ届申出候、且当所一ノ宮神社（都農神社）ヱ参詣シ、漸時休ミ候事、尤四リ、

○午後九時比ヨリ当所出立、本高鍋之内旧みゝつけん（美々津県）城ヱ同十一時比ニ着、小休し候事、尤三リ、

○　八月三日（旧六月廿四日）　晴

今日午前二時比ヨリみゝつけん下出立、同六時比ニ旧天領新町（日向市）ト云所ノ江東壽（ママ）ト云人宅ヱ着、相休ミ、

○弟直次郎ヱ当町ヱ面会、万事相咄し、同人延岡之様参リ候事、

○右里数みゝつより（日向市）三リ止宿候事、

○　同四日　雨

今日モ富高新町（日向市）衛藤壽（ママ）殿宅ヱ滞宿候、

○　同五日　半

今日午前第九時比ヨリ、細島台場地景検査トシテ御出、自身共ニモ参リ、当所町ヱ漸時相休、午後一時比ニ及テ帰宿候事、

○丑八月六日（旧六月廿七日）　晴

今日午前七時富高新町出立、狙撃丈ハ都て本隊ヱ帰リ候様承知、延岡大貫村ト云所ヱ止宿候テ、当所ヱ午後

六時比着、止泊し候事、五里、

○　同七日　半

今日当所ェ止宿候事、

○午後六時比ヨリ同村近辺湯川覺太郎宅ェ転宿候、

○　同八日（旧六月廿九日）　雨

今日モ滞宿候、尤当隊外出不致候様達相成候事、

○当隊左小隊ェ右ヨリ加入隊（編脱カ）製相成（制）、尤自身組合、押伍長瀬間之丞・伍長大山喜右衛門・同森直一・長野祐之・知識鏑矢・肥後友備・大保誠一・自身都合八人之分隊也、

○今午後九時比ヨリ大貫村出立、同十一時比延岡城下和田文六殿宅ェ着、一泊候、

○丑八月九日（旧七月一日）　雨

今日午後六時比和田氏出立、川向先ェ行賦候処、舟都合不調故、当本通リ近辺ノ士族某宅ェ立寄一泊し候、

○　同十日（旧七月二日）　雨

今日午前七時当所出、川舟ニテ延岡之内（北川町）芳賢（方財カ）村ト云ェ着舟、同所小休、夫ヨリ当所之内深瀬（北川町）村平民宅ェ午後七時比着、止泊、尤当夜即当所吉祥（北川町）寺ト云ェ先生ノ番兵等之事、宿主岩城梅吉、

○丑八月十一日（旧七月三日）　晴

昨夜ヨリノ番兵ヨリ、今日午前六時止宿ェ帰リ滞宿之事、

○午後八時比ヨリ同県ハシギシト云フ村平民與七宅ェ着一泊候、

○　同十二日（旧七月四日）　半

今日同所近辺竹林清吉宅ェ自分隊転宿いたし候て、魚釣等ェ参リ候事、

○　同十三日（旧七月五日）

同所滞陣也、尤延岡城下敗走之報知アリ、

○　同十四日（旧七月六日）　晴

今日延岡ノ内隅田（隈田、北川町）ニ於テ大会議アリ、延岡本道ヲ突ノ策立、豊後地ェ守兵ヲ悉皆午後十二時迄隅田ノ様引揚ノ賦相決候、

○　同十五日（旧七月七日）　晴

今日午前五時比、川舟ヨリ延岡永江（長井）村笹野（北川町）ト云フ処ェ上陸、即チ進軍候得共、一時ノ戦争、遂ニ及敗軍ニ、惣軍永江村ェ集ル、

○　同十六日（旧七月八日）　晴

今日永江村ニテ防戦、

○　同十七日（旧七月九日）　晴

今日午後十時比、前中後軍三軍ニ分チ暗夜ニ山手ヲ登リ、延岡ヱ突出ルノ策ニ候処、可愛嶽ノ下ニテ夜明ケ其策不立、惣軍可愛嶽ニ登ル、

○　同十八日　晴

今日午前六時比ヨリ可愛嶽東山下ニアル官軍英兵（衛）ヲ攻撃シ、大勝利ニテマルチネル銃新筒四箱、及ヒ其他銃器・弾薬・酒肴分捕候事、

同日祝子（ホブリ）川ニ入ル賦ニテ進軍スル途中ニテ夜ニ入、深山ヱ一時休ミ、

○　八月十九日（旧七月十一日ニテ了ル）　晴

今日午前六時ヨリ、祝子川ヱ向ヒ進軍、途中ニテ戦争勝利、遂ニ夜ニ入一時休ミ、

○　同廿日（旧七月十二日）　半天

今日午前四時比ヨリ、祝子川ヘ向ヒ進軍、途中ニテ合戦勝利、途中ヱ村落ノ一家アリ、一時休ミ、其地ニテ牛ヲ刺キ、生ニテ喰ミ、夫ヨリ祝子川ヱ着シ一時休ミ、夫ヨリ坂道ヲ越テ獅子川ヱ入、官軍、糧食課ヲ焼キテ遁逃ス、爰ニテ良食ス、一時休息、午後十時比ヨリ高千穂ヱ向ヒ進軍、

八月廿一日（旧七月十三日）

今日高千穂ヱ向ヒ進軍、地名不存、途中村落ノ一家ヱ休ミ、麁食ス、夫ヨリ坂道ヲ越ヘ高千穂ノ旧天領ノ大庄屋ナル家ヱ夜半比ニ着シ、一時休ミ、三田井（高千穂町）ヘ向ヒ進軍、一時合戦大勝利、軍用金四万円、其他軍用品数不知分捕、一泊シ候事、

○　八月廿二日（旧七月十四日）　晴

今日午前八時三田井新町出立、山中而已進軍、地名不存、途中諸所ヱ一時ノ休ミ、昼夜ノ分ナク進軍候事、

○　同廿三日（旧七月十五日）

今日三門（神門、南郷村）ヱ向ヒ進軍、途中戸数十四戸位ノ村落ヱ一泊ス、地名不存、

○　同廿四日（旧七月十六日）

今日午前七時比三門ヱ向ヒ進軍、途中ニ川アリ、筏ヨリ川中ヲ渡リ午後二時比ニ三門ニ着シ、小休ミ居ルニ官軍ヨリ奇（密）来リ直ニ戦争、一時勝利、爰ニ官軍病院アリ、患者弐百余名アリ、味方ヨリ之ヲ保護ス、官医一名・七等出仕一名降伏シ、其儘連越、漸時防戦、後ニ及テ雉子野（鬼神野、南郷村）ニ入、爰ニテ粮米其他弾薬・軍用品数知レス分捕、一時休ミ、夫ヨリ土川（綾川カ）ニ向ヒ進軍、

○ 八月廿五日（旧七月十七日） 大雨

今日土川ニ着シ、一時休ミ、深山坂道ヲ越テシロミト（銀鏡、西都市）云処ヱ着シ、爰ニテ巡査兵ヲ三名殺害シ一泊シ、

○ 八月廿六日（旧七月十八日） 大風雨

今日午前七時比ニシロミヲ出テ高山ヲ越ヘ、本米良ノ内村所ト（西米良村）云処ヱ午後六時比ニ着、一泊シ候、

○ 同廿七日（旧七月十九日） 晴

午前二時比村所出立、上板屋ト（西米良村）云ヲ越テ人吉ノ内村離ニ一家アリ、地名不存、一時休ミ、釣橋ヲ渡リ深山谷ニ入リ夜白進軍、

○ 八月廿八日（旧七月廿日） 晴

今日当県内、須木郷ノ内村落ノ人家ヱ出テ食事ス、夫ヨリ坂道ヲ越テ小林郷ニ出テ、巡査兵等ヲ追撃、爰ニ一泊シ、

○ 同廿九日（旧七月廿一日） 晴

今日午前四時比小林郷出発、飯野郷（えびの市）ニ着シ、一時休ミ、夫ヨリ栗野郷ヱ着一泊、

○ 同卅日（旧七月廿二日） 晴

今日午前二時比栗野郷出立、横川郷ニ進撃、爰ニテ防戦、道ヲ替ヘ踊郷（牧園町）ヱ向ヒ、加治木郷ヱ出ルノ策相立進軍候処、又々官軍踊郷ノ野原ニ防ノ手段アリ、依テ溝邊郷ヱ突出スルノ策相立ツ、

○ 八月卅一日（旧七月廿三日） 晴

今日午前二時比ヨリ間道ヲ忍ヒ、溝邊郷ニ出ルノ途中ニテ不意ニ官軍ヨリ炮発、一時防戦、官軍央ハ加治木ニ、央ハ横川ニ引キ、依テ山田郷（姶良町）ニ突入、続テ蒲生郷ヱ突出ス、爰ニテ巡査兵ヲ数名殺ス、夜ニ入テ一時休ス、

○ 九月一日（旧七月廿四日） 晴

今日蒲生郷ヲ午前一時比ニ出立、吉田郷（吉田町）冷ノ松ヱ一時休息、吉野村ヱ突入、同所学校ニ於テ軍議ノ処、官兵突然後ノ山ヨリ炮撃ス、依テ前軍ハ鹿兒島ヱ突入、後軍半道ヲ絶レ、中軍半ハ官兵ヲ攻撃ス、即チ城山ヲ乗取、軍用品分捕数分ラス、味方兵ヲ県庁内并城山私学校跡・入來院跡等ニ置ク、漸時ノ合戦炮撃破竹ノ如ク本日邊見十郎太手負ス、阿多壯五郎重創ニテ死ス、今日本営ハ上一ツ橋田中七之丞所ヱ置ク、一時ハ谷山郷迄も領シ、磯辺迄追撃、谷山郷ヱ味方病院ヲ置候、

○ 九月二日（旧七月廿五日） 晴

今日本営ヲ岩崎ヱ直ス、護営ス、谷山口・磯辺等も防

兼破走、

○ 旧七月廿六日 九月三日　晴

今日諸墨台防戦而已、

○ 旧七月廿七日 同四日　晴

今日護営(衛)兵ヲ諸所ノ墨台エ配ル、自身私学校跡エ守護ス、今日午後四時比貴島清ノ計策ヲ以テ金蔵(米)エ切込ノ軍議ニ決シ、午後十一時比ニ至リ、貴島清外六拾名、官軍墨台迄突込候処、遂ニ敗走、討レヌ者ハ引揚候事、

○ 旧七月廿八日 九月五日

今日各隊十二小隊編製(制)ス、兵員一小隊ニ十六名或ハ廿名位ナリシガ、我隊号ハ第二小隊ニテ、私学校跡ヨリ旧御殿冷御門迄兼ネ、尤防戦之事、

○ 旧七月廿九日 九月六日

今日受持場墨ニ於テ防戦之事、

○ 旧八月朔日 同七日

今日モ同断、

○ 旧八月二日 同八日

今日モ同断、

○ 旧八月三日 同九日

今日自身儀、服痛(腹)ノ酌気(癇)相発シ、台場ニテ防戦ナガラ、種々療養相加へ候得共、弥増苦痛候ニヨリ、岩崎内ノ仮病院エ同郷ノ鬼塚早左衛門ヨリ被送、入院薬用いたし、諸墨台ハ矢張防戦ノ事、

○ 旧八月四日 九月十日

今日モ病気不快、院中エ罷居苦入候、尤食料ハ乏シク患者ハ多ク、毎日ノ防戦ニ手負・即死、昼夜ノ別ナク手負院中エ送リ、日々五六名ツヽ死ス、或ハ脱走スル者モ間々有之、追日手薄キニ相成、今日ニ至リ味方兵僅ニ弐百廿余名位ノ由、実ニ切迫ノ事也、

○ 旧八月五日 九月十一日

今日モ同断、尤官軍ヨリ四方ニ大炮ヲ発シ、四方ヨリ撃ツ事雷鳴ノ如ク、一寸ノ間モナク、間々自身共院中エ破列(裂)シ、患者ヘ中リ死スアリ、

○ 旧八月六日 九月十二日

今日モ同断、

○ 旧八月七日 同十三日

今日モ同断、

○ 旧八月八日 同十四日

今日モ同断、

○ 旧八月九日 同十五日

今日モ同断、
○ 同十六日（旧同十日）
今日モ同断、
○ 同十七日（旧同十一日）
今日モ同断、
○ 九月十八日（旧八月十二日）
今日モ同断、
○ 九月十九日（旧同十三日）
今日院中患者快方ノ者ハ、帰隊可致候様達シ相成候得共、自身儀ハ快ヨカラス故、帰隊不叶候事、
○ 九月廿日（旧八月十四日）
今日も同断、
○ 同廿一日（旧同十五日）
今日モ同断、
○ 同廿二日（旧八月十六日）
今味方本営ヨリ官軍本営へ使斥トシテ、河野周一殿（主一郎）・山野田市助（一輔）殿差越ニ相成、河野氏丈ケ、其儘被召捕、山野田氏帰営有之候得共、右之趣ハ不承候事、
○ 九月廿三日（旧八月十七日）
今日午後三時比ニ、岩崎内味方病院三軒共ニ病院ト記載シ、白地ノ旗相建疑案スル央ニ、伝承スルニ不計機ノ催ニ付、病院丈ハ必ス旗建置候様村田新八殿ヨリ仍沙汰ニ相建候由承知候事、
○ 九月廿四日（旧八月十八日） 晴
今日午前第二時比、官軍四方ヨリ、一同時（鬨）ノ声ニテ砲声天ニ轟キ、勢ヒ破竹ノ如ク、自身儀ハ院中ニ苦居候ニ付、落城ノ上ハ殺ツセラルヽハ必然ノ事ニテ、決死ニ格護罷居候処、未夜モ明サルユヘ、砲声ヲ聞計、味方サヽエノ炮声モ不聞、次第ニ炮声モ近ツキ、早暁ニ至リ、官軍城山エ攻撃、自身病室ヘモ攻込ニ相成、已ニ殺サルヽ賦ニ存居候ニ、病室四方ヨリ銃剣ヲ以テ突破ラルヽ時ニ、巡査隊ノ隊長ト見認シ人、一分隊位ヲ引率シテ入来、暴攻（行）不致候様トノ指令ニテ治リ、院中ノ人員エ問ハルヽニ、降伏カ否哉トテ□（促カ）サレ候、患者各降伏ノ返答候、其儘助ケラレ、西郷・桐野・村田其他先生衆即時討死ノ趣伝承シ、諸墨台エ配兵ハ、夜明ニ至リ、死残リシ者ハ、銃器・刀ヲ捨テ、病院エ逃込者モアリ、城山エ潜伏スル者モアリ、遂ニ縛セラレ、或ハ顕出シテ降ヲ乞フ者モアリ、岩崎内味方三軒ノ病室ニ自身入室ノ外二軒ニハ院中エ攻込、患者尽ク殺害

シ、二室共ニ其儘火ヲ放チ、死体共ニ焼失セリ、焼死人廿人位ノ由、実ニ混雑ナル事記載スルニ難尽、本日午前五時比ヨリ炮声止ミ、弥落城治リ、自身病室ニハ賊病院ノ故、見物人数日幾千人カ不知、誠ニ遺憾ナル哉、即日ヨリ官ヨリ御引受ケ御賄等下リ、人夫ヲ立テ病院不潔ニアルヲ清潔ニ掃除等御手当ニ相成、外国人モ三名検査トシテ入来、病院門ニハ護兵ヲ置ル、、官医等モ検査ニ相成候テ、直ニ療養被成下候事、

○ 旧八月十九日 九月廿五日

今日官医三浦良佳外三名入院ニテ、薬種等御手当且看病人・賄夫等数名御雇入成、懇篤之御沙汰ニ及候、養生等モ御手厚ク行届、意外難有事ニ候、尤県令岩村公モ検査トシテ入院相成候事、

○ 旧八月廿日 九月廿六日

今日掛医官ヨリ患者尽ク診察ニ相成、薬用充分ニ行届キ、益快方ニ趣キ候事、

○ 旧八月廿一日 同廿七日

今日モ同断、

○ 旧八月廿二日 同廿八日

今日モ同断、

○ 旧八月廿三日 九月廿九日

今日征討ノ宮様城山戦地御検査ニ相成、尤御入艦ノ節ハ祝炮盛也、

○ 旧八月廿四日 九月卅日

今日官軍諸塁台ヲ解カル、、

○ 旧八月廿五日 十月一日

今日モ同断、尤自身病気モ弥増快方、外軽創ノ患者ハ同断、

○ 旧八月廿六日 十月二日

今日モ同断、

○ 旧八月廿七日 十月三日

今日モ同断、

○ 旧同廿八日 同四日

今日自身尋万トシテ家内ヨリ下人長次郎ヲ遣、院中エ入来リ、門護兵ヨリ連越面会、大概事情相咄、直ニ差戻シ候、尤田海村今村ノ三助同道ニテ参リ候事、

○ 旧八月廿九日 十月五日

今日同様院ノ中、薬用之事、

○ 旧八月晦日 同六日

今日モ同断、

○ 十月七日（旧九月一日）

今日快方ニテ退院ヲ院長ェ申出候処、筋々ェ引合、申出通可然筋承知いたし候事、

○ 十月八日（旧九月二日）

今日右同断、（旧九月三日）

○ 同九日

今日モ右同断、（旧九月四日）

○ 同十日

今日モ同断、（旧九月五日）

○ 同十一日

今日モ同断、（旧九月六日）

○ 十月十二日

今日申出通リ退院相調、自身外ニ三名一所ニ退院相成、一名串木野濱士族平地庄之進、一名ハ長島郷士族南六左衛門、一名ハ鹿兒島近在ノ平民都合四名共ニ警視隊銃卒一名院中ニ入来、病院掛人山本某ヨリ右銃卒ヘ引渡ニ相成、本日午前十二時比ニ、本日置屋敷警視出張所ェ護送セラレ、当監獄ヘ入レラレ候事、

○ 十月十三日（旧九月七日）

今日午前第八時当所糺明局ヨリ御用有之、罷出候処、始終御糺方之上、申出之口供御書取ニ相成候テ、漸時右獄丁ェ扣居候様被達、扣居候処猶再度御呼出ニ相成、罷出候処、前ニ申出シ口供書御読揚ニ相成候テ、右ェ爪印可致候様被達、達之通爪印シ候処、別段之御取訳ヲ以自宅謹慎申付ラルヽニ付、右通被仰付難有御請仕候趣書付ヲ以申出候様被達、直ニ御請書認メ差出候処、即時帰宅被仰付、時ニ午後二時比也、夫ヨリ自身入院いたし居候病院ェ差越、院中患者面々ェ事情通シ、暇乞シテ、矢張前日一所ニ退院之人南六左衛門・平地庄之進、外一人ハ日置屋敷警視署ニテ別レ、三名同連ニテ、当日午後四時比ヨリ鹿兒島ヲ出立、同九時比ニ伊集院町泊宿ヘ着、一泊シ候事、

○ 十月十四日（旧九月八日）

今日午前第六時、伊集院町三名共ニ同連ニテ出立、平地氏丈ハ串木野故、当所ニテ別レ、自身儀ハ、勝目遠矢氏ェ立寄漸時相咄シ、夫ヨリ南氏ハ大小路町ェ一泊之賦ニテ、帰リ掛当止宿ヘ立寄、暇乞シテ午後四時比ニ及テ帰宅いたし候事、